

文部科学省特別経費（教育関係共同実施分）

看護学教育における FD マザーマップの開発と
大学間共同活用の促進プロジェクト
活動・成果報告書

2011 年度～2015 年度

平成 28 年 3 月

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

はじめに

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター(以下、本センター)は、平成 22 年度に全国の看護系大学の教育の質向上のための看護学教育研究共同利用拠点(以下、拠点)に認定され(26 年度まで)、平成 27 年度に再認定されました(31 年度まで)。拠点の中核事業として、2 つのプロジェクト「教育—研究—実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」(平成 22—26 年度)、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進(以下、FD マザーマップ開発)」(平成 23—27 年度)を行い、本センターの他の研究・研修事業を連繋させながら、拠点としての機能強化に努めてきました。今回、FD マザーマップの開発過程と成果、および今後の事業展開について、ご報告致します。

FD マザーマップは、看護系大学が急増し多様化が進む中で、各看護系大学が体系的に FD を企画・実施し、効果的・効率的に教育の質を改善するために活用することを目指して開発しました。開発過程は 2 期で構成し、第 1 期(平成 23—25 年度)は、9 大学 11 人の看護学教員、5 機関 5 人の教育学研究教育者のご協力を得て、FD マザーマップを開発しました。あわせて、FD マザーマップの活用推進に向けて FD プランニング支援データベースを構築しました。第 2 期(平成 26—27 年度)は、14 大学 15 人の看護学教員とともに FD マザーマップ紹介コンテンツ 8 件、FD 企画者向けコンテンツ 2 件、FD マザーマップ対応型教材 10 件を開発しました。

こうした開発研究の成果を、各看護系大学における管理的立場の教員を対象とした平成 26, 27 年度の看護学教育ワークショップにて報告し、内容を共有しました。また、17th East Asian Forum of Nursing Scholars International Conference にて Best Poster Award を受賞、10th International Nursing Conference における招聘講演等、国外でも高く評価されました。これまでに 28 大学が FD プランニング支援データベースを活用し、159 大学が FD マザーマップに関する講演会等の研修に活用しました。各大学からの FD 研修の講師依頼等に対しては、本センター教員全員が看護システム管理学専攻の兼任教員として、組織の課題解決支援を行っているという特徴を活かし、各大学における組織的な教育の質改善支援の観点から、取り組んできました。

今後さらに、全国の看護系大学における FD マザーマップと FD コンテンツの活用方法、および教育の質向上に関する成果の共有を推進するとともに、平成 28 年度からは、文部科学省特別経費による「教育の継続的質改善」プロジェクトを開始し、各大学の継続的・組織的な教育の質改善に関する支援に取り組めます。

全国の看護系大学の教育の質向上に向けて、お忙しい中で、本センターとともに FD マザーマップ開発に取り組んでくださった皆様に心から感謝申し上げます。今後どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

目 次

I. プロジェクト概要	
1. プロジェクトの目的・意義.....	1
2. 取り組み内容（プロジェクト概要）	2
3. 実施体制	7
4. まとめ.....	9
II. 活動実績とその評価	
1. FD 専門家会議	10
2. FD マザーマップの開発	
1) 開発のプロセス.....	14
2) FD マザーマップの構成・枠組	21
3) 活用方法	42
3. FD プランニング支援データベースの開発	
1) 開発のプロセス.....	44
2) 活用方法	45
4. FD コンテンツの開発	
1) 開発のプロセス.....	48
2) 開発コンテンツ.....	50
3) FD マザーマップ コンテンツ開発・実践の往還と発展.....	60
5. FD コンサルテーション事業	
1) コンサルテーション実績.....	62
2) FD マザーマップに関連した看護系大学との協働について	75
6. FD マザーマップの活用実績とその評価	
1) FD マザーマップ活用の実績.....	76
2) FD マザーマップ活用の評価.....	77
7. 情報収集・蓄積・発信	
1) ホームページ・発行物.....	80
2) FD 企画.....	83
3) 学会発表.....	91
4) 雑誌掲載.....	94
5) 国内外における情報収集・発信	95
III. 今後の予定.....	99
IV. 資料	
1. 用語解説	100
2. 参考文献	104

I プロジェクト概要

1. プロジェクトの目的・意義

1) 目的

本プロジェクトの目的は、各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質をふまえた有効なFD（ファカルティ・ディベロップメント）を計画的に企画・実施・評価できるように支援することである。

この目的に対し、以下の2つの目標を設定した。

- (1) 高等教育における看護学教育の特質をふまえた体系的なFDマザーマップおよびFDプランニング支援データベースを開発する。
- (2) 開発したFDマザーマップを看護系大学間で共同活用できる体制を構築し、全国6ブロックの基幹校の研修を受けた教員（ファカルティ・ディベロッパー；FDer）により推進体制を構築する。

目標(2)に関しては、プロジェクトを実施した中で、より有効な大学間共同活用体制を検討し、以下のように修正した(詳細は4～5ページに示した)。

(2) 修正

FDマザーマップコンテンツ開発事業に取り組む大学を選定し、FDマザーマップのコアバリエーションを明確にしたコンテンツ開発を行う。また、コンテンツ開発を通じて大学間共同活用体制を構築する。

2) 意義

平成19年の大学設置基準の改正以来、各看護学系大学においてもさまざまなFDが実施されている。しかし、FDの企画・実施・評価を導く体系的なFDプログラムの指針がないため、各企画は単発的なものになりがちで、看護学系大学の能力を持続的に向上させるものとはなっていなかった。

これまで、体系的なFDプログラムの指針という点では、国立教育政策研究所において開発された「大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン」があるが、これは、看護学教育の特質をふまえたものではない。

こうした背景をもとに、看護学教育の分野で唯一教育関係共同利用拠点として認定された、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターが、看護職としての実践能力の獲得と学問の修得との両立が強く求められている、という看護学教育の特質をふまえたFDマザーマップを、わが国で初めて開発することは、意義があると判断した。

開発されたFDマザーマップを利用することで、各看護系大学が必要なFDの内容を分析でき、現状を可視化できる。さらに、データベース機能によりFDに利用できる資料（物的資源）や講師（人的資源）などを検索でき、FD実施後の評価を集約していくことが可能となる。これらを活用することで大学間の相互交流が活性化される。このような大学間共同活用体制の構築により、個人および教育組織の教育力向上に対するFDの質の向上に貢献できることに、本プロジェクトの意義がある。

2. 取り組み内容

1) プロジェクトの全体図

本プロジェクトは、看護学教育の特質を踏まえた大学教員の能力開発へのニーズを背景に、千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターの実施してきた「看護系大学教員を対象とした全国規模の研修」と「看護系大学と臨地実習施設の連携を目指した看護職を対象とした研修」との実績のもとに、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進」に取り組んだ。

期間は5年間で、平成23年度から25年度に看護学教育におけるFDマザーマップを開発し、平成26年度、27年度には大学間共同活用体制を構築した。この実施体制として、当センター教員と看護学研究科教員、特任教員、看護学および教育学の専門家から構成される専門家会議を組織した。本事業達成による効果は、学問的効果に対する国際的評価とともに、大学間連携による社会的要請への対応等の社会的効果、改善効果が見込まれる。

看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進 プロジェクト全体図

【背景】

看護学教育の特質を踏まえた
大学教員の能力開発へのニーズ

- 看護・医療の高度化・専門分化、保健医療福祉制度改革に伴い、看護職の養成の場は、専修学校から大学へと急速に移行（平成3年度11校→平成22年度：188校）
- 大学における看護学教育では、看護職としての実務能力の獲得と学問的修得との両立が強く求められるが、看護系大学の急増に伴い、それらの教授能力を兼ね備えた大学教員が圧倒的に不足
- 看護学教育の特質を踏まえた体系的な教員の能力開発指針の開発と、全国的な大学間共同活用体制の構築が喫緊の課題

【実績】

- 看護系大学教員を対象とした全国規模の研修実績
 - 看護学教育ワークショップ（看護系大学教員対象）H11～H21まで計11回開催。
 - 臨地実習責任者研修（看護系大学の臨地実習責任者対象）H14～H20まで計8回開催。
- 看護系大学と臨地実習施設の連携を目指した看護職を対象とした研修実績
 - 看護学教育指導者研修（臨地実習施設の中堅看護職対象）S60～H21開催、延べ749名参加
- 共同利用拠点として約30年の歴史
 - H22年より「看護学教育研究共同利用拠点」として文部科学大臣より認定。

【事業】

看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進

- 看護学教育におけるFDマザーマップの開発（平成23年度～25年度）
 - FD先進地域への現地調査と専門家会議によって看護系大学教員に求められる能力を、教育・研究・看護実践・マネジメント等の観点から職位別に明らかにする。
 - 各看護系大学が現在実施しているFDプログラムに関する実態調査を実施する。
 - 上記②の結果から、各看護系大学のもつFDの企画・実施・評価に関する人的・物的資源の実態を把握するとともに、上記①と②の比較によって、看護系大学教員の能力をさらに発展させるために強化すべきFDの内容を特定する。
 - 上記①～③の分析結果を踏まえて、看護学教育の特質をふまえたFDマザーマップを開発し、そこに各看護系大学のもつFDに関する人的・物的資源の情報を組み込むことによって、各大学が相互に活用可能なFDの企画・実施・評価支援システムを構築する。
 - 開発したFDマザーマップを複数大学で試用し、その効果を検証した上で更に洗練させる。
 - 全国を6ブロックに分けて基幹校を選定し、FDマザーマップの活用に関する研修を開始する。
- 大学間共同活用体制の構築と展開（平成26年度・平成27年度）
 - 全国6ブロックにおいて、基幹校を中心にFDマザーマップの大学間共同活用システムを整備する。
 - FDマザーマップの活用ガイドラインを作成し、基幹校を中心にFDマザーマップ活用に向けた職位別研修を実施する。
 - FDマザーマップを活用した看護教員の能力開発に関する情報を国際発信するとともに、大学化の進展の途上にある東南アジア地域の看護教育機関に向けた情報提供を行い、看護学教育分野の教員の能力開発における我が国の国際貢献の先鞭をつける。

【実施体制】

- 大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター教職員（センター長1名、教授1名、准教授2名、講師2名、事務職員1名）
- 大学院看護学研究科 教員
- 特任教員（新規2名） FDマザーマップ作成、基幹校依頼等に係る企画立案・連絡調整、情報発信を担う
- 専門家会議構成員 国内外の看護学及び教育学の専門家で構成する
- 千葉大学が会員校として加盟する日本看護系大学協議会とも連携する
- 予算：特別経費

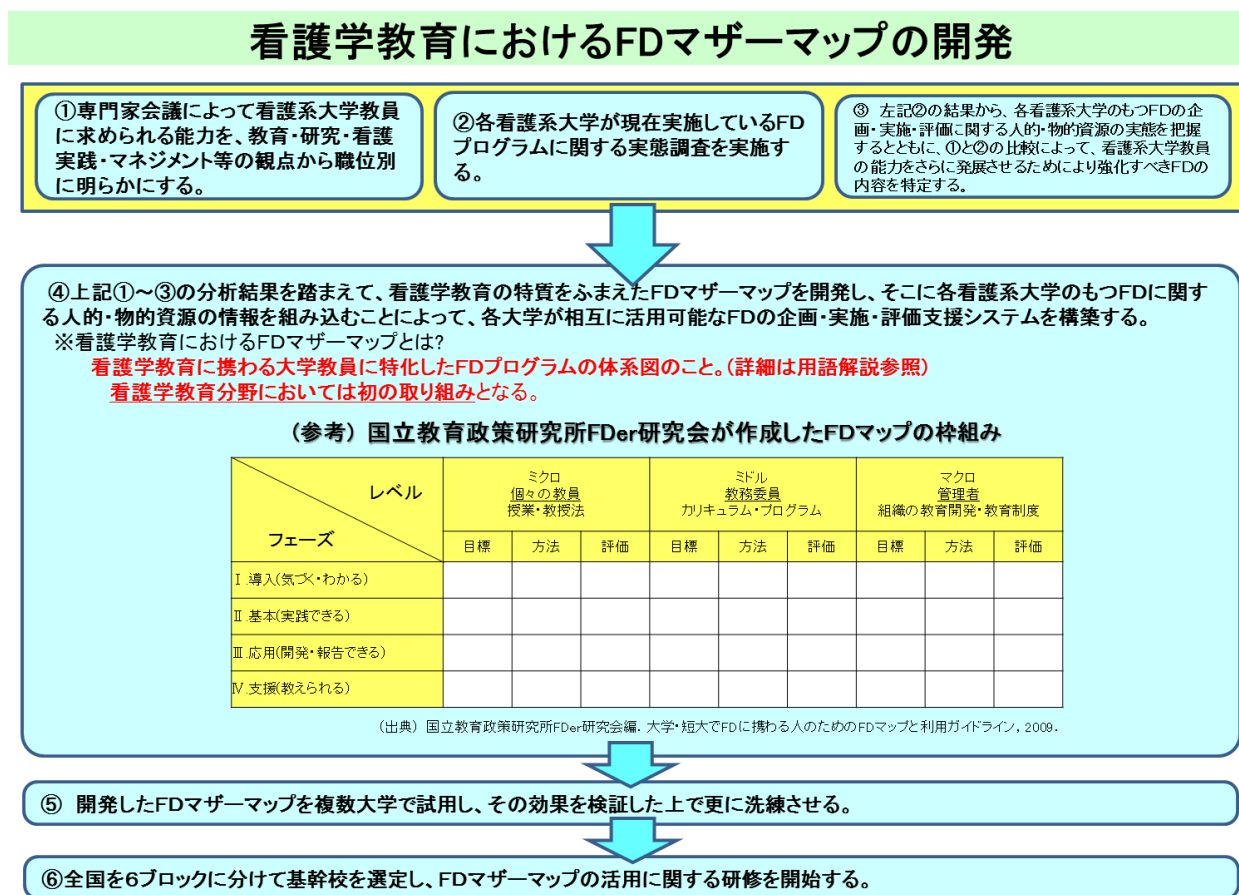
【事業達成による効果】

- 学問的効果
 - 看護学教育の特質をふまえたFDの企画・実施・評価システムが明確になる。
 - 看護学教育におけるFDの体系化が実現される。
- 社会的効果
 - FDの企画・実施・評価に関する大学間の交流が促進される。
 - 看護系大学相互の人的・物的資源が相互に活用される。
 - 我が国の看護系大学全体としての教育の質の向上体制が構築される。
 - 東南アジア地域の看護教育機関と連携し、看護教員の能力開発に向けた我が国の国際貢献の先鞭をつけることができる。
 - 高等教育の地域貢献が可視化できる。
- 改善効果
 - FDプランニング支援データベースが構築される。
 - 大学間共同活用体制が整備される。
 - 質の高いFD講師やFDプログラムの共同利用が可能となる。
 - 看護系大学教員の能力の大学間格差や地域格差を是正できる。
 - 基幹校の研修修了者がFDデベロッパーとなり、臨地実習指導を含む看護学教育全体の質の向上が見込まれる。

2) 看護学教育における FD マザーマップの開発

看護学教育における FD マザーマップの開発は、以下のように段階的に行った。まず、専門家会議により、看護系大学教員に求められる能力を明らかにした。これと並行して、各大学が現在実施している FD プログラムに関する実態調査を実施した。これらの結果から、看護系大学教員の能力をさらに発展させるために、より強化すべき FD の内容を特定した。

その上で、開発した FD マザーマップを複数大学で試用し、その効果を検証するとともに、全国から研究協力校を募り、FD マザーマップを活用したコンテンツを共同開発して、FDer の力量開発の支援体制を構築した。



3) 大学間共同活用体制の構築と展開

大学間共同活用体制の構築と展開に向けて、基幹校を選定し、看護学教育における FD マザーマップ 大学間共同利用システムを整備した。併せて、FD マザーマップの活用に向けた研修を実施した。

また、東アジア地域の看護教育機関との連携により、FD マザーマップを活用した看護学系大学教員の能力開発に向けて、国際貢献の先鞭をつけた。

4) 年次計画

本プロジェクトの実施は5年間である。はじめの3年間（平成23年度から25年度）で、看護学教育におけるFDマザーマップの開発を行い、次の2年間（平成26年度、27年度）で、大学間共同活用体制を構築し、実用化に向けて整備してゆく。

年次計画						
事業フェーズ		看護学教育におけるFDマザーマップの開発フェーズ			大学間共同活用体制の構築と展開フェーズ	
実施年度		平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
具体的 内容	マザーマップ	開発準備 看護系大学教員に 求められる能力の明 確化	開発 FDマザーマップ開 発	試用 FDマザーマップを 複数大学で試用	洗練	実用化 ・FDマザーマップの活用ガイドラインを作成 ・基幹校を中心にFDマザーマップ活用に向 けた職位別研修を実施
	FDプランニング支援 データベース	開発準備 現状のFDプログラ ムの実態調査	開発準備 各看護系大学のもつF Dに関する人的・物的資 源の情報をFDマザーマ ップに組み込み、デー タベース化する	開発・試用 全国に公開	活用	受益者負担 システム検討 基幹校を中心にFDマザーマップの大学間共 同活用システムを整備
	専門家会議 情報発信	検討・検証・質の担保・国際発信準備			成果の情報発信	国際 シンポジウム FDマザーマップを活用した看護教員の能力 開発に関する情報を国際発信する
		教員の能力を発展させ るためにより強化すべき FDを検討 FD先進地域との会議	各大学が相互に活用可 能なFDの企画・実施・ 評価支援システム構築 を検討	・FDマザーマップの試用 後の効果の検証 ・国際発信の準備	東南アジアの現状調査	

当初の計画では、平成26年度および27年度は「大学間共同活用体制の構築と展開フェーズ」として、全国を6ブロックに分けて基幹校を選定し、FDマザーマップの活用に関する研修を開始する予定であった。

しかし、基幹校は担う業務が多く、FD業務を日々の業務と兼任している看護系教員にとっては、負担が大きいものである。平成25年度第1回専門家会議では、「県内なら基幹校の役割担えるかもしれないがブロックだと難しい」、「基幹校を選定し実際に活動させるならファンドの獲得が必要」などの意見が挙がった。また、看護系大学が毎年約10校のペースで急増している中、教員数は慢性的に不足しており、大学間での教員の異動が激しいことからどの大学もよい教員を獲得するために大変な努力をしている。一方で、実習施設は看護系大学の急増から近隣大学の依頼を全て受け入れることができず、大学は実習施設の獲得に試行錯誤している。このような現状の中、地域ブロックごとの連携、コンソーシアムの形成は困難であることが本プロジェクトの進行に伴い明らかとなった。平成25年度以降FDマザーマップの試用を複数大学で試みたが、基幹校を担えそうかとの打診に対しては、いずれの大学も難色を示した。

これらの理由より「大学間共同活用体制の構築と展開」について平成27年度の計画を下記の通り修正した。

看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進
事業計画の修正

申請時計画	修正
<p>(1) 看護学教育における FD マザーマップの開発 (平成 23 年度～25 年度)</p> <p>①看護系大学教員に求められる能力を、教育・研究・看護実践・マネジメント等の観点から明らかにする。</p> <p>②各看護系大学が現在実施している FD プログラムに関する実態調査を実施する。</p> <p>③上記①②の比較により、看護系大学教員の能力をさらに発展させるためにより強化すべき FD の内容を特定する。</p> <p>④上記①～③を踏まえて、看護学教育における FD マザーマップを開発する。</p> <p>⑤開発した FD マザーマップを複数大学で試用し、その効果を検証した上で更に洗練させる。</p> <p>(2) 大学間共同活用体制の構築と展開 (平成 26 年度・27 年度)</p> <p>①全国を 6 ブロックに分けて基幹校を選定し、FD マザーマップの大学間共同活用システムを整備する。</p> <p>②活用ガイドラインを作成し、基幹校を中心に FD マザーマップ活用に向けた研修を実施する。</p> <p>③以上の情報を国際発信するとともに、大学化の進展の途上にある東アジア地域の看護教育機関と連携し、FD マザーマップを活用した看護教員の能力開発に向けた我が国の国際貢献の先鞭をつける。</p> <p>平成 27 年度は、全国を 6 ブロックに分けて基幹校を選定し、FD マザーマップの活用に関する研修を開始する。また、大学化の進展の途上にある東アジア地域の看護教育機関に向けた情報提供を行う。</p>	<p>(1) 看護学教育における FD マザーマップの開発 (平成 23 年度～25 年度)</p> <p>(同左)</p> <p>(2) 大学間共同活用体制の構築と展開 (平成 26 年度・27 年度)</p> <p>①全国の看護系大学を対象に、FD マザーマップ活用に向けたワークショップを実施する。</p> <p>②上記①の参加校および FD マザーマップ活用校より、FD マザーマップのコンテンツ開発に取り組む大学を選定し、大学間共同活用体制を構築する。</p> <p>③ (同左)</p> <p>平成 27 年度は、FD マザーマップコンテンツ開発事業に取り組む大学を選定し、FD マザーマップのコアバリューを明確にしたコンテンツ開発を行う。また、コンテンツ開発を通じて大学間共同活用体制を構築する。</p>

全国の看護系大学を対象にしたワークショップは、平成26年度と27年度で3回実施した。平成26年8月7日佛教大学で開催した「看護系大学教員のためのFD推進ワークショップ」では50名の募集に対して全国より64名の応募があった(86頁参照)。また、センターで毎年10月に開催している看護学教育ワークショップでは、平成26年度、平成27年度ともFDマザーマップをテーマにワークショップを開催し、前者は89名、後者は120名の先生方に参加いただいた(88～89頁参照)。看護学教育ワークショップは「看護学教育に責任を持つ立場にある教員あるいはFDの担当者(原則として教授職以上)」が対象者であり、所属長の許可を得て参加するものである。大学でFDを推進する立場の教員が一堂に会し、ともにワークをすることによって組織横断的なつながりを生み出すことができ、組織間連携の基点をつくることができた。

平成27年度に取り組んだFDコンテンツ開発は他大学の教員と共同で行った。コンテンツ開発の進行に伴い、携わる教員は拡大していき、学内外ふくめ22名の教員が参加した。開発はプロジェクト終了後も継続する予定であり、コンテンツ開発を通じて大学間共同活用体制は少しずつではあるが拡大していると言えよう。また、FDコンテンツ開発に取り組むこと自体がFDとなっており、コンテンツ開発を通じたファカルティディベロッパー養成、教員の資質向上に寄与することができた。

年次計画(修正)

事業フェーズ		看護学教育におけるFDマザーマップの開発フェーズ			大学間共同活用体制の構築と展開フェーズ		
実施年度		平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成27年度(修正)
具体的内容	マザーマップ	開発準備 看護系大学教員に求められる能力の明確化	開発 FDマザーマップ開発	試用 FDマザーマップを複数大学で試用	洗練 ・FDマザーマップの活用ガイドラインを作成 ・基幹校を中心にFDマザーマップ活用に向けた職位別研修を実施	実用化	大学間共同活用体制の構築 ・大学間共同によるFDマザーマップ実用化に向けたコンテンツ開発
	FDプランニング支援データベース	開発準備 現状のFDプログラムの実態調査	開発準備 各看護系大学のもつFDに関する人的・物的資源の情報をFDマザーマップに組み込み、データベース化する	開発・試用 全国に公開	活用 基幹校を中心にFDマザーマップの大学間共同活用システムを整備	受益者負担システム検討	データベース(開発コンテンツ、FD実績表の収集・掲載)による大学間共同活用システムの整備 ・多大学共同によるFDe育成プログラムの開発と共同研究体制の構築
	専門家会議 情報発信	検討・検証・質の担保・国際発信準備 教員の能力を発展させるために強化すべきFDを検討 FD先進地域との会議			成果の情報発信 ・FDマザーマップの試用後の効果の検証 ・国際発信の準備	国際シンポジウム FDマザーマップを活用した看護教員の能力開発に関する情報を国際発信する	国際発信 ・英語版・中国語版FDマザーマップの作成 ・東アジア地域を中心とした国際交流

3. 実施体制

看護学教育における FD マザーマップの開発 専門家委員

※所属・役職は委員当時の最終情報を掲載

<教育系委員>

井上 史子	帝京大学高等教育開発センター教授	26年度
加藤 かおり	新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター准教授	23～26年度
川島 啓二	九州大学基幹教育院教授 国立教育政策研究所総括客員研究員	
佐藤 浩章	愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室准教授	23～25年度
近田 政博	名古屋大学高等教育研究センター准教授	23・24年度
中島 英博	名城大学大学院大学・学校づくり研究科准教授	25・26年度

50音順

<看護系学外委員>

阿曾 洋子	武庫川女子大学看護学部・大学院看護学研究科教授	
飯岡 由紀子	東京女子医科大学看護学部教授	23～26年度
井手 知恵子	大分大学医学部 看護学科教授	23～25年度
遠藤 和子	山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科教授	24～26年度
雄西 智恵美	徳島大学大学院医師薬学研究部教授	23～25・27年度
近藤 麻理	東邦大学看護学部教授	26年度
津波古 澄子	上智大学総合人間科学部看護学科教授	26年度
永山 くに子	富山大学大学院医学薬学研究部教授	23～25・27年度
松浦 和代	札幌市立大学看護学部教授	23～25年度
松岡 千代	佛教大学保健医療技術学部看護学科教授	26年度
松下 光子	岐阜県立看護大学看護学部教授	27年度
吉沢 豊予子	東北大学大学院医学系研究科保健学専攻教授	23～25・27年度

50音順

<看護系学内委員>

宮崎 美砂子	千葉大学大学院看護学研究科教授・研究科長	
正木 治恵	千葉大学大学院看護学研究科教授	23～25年度
北池 正	千葉大学大学院看護学研究科教授	
中山 登志子	千葉大学大学院看護学研究科准教授	
吉本 照子	看護実践研究指導センター教授・センター長	23～25・27年度
野地 有子	看護実践研究指導センター教授	
和住 淑子	看護実践研究指導センター教授	
黒田 久美子	看護実践研究指導センター准教授	
錢 淑君	看護実践研究指導センター准教授	24～27年度
赤沼 智子	看護実践研究指導センター講師	25～27年度
遠藤 和子	看護実践研究指導センター特任准教授	
宮芝 智子	看護実践研究指導センター特任講師	23年度
松田 直正	看護実践研究指導センター特任助教	23年度
鈴木 友子	看護実践研究指導センター特任助教	24～27年度
若杉 歩	看護実践研究指導センター特任助教	26年度

4. まとめ

目標 1. 高等教育における看護学教育の特質をふまえた体系的な FD マザーマップおよび FD プランニング支援データベースを開発する。

＜看護学教育における FD マザーマップ＞

平成 23 年度から平成 25 年度にかけてマザーマップの開発を行った。平成 24 年度までに「看護学教育における FD マザーマップ ver.1 (試行版)」を開発し、平成 25 年度は開発したマザーマップを複数大学で試用した。試用結果を踏まえて専門家会議で内容の検討を重ね「看護学教育における FD マザーマップ ver.2」を同年度中に開発した。

平成 26 年度から平成 27 年度はマザーマップを活用した大学間共同活用体制の構築を行った。当初の計画では全国を 6 ブロックに分け基幹校を選定する予定であったが、ブロック別共同活用体制の構築および基幹校の選定が困難であることから事業計画を修正した。修正計画に従い、全国の看護系大学を対象に FD マザーマップ活用に向けたワークショップを実施した。また、ワークショップ参加校および FD マザーマップ活用校より FD マザーマップのコンテンツ開発に取り組む大学を選定し、FD マザーマップのコアバリューを明確にしたコンテンツ開発を行った。

＜FD プランニング支援データベース＞

平成 23 年度から平成 25 年度にかけて、各看護系大学の FD に関する人的・物的資源の情報を FD マザーマップに組み込みデータベース化した、FD プランニング支援データベースの開発を行った。平成 25 年度に全国に公開し、実際に活用しながらシステム内容の検討・修正を重ねた。また、平成 26 年度に事業計画が見直されたことから、FD コンテンツ掲載機能も実装した。

目標 2. (修正) FD マザーマップコンテンツ開発事業に取り組む大学を選定し、FD マザーマップのコアバリューを明確にしたコンテンツ開発を行う。またコンテンツ開発を通じて大学間共同活用体制を構築する。

学外 13 大学の教員を含む、22 名の学内外の教員が、20 件以上のコンテンツを共同開発し、FD 成果報告会にて公表した。いずれも重要性和活用可能性が高いと評価され、開発に参加した教員は、自らの教育観等を振り返り、多様な考え方を反映したコンテンツを開発できた (News Letter5,2015)。大学間共同活用体制および FDer 支援体制の構築に関し、一定の方法を確立したといえる。

情報発信

国内外の FD 先進地域との会議を重ね、情報の収集及び発信を行った。東アジアの現状調査では韓国高等教育開発院へ聞き取り調査を行った。また、タイのコンケン大学が来学した際に FD ミーティングを実施した。情報発信では、平成 26 年 2 月に 17th East Asian Forum of Nursing Scholars International Conference において FD マザーマップ (試行版) に関する研究成果を発表し Best Poster Award を受賞した。また平成 27 年 10 月、10th International Nursing Conference に招聘され FD マザーマップの発表を行った。一方で、平成 26 年度中に英語版および中国語版の FD マザーマップを作成し、東アジア地域を中心とした国際交流を継続している。

II 活動実績とその評価

1. 専門家会議

1) 平成 23 年度

7月22日（金）第1回専門家会議（東京）

- ・本プロジェクトについて説明
- ・看護学教育の現状について説明と意見交換
 - 厚生労働省「今後の看護学教員のあり方に関する検討会報告書」（H22.2.17）
 - 文部科学省「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告」（H23.3.11）
 - 日本看護系大学協議会 FD 委員会 平成 21 年度・22 年度活動報告書
 - 調査「若手看護学教員に求められる資質・能力獲得情報と支援に関する実態および FD 活動の方向性」
- ・FD マップについて説明と意見交換 国立教育政策研究所 FDer 研究会
「大学・短大で FD に携わる人のための FD マップと利用ガイドライン」

11月17日（木）第2回専門家会議（東京）

- ・看護学教育における FD マザーマップ枠組み（案）の検討
- ・「学士課程においてコアとなる看護実践能力を基盤とする教育－看護実践能力・卒業時到達目標・教育内容・学習成果－」を基盤として、それらを育成するために必要な教員の能力についてグループワークにて検討

3月8日（木）臨時専門家会議（千葉）

- ・看護学教育における FD マザーマップ枠組み（案）「教育」「看護実践」および「研究」「調整」の検討

3月22日（木）第3回専門家会議（東京）

- ・看護学教育における FD マザーマップの枠組み（案）「教育」「看護実践」および「研究」「調整」の検討

2) 平成 24 年度

7月20日（金）第1回 FD マザーマップ専門家会議（千葉）

- ・FD マザーマップ「研究」枠組み（案）の検討
- ・「調整」マップおよび調査について 経過報告

8月24日（金）平成 24 年度第 1 回専門家会議（東京）

- ・今年度のスケジュールについて 提案
- ・FD マザーマップの枠組み（案）「教育・看護実践」「研究」について検討
- ・調査について 説明

10月2日(火) 第2回 FD マザーマップ専門家会議(千葉)

- ・FD マザーマップ開発のプロセス説明文の確認
- ・FD マザーマップ枠組み(案)「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「調整」の検討
- ・調査について報告

10月12日(金) 平成24年度第2回専門家会議(東京)

- ・FD マザーマップの全体構造と枠組みについて開発のプロセスの「説明文」とFD マザーマップ区分の説明
- ・調査について概要説明

11月13日(火) 第3回 FD マザーマップ専門家会議(千葉)

- ・FD マザーマップ開発のプロセスの説明文の検討
- ・FD マザーマップ案の検討、ヒアリング校の選定

11月～12月マザーマップ試案についてヒアリング(5大学)

協力大学

- ・岡山県立大学保健福祉学部看護学科
- ・横浜市立大学医学部看護学科
- ・甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科
- ・淑徳大学看護栄養学部看護学科
- ・目白大学看護学部看護学科

1月14日第4回 FD マザーマップ専門家会議(千葉)

- ・ヒアリング結果報告とマザーマップ修正案の検討
- ・実態調査、データベース進捗状況

2月1日(金) 平成24年度第3回専門家会議(東京)

- ・ヒアリング結果報告・FD マザーマップ全体構造と枠組みの検討
- ・実態調査報告

2月14日(木) 第4回 FD マザーマップ専門家会議(千葉)

- ・FD マザーマップ試案の修正案の検討
- ・利用ガイドの検討
- ・データベース実績表の検討
- ・平成25年度の進め方

3月8日(金) 第5回 FD マザーマップ専門家会議(東京)

- ・FD マザーマップの確認

- ・利用ガイド Ver.1 の確認
- ・平成 24 年度活動総括・平成 25 年度計画

3) 平成 25 年度

7 月 23 日（火）第 1 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・平成 25 年度年次計画確認
- ・FD マザーマップ活用ガイド ver.1（試行版）の検討
- ・モデル校募集・支援についての検討
- ・FD プランニング支援データベースの開発進捗状況確認

11 月 7 日（木）第 2 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・FD マザーマップ（完成版）の検討
- ・モデル校募集について進捗状況報告
- ・FD プランニング支援データベース、登録・FD 実績表入力促進についての検討
- ・大学間共同活用の促進についての検討

2 月 4 日（火）第 3 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・FD マザーマップ（完成版）の修正案の確認
- ・FD マザーマップ活用ガイドの構成案の検討

4) 平成 26 年度

8 月 1 日（金）第 1 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・平成 26 年度年次計画確認
- ・FD マザーマップおよび FD プランニング支援データベース普及に向けての検討

12 月 9 日（火）第 2 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・ワークショップ実施評価、今後のあり方について検討
看護系大学教員のための FD 推進ワークショップ（8 月 7 日）
看護学教育ワークショップ（10 月 20 日～22 日）
- ・モデル校募集・連携についての検討
- ・基幹校・FD ディベロッパーの育成についての検討

3 月 26 日（木）～3 月 27 日（金）第 3 回 FD マザーマップ専門家会議（神奈川）

- ・ワークショップの実施
FD マザーマップによる自己「診断」 国立教育政策研究所 川島啓二先生
マザーマップを用いた FD 企画 名古屋大学高等教育研究センター 中島英博先生
- ・FD マザーマップコンテンツ開発

5) 平成 27 年度

11 月 23 日（月・祝）第 1 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・開発した FD マザーマップ対応型コンテンツの検討
- ・FD マザーマップの普及・活用促進に関する検討

2 月 23 日（火）第 2 回 FD マザーマップ専門家会議（東京）

- ・FD プロジェクトの活動報告
- ・FD マザーマップの普及・活用促進に向けての検討

2. FD マザーマップの開発

1) 開発のプロセス

(1) FD マザーマップ開発の目的

本プロジェクトにおける「看護学教育における FD マザーマップ」を開発する目的は、看護学教育の特質を踏まえた、看護系大学教員に求められる能力を開発するための体系的な FD を支援することである。これは、看護系大学教員の組織に向けてと、個人の能力、両面の開発を意図している。

また、共同利用拠点として、全国の看護系大学の FD の現状を把握するとともに、各大学が FD を推進するための支援を行う。

(2) 開発の意義

この FD マザーマップを活用することによって、各看護系大学は、組織として、自大学の FD を計画的に企画・実施・評価できる。

また、FD マザーマップは看護学教員に求められる能力を網羅するように構成されるため、看護系大学教員に求められている、看護に特化した大学教員の能力が明確になる。

(3) 開発の方針

FD マザーマップの対象は、看護系大学教員であり、看護職の有免許者を中心に、看護学教育に携わる人である。マザーマップは、看護系大学教員として備えるべき能力を体系的に示したものであり、これを参考に、各大学が組織的な取り組みとして、自大学の FD プログラムの点検や、各大学独自の FD マップの開発や、プログラムを作成する際に活用できることを願って「マザー」と命名した。FD プログラム作成にあたっては、各大学から提供された実績を組み込んだ FD プランニング支援データベースを、あわせて利用することになる。

FD マザーマップを開発するに当たり、方針として以下の内容が確認された。

- FD マザーマップを活用し能力の開発を図る対象は、看護職の有免許者を中心に、看護学教育に携わる看護系大学教員である。
- わが国における看護系大学教員の現状に即して、大学教員として、ならびに、看護専門職者としての両面を兼ね備えることを基盤にし、教員個人のみならず組織としても発展し続けるための能力を明確にし、その能力の開発のために必要なことがらを体系化して示される。
- 看護学の特徴をふまえた、看護系大学教員の能力として、現実的な課題に即したものとする。
- 看護系大学教員に対する FD のあらゆる事象を対象とするのではなく、FD マザーマップとして、看護学教育に特化したものとする。
- FD マザーマップ及びガイドラインの利用者は、FD 企画責任者、FD 委員会の委員にとどまらず、教員個々においても、各自の能力の開発、評価に活用できるものとする。
- FD マザーマップの枠組みは、各大学独自のマップの作成を支援できるものとして設計する。
- 各大学において、FD プログラムを企画・運営するための、具体的な資源に関する情報を、データベース化して提供し、大学間の共同利用の促進を図ることとする。
- 解説に選出した用語は、FD マザーマップの活用者が、共通理解を得るための作業用語として使用する。

(4) 平成 23 年度の取り組み

平成 23 年度は、FD マザーマップ開発キックオフ講演会、および、教育学系委員 4 名、看護学系委員 7 名、学内委員 10 名からなる専門家会議を 3 回、教育学系委員 1 名、学内委員 7 名からなる専門家会議を 1 回開催し、看護学教育における FD マザーマップの枠組みを検討した。

① 本事業における FD の概念の検討

まず、第 1 に FD の概念を検討した。FD の概念は、狭義には、「授業開発」（アメリカ合衆国高等教育百科事典）、広義には、B. C. Mathis らにより、「個々の大学教員が専門的能力を維持し、改善するためのあらゆる方策や活動」と定義されている。

看護学教育に関しては、E. F. Nichols が、看護系大学教員に求められる能力に基づき、FD の 6 領域（学内の教育、臨床の場における教育、研究、組織運営、地域へのサービス、リーダーシップ）を明らかにしている。このうち、「学内の教育」についての FD は、先述の「大学・短大で FD に携わる人のための FD マップと利用ガイドライン」においても詳細に述べられているが、「臨床の場における教育」はまさに看護学教育の特質を指し示すものであると考えられた。また、看護系大学が資質の高い看護職の育成という社会の要請に答えていくためには、「研究」「組織運営」「地域へのサービス」「リーダーシップ」といった、「授業開発」以外の要素も非常に重要であり、本事業においては、広義の概念を採用することが妥当であろう、との結論に至った。

② FD マザーマップの構成区分の検討

次に、先述の E. F. Nichols による FD の 6 領域（学内の教育、臨床の場における教育、研究、組織運営、地域へのサービス、リーダーシップ）を参考にしつつ、看護学教育における FD マザーマップの構成を検討した。まず、E. F. Nichols による「学内の教育」「臨床の場における教育」を併せて「教育」とすることを合意した。次いで、「研究」はそのまま「研究」とし、「組織運営」「地域へのサービス」「リーダーシップ」を併せて「調整」とすることを合意した。さらに、臨床の場における教育を実現するために、教員自身に看護実践能力が必要であると考え、「看護実践」を追加した。

これに加えて、日本看護系大学協議会 FD 委員会の調査「若手看護学教員に求められる資質・能力獲得情報と支援に関する実態および FD 活動の方向性」（平成 21・22 年度活動報告書）においても、看護系大学の看護教員に求められる能力・資質として、「教育・実践・研究の連関へ学究的に参与する力」「学習支援力」「看護学教育者としての資質」がコアカテゴリーとして抽出されていた。そして、この調査における、若手教員の困難な内容や希望する支援を踏まえると、FD としては、教育・実践・研究の 3 つの能力が求められること、ならびに研究と教育の両立およびバランスの重要性が指摘されていた。この研究と教育の両立およびバランスとは、調整能力と解釈することができる。

以上より、本事業においては、FD マザーマップを「教育」「看護実践」「研究」「調整」の 4 つの区分から捉え構成することにした。

③ 看護学教育の特質を踏まえたマップの構成要素の抽出に関する検討

次に、「教育」「看護実践」「研究」「調整」の 4 つの区分ごとに、看護学教育の特質を踏まえた構成要素について検討した。

まず、看護学教育の特質を踏まえた内容を要素として抽出する上で活用できる既存の成果として、「看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書」（研究代表：野嶋佐由美、2011.3）の「学士課程においてコアとなる看護実践能力を基盤とする教育－看護実践能力・卒業時到達目標・教育内容・学習成果－」に着目した。そして、本プロジェクトでは、学士課程において、コアとなる卒業時到達目標における、看護実践能力を育成するために看護系大学教員に必要とされる「教育能力」「看護実践能力」「研究能力」「調整能力」とは何か、を検討していった。またその際、その枠組みに入らないものの、重要な教員の能力や各能力群に共通して必要となる教員の能力についても検討した。

以上の結果に基づき、「教育」「看護実践」「研究」「調整」の4つの区分ごとに、看護学教育の特質を踏まえたマップの構成要素を抽出した。

この経過の中で「教育」については、学生が卒業時に修得すべき能力を基にして、かなりの要素を抽出できた。これは、[学内における教授活動][臨地における教授活動を支える要素][共通][看護専門職育成に関連したキャリア支援]とされたが、要素を構造化し順序性をもたせる必要があると専門家会議により指摘され、更に検討した結果、「学内における教授活動」「臨地における教授活動」「教員のキャリア開発」と3つのマップとして作成された。このうち、「学内における教授活動」の要素は、[カリキュラム][授業設計][授業展開][評価とフィードバック][キャリア支援]であり、「臨地における教授活動」の要素は、[カリキュラム][授業設計][授業展開][評価とフィードバック]である。「教員のキャリア開発」の要素は、[大学と大学教育][教授活動の自己評価][キャリア開発]として抽出された。

「看護実践」は、「教育」同様、学生が卒業時に修得すべき能力から、生涯学習者として「基盤となる看護実践能力」として区分され、要素は、[自己の看護観を自覚する][看護専門職が社会において果たすべき役割を自覚する（IPE や IPW を含む）][看護専門職としての自律性を備えている][看護専門職としての倫理観を備えている]が抽出された。さらにこれを看護系大学における教育を実現するために必要な看護実践能力とは何かを考えて検討したところ、「看護実践」の要素は、[看護観][看護専門職の社会的役割][看護専門職としての自律性][看護専門職としての倫理観][看護におけるスキルの重要性]と整理された。

これに加えて、「研究」については、卒業時到達目標をベースにした検討では作成できず、研究全般の枠組みを作成し、他の学問領域との比較を通して看護学独自の内容を区別、強調することにした。そして、参考となる既存の知見、報告が少ないため、所属や立場の異なる3名の研究者に、これまでの研究への取り組みやFDとして研究に必要な内容についてヒアリングを実施した。この結果を基に、要素として、[技術][研究コミュニティ][マネジメント][現場にコミットする][研究者マインド][クリティカル・シンキング]が抽出された。さらにこれを検討し、[研究における基本的技術の習得][研究課題の設定][研究遂行][論文作成][成果発信][その他]の6要素とした。

④ FDの対象となる教員の区分とマップの活用方法の検討

さらに、FDの対象となる教員の区分方法を検討した。当初、FDの対象となる教員の区分として、「助教」「講師・准教授」「教授」「管理者」等、教員の職位を考えていた。しかし、専門家会議における看護系委員の意見等から、実践者から教育者への転向、または、その逆など、教員の流動性の激しい看護系大学の現状に鑑み、職位が教員としてのstep upと必ずしもリンクしない場合が多く、また、大学によって職位ごとの役割が大きく違うため、職位はFDの対象となる教員の区分として必ずしも適切ではない

ことがわかった。このため、FDの対象となる教員の区分方法としては、職位ではなく能力レベルで示すことを合意した。なお、能力レベルは、「レベルⅠ：知る段階」「レベルⅡ：自立してできる段階」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる段階」の3段階とした。つまり、教授の職位であっても、大学教育を初めて経験する者は、「レベルⅠ：知る段階」のFDの対象となる、ということである。

次に、マップの活用方法について検討した。マップはレベル毎に求められる能力の差異を示しているが、それらは、職位によって固定したものでなく、各大学の特徴に応じて活用してもらう事を意図する、ということ合意した。また、場合によって、個々の教員が自己の能力を査定したり、発達の方向性や目標を見出したりすることにも活用できるとの意見が出された。

(5) 平成24年度の取り組み

平成24年度は、平成23年度に引き続き、教育学系委員と看護学系委員は同じメンバーで、学内委員は特任の2名が交替して専門家会議を組織し、「教育」「看護実践」「研究」「調整」を区分毎に、看護学教育におけるFDマザーマップに盛り込むべき内容の検討を続けた。

① 「研究」マップの構成要素に関する検討

「研究」マップについては、昨年度の研究のプロセスに沿って作成された枠組みを基に、“これからの大学・大学院の方向性”（文部科学省、中央教育審議会）から、大学教員に求められる能力、および、看護系大学改革に向けた米国での取り組み（H23年度本プロジェクトキックオフ講演会）、看護学教育ワークショップでのグループ討議の結果（平成23年度）等を参考に、看護系大学教育として求められる研究能力の要素の確認とレベルを再検討し、枠組み（案）を作成した。この段階で抽出された要素は、姿勢や研究者マインド、看護学研究の理解が含まれる〔看護学研究者としての基本〕、論理性、クリティカル・シンキング、データの取り扱いなどの〔研究者としての資質と能力〕、プロジェクトの企画・運営・管理などの〔研究の組織的展開〕、看護の質の向上・実践に生かすための〔普及と発信〕、看護には弱いとされる〔国際化〕〔産学連携〕の6つである。そして、そのレベルを、Ⅰは、一員としてできる、Ⅱは、中心となって出来る、Ⅲは、大規模にデザインしてまとめることができる、として枠組み（案）を作成した。

これを基に、専門家会議において、英国で開発された、大学教員に限らず企業に勤めるなど広く研究者を対象にした、研究者の職能開発を目的とする **Researcher Development Framework (Vitae, 2011)** も参考に、「研究」の要素について検討した。検討を経て、看護の特徴が、〔看護学研究者としての基本〕及び〔研究者としての資質と能力〕の、研究課題、学際、産学連携に表れてくることが明確になってきた。これを受けて、看護学系大学教員に求められる能力として独自性を強調するために、「社会貢献」「基盤」を独立させることが提案された。

② 「教育」マップの構成要素に関する検討

「教育」マップについては、〔学内における教授活動〕と〔臨地における教育活動〕との関係をどのように整理してマップの内容に盛り込むか、「教育」の基盤となる「看護実践」との関係をどのように整理してマップの内容に盛り込むかが、検討の課題となった。

この中で、〔学内における教授活動〕の一つである、キャリア支援について検討され、学生だけでなく、臨床の看護職にも必要とされた。また、人間性の育成のような社会人基礎力に係わる要素が入る必要に

について検討され、これを「基盤」とすること、さらに、看護実践について、このマザーマップとして位置づけることについて議論された。

③ FD マザーマップの全体構造に関する検討

以上の検討より、FD マザーマップの構成区分と構成要素の関係の全体構造を整理する必要性がはっきりし、改めてマップの全体構造について検討した。その検討の中で以下のような意見が出された。

- ・「社会貢献」は、「研究」「調整」とは独立した区分として示す必要があるのではないか
- ・「教育」「研究」に含まれる基本的能力については、共通した側面も多いので、それらをまとめて「基盤」という区分を新たに設けてはどうか
- ・「看護実践」は、「教育」だけでなく、「研究」「研究」「社会貢献」全体の基盤をなすものである
- ・「看護実践」は、「基盤」に含めてはどうか
- ・「基盤」の構成要素として「看護専門職としての基礎力」「看護系大学教員としての基礎力」の2つを置いてはどうか
- ・「調整」は、「教育」「研究」「社会貢献」すべてにかかわる能力として整理できるのではないか

以上の議論を踏まえ、これまでの区分「教育」「看護実践」「研究」「調整」と、「基盤」「社会貢献」の関係を示し、全体像（素描）を作成した。

平成 24 年度第 2 回専門家会議（東京）では、マップの区分の一つである「調整」について、「教育」「研究」「社会貢献」を調整するものとしてではなく、大学運営に関する能力の開発が重要であることから、マネジメントの要素の入る新たな区分とすることが確認された。そして、これらを再検討し、「調整」を「運営」と呼称を変更して内容も刷新した上で全体像を再描した（図 1）。

これをマザーマップ試案として提示し、活用する立場からの意見を広く聴取することにした。意見聴取は、この事業に関心が高く、より活用できるであろうと思われた大学として、当センターで大学教員の能力をテーマとした平成 23 年度看護学ワークショップおよび、FD マザーマップ開発のキックオフ講演会への参加校から選定し、協力の了解が得られた 5 大学を対象にヒアリングを行った。ヒアリングでは、「要素、分類に異存はない」とする意見がある一方、全体像について「基盤をもとに全体が強固に発展していくイメージを持たせるとよい」「教育、研究、社会貢献の 3 本の軸を膨らませるような立体的な感じにした方が違和感がない」などの意見が出された。

第 3 回専門家会議（東京）では、「基盤は全体を網羅するので中央に置き、教育、研究、社会貢献が周囲にあるのではないか」「区分の位置、面積などで価値を示していると読み取ることが可能になってしまう」等の意見が出された。様々な図案が提案されたが、結論として「5 つの柱が分かる」「価値づけしな

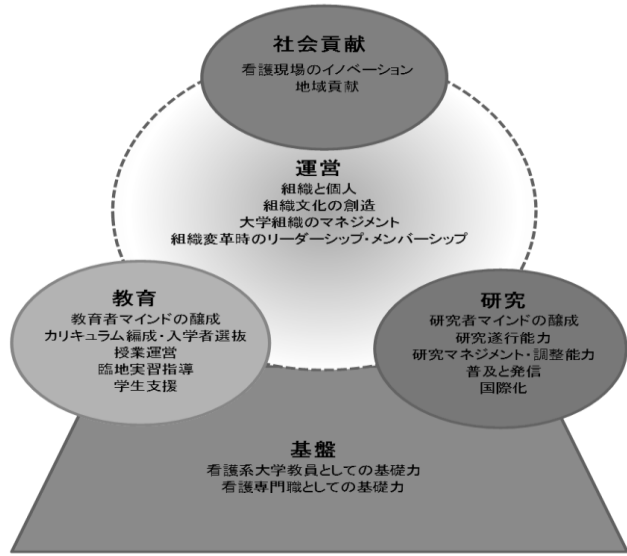


図 1 看護学教育における FD マザーマップ全体像

い」ことで合意を得た。さらに、全体像の図は「全体構成」と名称を改め、5つの要素を示し全体構成を見えるようにすること、各区分の構造化(全体像の作成)は各大学が行うこと、そのために、図は構成を示すのみのニュートラルなものであるべきとし、図2の通り見直された。

④ 看護学教育におけるFD マザーマップ (試案) の作成

これまでの検討の経過を経て、平成24年度第3回専門家会議(東京)では、マザーマップの開発方針、活用方法、マザーマップの区分と要素、全体構成について、確認、及び、意見を受け、これら検討内容を基に、要素、レベルを精練し、「看護学教育におけるFD マザーマップ Ver.1」を作成した。さらに、次年度の試用を勘案し、「看護学教育におけるFD マザーマップ活用ガイド Ver.1(試行版)」を作成した。

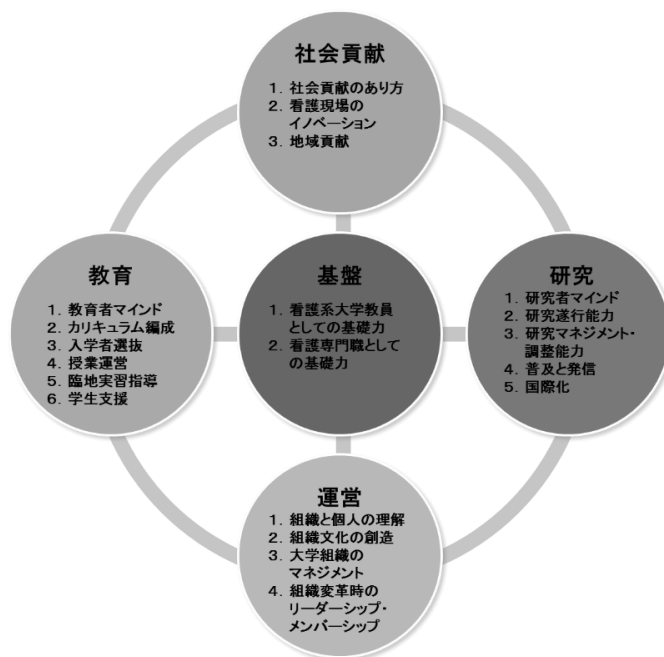


図2 看護学教育におけるFD マザーマップ全体構成 (FD マザーマップ ver.1)

(6) 平成25年度の取り組み

平成25年度は、完成した「看護学教育におけるFD マザーマップ活用ガイド Ver.1(試行版)」を用いて、日本看護研究学会、千葉看護学会、日本看護科学学会にて交流集会を開催した。また、複数大学でFD マザーマップを試用し、FD マザーマップの普及および意見集約を行った。一方で、平成24年度に引き続き専門家会議を開催し、FD マザーマップ完成版の作成を目指し検討を行った。

① 看護学教育におけるFD マザーマップ ver.2 の作成

交流集会の参加者、FD マザーマップ試用大学において、マザーマップ自体の大きな修正に関する意見はなかったが、一部検討してほしいという意見があった。

FD マザーマップはレベルⅠ(知る)、レベルⅡ(自立してできる)、レベルⅢ(支援・指導、拡大できる)の3段階であるが、レベルⅠ以前に、「知る必要があることに気づく」という段階があるのではないかと、レベルⅠとレベルⅡの内容の隔たりが大きい、といった意見が出された。また、国立教育政策研究所のFD マップは4段階であり、FD マザーマップもレベルⅡを基礎と応用のように分けるべきかとの意見もあった。第2回FD 専門家会議において検討した結果、国立教育政策研究所のFD マップは図書館リテラシーの領域で作られたものを参考としているが、FD マザーマップはレベルの内容に矛盾はない。また、マトリックスは増えると混乱をきたすので変更しないという結論に至った。

また、全体の分量が多い、全体的に表現が硬く、もう少し柔らかい表現の方が好ましいといった意見も寄せられた。これに対して、わかりにくい文章は内容が伝わりやすくなるよう修正した。また文章はレベルⅠ～Ⅲで表現をできる限りそろえ、各区分との整合性もはかることによって、読みやすくなるよう配

慮した。これら検討と修正を学内会議および専門家会議で重ね、「看護学教育における FD マザーマップ ver.2」を作成した。完成版とせず「ver.2」としたのは、FD マザーマップは実際に広く活用されることでさらにブラッシュアップされる可能性があるためである。

② 看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド ver.2 の作成

FD マザーマップについて、交流集会参加者、FD マザーマップ試用大学からは、教員に必要な能力が体系的に整理されておりよい、FD 推進に活用したい、といった肯定的な意見がある一方で、レベルの評価はどのようにするのか、個人としてチェックしたものを組織としてどのように活用するのか、能力の有無で自分を査定されることに抵抗がある、など活用方法に関する質問・意見が出された。活用ガイドの内容を検討する必要性が確認され、改めて活用ガイドの内容・構成について検討した。検討の中では以下のような意見が出された。

- ・活用の仕方や活用例があった方がより導入がしやすくなる。
- ・Q&A を充実させ、もっと具体的な活用方法を示す必要がある。
- ・活用方法の中に (1) 自大学の自大学の教員構成に即した FD ニーズ分析ツールとしての活用と (2) 自大学の FD 活動の現状分析、評価ツールとしての活用とあるが、どの様に評価するのか、具体的に追記してはどうか。
- ・「組織としての活用」「教員個人としての活用」の双方に、キャリア支援や人事のことを含むのか考えた方がよい。
- ・自大学のマップを作ることに、もっと強調した方がよい。
- ・実際に FD マザーマップを使うのなら、活用ガイドはもっと文字を少なくして見やすくしたい。視覚的に使いやすくできればよいと思う。開発の経緯は後回しでもよい。「活用ガイド」なので「活用方法」からはじめてもよいだろう。
- ・FD マザーマップはあくまでも看護学教員の能力を類型化しているに過ぎない。使い方の所でこのマップの意味と限界を周知した方がよい。

上記議論を踏まえ、活用ガイドを再構成し、「看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド ver.2」を作成した。

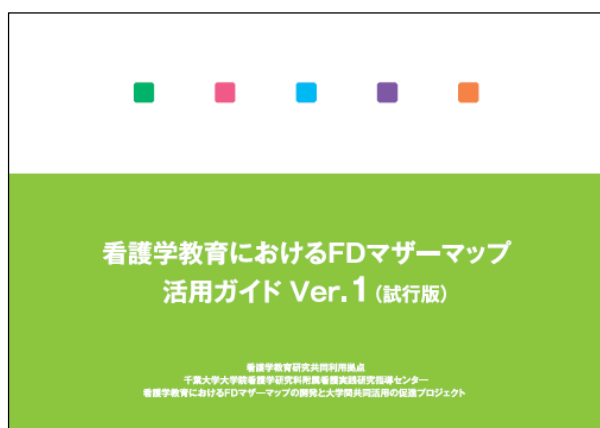


図3 看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド ver.1 (試行版)

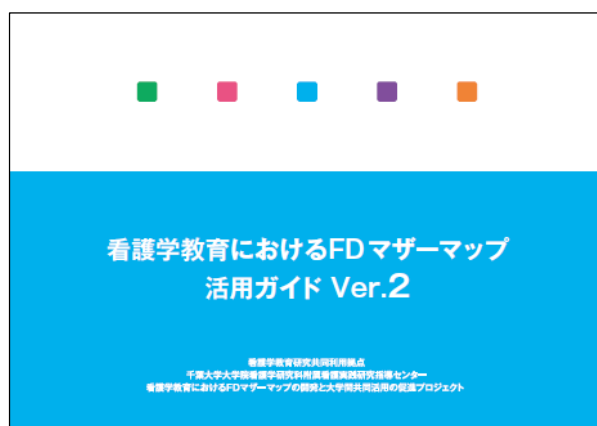


図4 看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド ver.2

2) FD マザーマップの構成・枠組

(1) 全体の構成

看護学系教員に必要な能力のうち、特に看護に特化した能力の全体像とは、「基盤」「教育」「研究」「社会貢献」「運営」に区分される能力にあると考え、その関係を示した。

これは、全体の礎となる「基盤」を基に、他の区分が位置づく。このうち、「教育」「研究」「社会貢献」は互いに独立し、看護学系大学教員が達成する成果と機能を示している。「運営」はこれらの区分が機能する際に必要な能力であり、かつ、大学組織人として必要な能力を意味する。

これらの区分の要素について、「基盤」は、[看護学系大学教員としての基礎力][看護専門職としての基礎力]で構成され、看護系大学教員としての基盤を形成する。

「教育」は、[教育者マインド][カリキュラム編成][入学者選抜][授業運営][臨地実習指導][学生支援]で構成される。

「研究」は、[研究者マインド][研究遂行能力][研究マネジメント・調整能力][研究発信の意義と理解][国際化]で構成される。

「社会貢献」は、[社会貢献のあり方][看護現場のイノベーション][地域貢献]で構成される。

「運営」は、[組織と個人の理解][組織文化の創造][課題解決に向けた組織マネジメント][組織変革時のリーダーシップ・フォロワーシップ]で構成される。

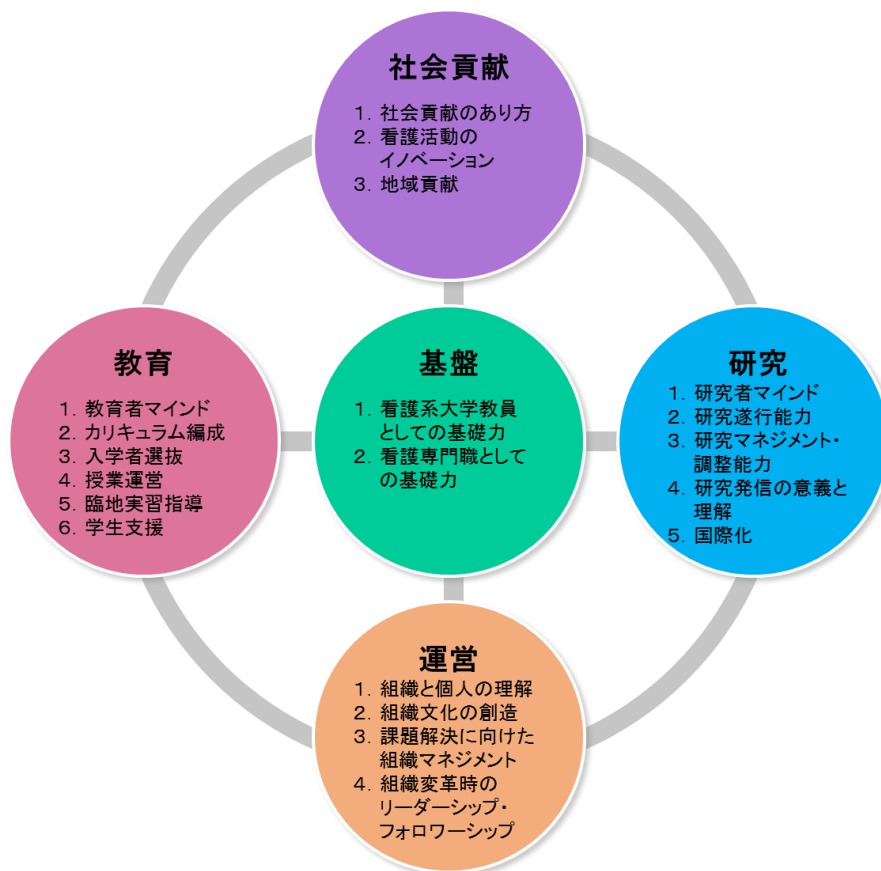


図5 看護学教育におけるFDマザーマップ全体構成
(FDマザーマップ ver.2)

(2) マザーマップの枠組み

① 基盤

「基盤」マップについては、以下のような経緯で検討をすすめた。

当初、本事業においては、FD マザーマップを「教育」「看護実践」「研究」「調整」の4つの区分から捉え構成することとしていた（つまり、「基盤」のマップを作る予定はなかった）。

まず、「学士課程においてコアとなる看護実践能力を基盤とする教育－看護実践能力・卒業時到達目標・教育内容・学習成果－」を基盤にして、それらを育成するために看護職者として必要とされる看護実践の能力を検討した。

平成23年度第2回専門家会議において、『看護実践』能力とは、『教育』に特化しているのか、それとも教育以外に必要な能力も含んでいるのかを明瞭にする必要がある」との意見が出された。その後の学内での打ち合わせにおいて、教育以外に必要な看護実践能力は、教員それぞれの研究テーマによって専門性の深さも広がりも異なることから、本事業においては、「教育」を行う上で前提となる「看護実践」能力に特化してマップを作製することを合意した。

次に、学内において「教育」マップの作成作業と並行して、「教育」を行う上で前提となる「看護実践」能力とは何かを検討し、「看護実践」マップの構成要素の抽出を行った。最終的に、「看護実践」マップの構成要素として、〈看護観〉〈看護専門職の社会的役割〉〈看護専門職としての自律性〉〈看護専門職としての倫理観〉〈看護におけるスキルの重要性〉の要素が抽出され、これを、平成23年度第3回専門家会議において提案した。これに対し、「看護系大学における教育を実現するために必要な看護実践能力として要素が抽出されており、実践家とは異なる教員に必要な要素が抽出されている。」との意見が出され、概ね合意が得られた。

これを経て、平成24年度第1回専門家会議において、「教育」「看護実践」「研究」「調整」の各マップの関連および全体構造について検討した際、「看護実践」は、「教育」「研究」「調整」「社会貢献」全体にかかわるものであり、「基盤」的な位置づけである、との意見が出された。また、〈教員のキャリア開発〉は、「教育」マップ内の要素として位置づけられていたが、看護実践、研究、調整にも関わる内容のため、総論的に別のマップに位置づけることとなった。以上の討議を踏まえ、「看護実践」は、他のマップの基本的な要素を盛り込みつつ、「基盤」マップとして作り直すこととなった。

その後の学内打ち合わせにおいて、これまで「教育」「研究」マップの中に位置づけられていた〈看護学教育者としての基本〉〈看護学研究者としての基本〉の内容も一部含めて「基盤」マップを作ることにし、その基本構成について検討した結果、[1. 看護系大学教員としての基礎力] [2. 看護専門職としての基礎力] の2つから構成することを合意した。これより、[1. 看護系大学教員としての基礎力] は、看護系大学教員に求められる基本的な教育・研究能力とし、〈看護学の本質的理解〉〈看護学に対する興味・関心〉〈教育活動と研究活動のバランス〉〈教員活動に対する自己評価〉〈看護系大学教員としてのキャリア開発〉の5つの要素で構成することとした。

また、[2. 看護専門職としての基礎力] は、看護系大学教員（特に看護職の有免許者である看護学系教員）に求められる基本的な看護実践能力とし、〈看護専門職としての健康管理〉〈看護観〉〈看護専門職の社会的役割〉〈看護専門職としての自律性〉〈看護専門職としての倫理観〉〈看護実践におけるスキルの重要性〉の6つの要素で構成することとした。

② 教育

「教育」については、以下のような経緯で検討をすすめた。

まず、「学士課程においてコアとなる看護実践能力を基盤とする教育－看護実践能力・卒業時到達目標・教育内容・学習成果－」を基盤にして、それらを育成するために必要な教員の能力を検討し最初のバージョンを作成した。

平成 23 年度第 2 回専門家会議では、分量の多さ、繰り返し出現する内容を整理する必要性について意見が出された。そこで、国立教育政策研究所で開発された FD マップ等も参考にし、繰り返し出現する内容から、要素を<カリキュラム><授業設計><授業展開><評価とフィードバック>と整理した。そして、教員の学生への教育活動の実際を再度考え検討した結果、教育のマップは、[学内における教授活動]、[臨地における教授活動]、[教員のキャリア開発] の 3 シートに整理した。臨地実習は学内での教授活動とは異なる部分も多いこと、看護系大学の教員は医療保健機関に勤務後に教育機関に移動する者も多く、教育の基盤として教員のキャリア開発が重要なのではないかと検討した結果である。

また、学生の多くが医療保健機関に就職しているが、教員は多様な情報提供や進路決定への支援をしているため、[学内における教授活動] には学生へのキャリア支援を含めた。

上記の修正後、平成 23 年度第 3 回専門家会議では、学内と臨地における教授内容を並列に分けるべきか、教員のキャリア開発は看護実践、研究、調整にも関わるので教育のマップの位置づけでよいのかと意見が出された。以上について検討し、学内でも臨地でも共通に必要な教育能力を第一に示し、さらに臨地で必要な教育能力を別シートに位置づけ、教員のキャリア開発は、総論的に別のマップに位置づけることとなった。教育マップは、[看護学教育者としての教育能力]、[臨地で必要な教育能力] の 2 要素で整理された。

その後、平成 24 年度第 1 回専門家会議で<カリキュラム><授業設計><授業展開><評価とフィードバック>と整理された要素について、看護学教育の特徴が一見して解りにくく要素をみて看護学教育の特徴がわかるかよいのではないかと意見が出された。

そこで、看護学教育における教授活動の意図やねらいを表現し、見直すことにした。看護学教育においては、大学独自の理念・目標の上に、国家試験受験資格要件を満たす必要があることや、累進型、積み上げ型ともいえる卒業時到達目標をめざし、既習科目や関連科目との関係性をふまえた担当科目の授業設計が必要である。また看護経験のない学生が、看護概念と実際の看護現象を関連づけて学習するには、教材化に工夫が必要である。そして、学生の学習においては主体的であってもその行為が倫理的でなければ看護学の学習では適切ではないことが特徴である。それらの看護学教育に特徴的な内容を要素の細目として整理し、大学教育に共通の部分を省いた。

さらに平成 24 年度第 1 回専門家会議では、実習を充実させるためには、臨地の看護の質向上が必要であり、臨地の看護スタッフへのキャリア支援もやらざる負えない状況にあると意見が出された。そこで [臨地で必要な教育能力] において、<実習環境・体制整備>の内容として追加した。その後、平成 24 年度第 2 回 FD マザーマップ専門家会議(千葉)で意見交換し、下記の意見が出された。

- ・大学教育に共通するところを抜いてみると、教員として共通する能力が抜けてしまい、かえって全体構造が見えなくなっていないか。全体構造が解る工夫が必要ではないか。
- ・マザーマップの役割は、これをカバーすれば、看護系大学教員として必要且つ十分になるもののはず。

- ・＜主体的且つ倫理的な学びの促進＞や、対象者との相互作用をふまえた自己評価など、解りにくい表現がある。

以上を検討し、[看護学教育者としての教育能力]については、＜カリキュラム＞＜授業設計＞＜授業展開＞＜評価とフィードバック＞の要素のバージョンとの二案を出して使い易さ等から検討することとした。また解りにくい表現を修正した。

上記の修正後、平成 24 年度第 2 回専門家会議（東京）において、以下の提案、意見が出され、討議された。

- ・二案作成して比較したところ、削除した項目は少なく、＜カリキュラム＞＜授業設計＞＜授業展開＞＜評価とフィードバック＞と要素をあげた 1 案の方が、全体構造もわかりやすくよい。
- ・要素の分け方について説明が難しい。図等を検討したが、最終的に、1 と 2 で分けるのではなく、「カリキュラム編成」「授業設計・授業展開・評価とフィードバック」「キャリア支援」「臨地で必要な教育能力」と内容の違いから並列に区分することもできるのではないかと意見が出され、その方向で検討することとなった。またその際、アドミッションポリシーやディプロマポリシーなどの理解がどこに位置づくのか説明があるとよいと意見が出された。
- ・『教材化』について、実習の振り返りとは違うのか、教材化は個人ではなくグループでの学習に使用するために行うのかと疑問が出された。臨地における『教材化』は、学生の沢山の实習体験の中から、特に看護学の学習に必要で学習が可能な場面と、学習のタイミングを教員が選び、学生の体験と学べべき看護概念を関連づけ、また実施したことを意味づける活動である。個人でも、グループでも可能である。＜授業設計＞の⑤の表現と対応させて、伝わるような表現にする。
- ・メンタル面、ハラスメント相談等、カウンセリング的なかわりが多く求められており、それらを教育シートに含める必要があるのではないかと。看護系の教員は、無自覚なまま学生支援にあたっているが、どこまで教員が支援したらよいのかを判断し、必要な組織や専門家につなぐことも必要であり、1 つの要素細目として能力としてあげていく。
- ・研究者マインドと同じように考えると、教育者マインドを基盤の中に位置づけ、教育のシートにも重複して載せる方向で検討してみてはどうか。

以上をふまえて、最終的には要素を次の 6 つに整理し、分かりにくい表現や追加検討部分を検討し、修正した。

要素は、[1. 教育者マインド] [2. カリキュラム編成] [3. 入学者選抜] [4. 授業運営] [5. 臨地実習指導] [6. 学生支援] である。

このうち、以下の要素には細目を設けた。

[4. 授業運営] には、＜授業設計＞＜授業展開＞＜評価とフィードバック＞

[5. 臨地実習指導] には、＜実習環境・体制整備＞＜臨地での柔軟な支援方法の工夫＞＜学生の实習経験と看護概念を関連づける学習支援＞＜臨地での主体的学習への支援＞＜臨地での倫理的学習への支援＞

[6. 学生支援] には、＜学生生活支援＞＜キャリア支援＞＜国際交流の推進＞である。

③ 研究

「研究」は、以下のような経緯で検討をすすめた。

「研究」の構成要素を検討するために、平成 23 年度には看護研究に関する看護教員へのインタビューを実施した。

このインタビュー結果から得られた要素を踏まえて、平成 24 年度には文部科学省の大学改革実行プラン、中央教育審議会の答申および、米国での大学改革に向けた取り組み、文部科学省後援による千葉大学における看護学教育ワークショップでのグループ討議の内容を基に、要素を再構成した。これに、文献資料の検討、専門家会議での意見を受けて検討を繰り返した。

当初は、大学教員に必要な研究能力に主眼を於いて開発に当たったが、討議を進めながら、看護学研究に特化したもの、看護学研究の現状から鑑みて重要と考えられる項目を「要素」としてあげる必要性が確認された。

主な参考文献は、専門家会議で紹介された、Researcher Development Framework, Vitae(2010)、Creating the Future of Faculty Development(2006)、APA 論文作成マニュアル (2011)、モースとフィールドの看護研究 (2012) 等であった。

以上をふまえて、「研究」のマップは、インタビューや討議の中で繰り返し重要性が指摘された [1. 研究者マインド] から始まり、その次に看護学研究のプロセスに沿って要素をあげた。即ち、研究の要素としては、[1. 研究者マインド] [2. 研究遂行能力] [3. 研究マネジメント・調整能力] [4. 普及と発信] [5. 国際化] の 5 つを立て、FD マザーマップ ver.1 を作成した。平成 25 年度第 3 回 FD 専門家会議において、[4. 普及と発信] は何を「発信」しているのかわかりにくいという指摘を受けた。本項目は研究で新しい変化を生み出すことへの理解を問うことを意図していることから [4. 研究発信の意義と理解] とし、FD マザーマップ ver.2 を作成した。

看護学研究の特徴である、看護実践との関係性等については、基盤にある看護系大学教員としての基礎力や看護学研究者としての研究遂行能力の中の研究成果をもって看護の現場へコミットする等に含めた。調整力は主に研究マネジメント能力に含まれるので、要素のまとまりの名称に調整を加えて、[3. 研究マネジメント・調整能力] とした。また、権利と法的側面に関しては、[2. 研究遂行能力] の中の、倫理的配慮の説明に（知的財産権、利益相反、オーサーシップを含む）として追記した。

そして、[1. 研究者マインド] は、“異なる意見や他者を尊重すること”を要素の内容とすることが提案され、検討した結果、研究者マインドに含まれると合意を得て、研究者マインドの例として、“真理を追究し、偏見や先入観や世間的な常識に惑わされることのない態度” “異なる意見や他者を尊重する態度” を挙げた。FD マザーマップ ver.1 では「クリティカルシンキングの使い方」を [2. 研究遂行能力] の 1 項目として挙げていたが、平成 25 年度第 3 回 FD 専門家会議において、クリティカルシンキングは大学生が学習することであり大学教員に向けてあえて強調する必要があるのかとの意見が出された。検討の結果、基本的なことであるので [1. 研究者マインド] の例の筆頭に挙げることとし、FD マザーマップ ver.2 作成の際に修正した。

[2. 研究遂行能力] の細目は 9 項目とし、＜看護学研究の理解＞＜看護学研究の課題の見つけ方＞＜分野横断的な研究の進め方＞＜研究フィールドとの関係の取り方＞＜データの取り扱いとその方法＞＜倫理的配慮（知的財産権、利益相反、オーサーシップを含む）＞＜看護学研究論文の書き方＞＜研究論文のクリティークの仕方＞＜研究成果をもって看護の現場へコミットする＞とした。

[3. 研究マネジメント・調整能力] の細目は5項目とし、〈時間のマネジメント〉〈研究費の獲得と適切な運用〉〈研究者としての人的資源の形成やマネジメント〉〈研究環境の整備〉〈組織的研究活動の推進〉である。〈研究者としての人的資源の形成やマネジメント〉はFD マザーマップ ver.1 では〈研究者コミュニティの形成〉であったが、研究活動を展開するには個人がコミュニティを形成するのではなく、研究に取り組む集団をどう形成し、マネジメントしていくのが重要であるため、上記の通り修正し内容の見直しを行った。また、〈組織的研究活動の推進〉はFD マザーマップ ver.2 より新たに加えられた。これは〈研究環境の整備〉では組織的研究活動を包含することができないためである。

[4. 研究発信の意義と理解] は、研究発信の意義として〈発信する研究の社会的意義の理解〉、研究発信の方法として〈成果発信〉、研究発信の場として〈交流〉の、3つの分野に分けて細目を整理した。

〈発信する研究の社会的意義の理解〉では、国内と海外の2つの方向に対するインパクトの重要性について専門家会議で意見が出されたところであるが、わが国の看護学研究の現状を踏まえて、インパクトの方向性として次の3つの細目《看護学教育・実践の質の向上》《看護学研究の発展》《新しい変化への対処》のをあげた。《新しい変化への対処》は、原案では、学内外の支持基盤のニーズや関心事への対応として提示されたが、標記のように修正され、その内容は、時代・地域特性とともに変化する看護学へのニーズ、関心事に対応できることとした。

〈成果発信〉では、《研究成果の計画的な普及・発信》を更なる細目としてあげた。

〈交流〉では、《研究会・学会活動》を更なる細目としてあげた。

[5. 国際化] は、既出の〈研究者コミュニティの形成〉や《新しい変化への対処》、《研究会・学会活動》にも含まれると考えられるが、現状から鑑みて重要と考えられる項目を強調する方針を受けて、要素としてあげた。細目は、〈国際学会での発表〉と〈国際共同研究〉〈学術国際交流の推進〉の3つである。

④ 社会貢献

「社会貢献」は、教育、研究の区分がある程度形作られてから、区分として独立させることになった。

これは、研究成果の社会への還元は、論文の発表だけで終わらずに、現場の看護実践の質の向上に貢献すること、それが、看護現場のみならず、広く国民の健康に寄与し、社会の変革への活用や法整備に向けた動きとしての貢献となることを意図している。

ただし、社会貢献は、各大学により、大学のミッション・ビジョンや地域特性に大きく影響され、相違があると考えられる。そのため、FDとして各大学が柔軟に具体化しやすいように、要素を広く捉えた。これには、英国で開発された、Researcher Development Framework : vitaeの要素で、innovationや研究成果の現場での活用を示す社会還元の内容、及び、大学教員の評価に関する文献を参考にした。要素は3つ、[1. 社会貢献のあり方] [2. 看護活動のイノベーション] [3. 地域貢献] である。[2. 看護活動のイノベーション] はFD マザーマップ ver.1 作成時は [2. 看護現場のイノベーション] であったが、「現場」では口語的であり看護関係者からみると違和感が強い、また、看護実践の改善、現状改善のために研究成果を活用することに主眼を置いていることから標記のとおり修正した。

[1. 社会貢献のあり方] は、大学ごとに地域のニーズを活かして貢献することを位置付けた。

[2. 看護活動のイノベーション] は、社会の動向を見据え、看護現場の変革に必要なとされる能力の開発を意図した。これは、この先の動向を見据えて、整備する必要のある制度や政策の必要性を把握し、そ

れに根拠を与える研究を発展させ、大規模研究を組織し発展させることのできる能力として、〈ニーズの把握方法〉〈実践への適用〉〈政策への提言〉の細目を設けた。

[3. 地域貢献]は、これからの大学に求められることとして、文部科学省の大学改革に示されている。一方で、看護は、元々、保健医療分野の実践科学であることから、具体的な地域貢献として各大学で既に実施し、その活動が地域に認知されてきた強みがある。この強みを更にブラッシュアップさせることで、看護系大学教員の能力を示すことが可能と考えて、〈看護の社会的役割や意義（価値、特質）の発信と活用〉〈看護系大学のリソースとしての役割〉〈産官学連携の実施〉を細目に位置づけた。〈看護の社会的役割や意義（価値、特質）の発信と活用〉はFD マザーマップ ver.1 では〈看護の知見の発信と活用〉であった。しかし、「知見」は一般的には研究成果や整理された知識としてとらえられており、看護実践と研究成果の全てを包含して述べることを意図した「看護の知見」という表現では伝わらない可能性が指摘された。看護が行っていることを社会に伝えることが重要であることから「看護の社会的役割や意義」に表現を修正した。また、〈産官学連携の実施〉はFD マザーマップ ver.1 では〈産官学共同研究の実施〉であったが、研究の区分との違いを際立たせ、共同実践を意味することが伝わるよう、標記のとおり修正された。

⑤ 運営

「運営」は、初年度、構成区分が検討された際には〈組織運営〉〈地域へのサービス〉〈リーダーシップ〉を併せて「調整」とすると合意されていた。

その後、検討の経過の中で、「調整」は、3つの区分「教育」「研究」「社会貢献」と相互に関係しながら、機能すると考えられた。そして、「調整」はそれ自体が成果を産出する訳ではないが、「教育」「研究」「社会貢献」は、「調整」なしで成果を産出できない性質を持つ。そのため、区分それぞれと関係するもの、及び、3つの区分に共通して関係するものとして提案され、3つの区分の内容がある程度明確になった時点で、内容が特定されてきた。

そして、「教育」「研究」「社会貢献」の内容について概ね方向性が統一された時点で、全体像を示し、平成24年度第2回専門家委員会（東京）で、検討がなされた。

そこでは、「調整」という用語が伝わりにくいこと、および、「教育」「研究」「社会貢献」が明確になってきたことで、それらを調整するものとしてではなく、大学組織におけるマネジメントと個々の教員としての組織調整能力を盛り込むことの必要性が議論された。

この会議の結果を受けて、これまで大学教員は、個人の力量に着目されてきたが、これからは個々の協働によりどれだけ組織としてのパフォーマンスを上げられるかが、教育研究活動の基盤となる大学組織運営上でも求められている。そのための機能が「調整」にあるのではないか。この点をマザーマップで強調する必要性が確認された。

そこで、組織マネジメントや、組織人の育成を意図する内容として、再検討し、「調整」から「運営」と名称を変更して位置付けた。そして、「教育」「研究」「社会貢献」の調整を示す内容は、それぞれの区分に戻し、次の4つの要素を取り上げた。

[1. 組織と個人の理解] [2. 組織文化の創造] [3. 課題解決に向けた組織マネジメント] [4. 組織変革時のリーダーシップ・フォロワーシップ] である。なお、[3. 課題解決に向けた組織マネジメント]はFD マザーマップ ver.1 では[3. 大学組織のマネジメント]であったが、この内容は課題にフォーカスし

ており、要素名と内容に齟齬が感じられたため、修正した。また、[4. 組織変革時のリーダーシップ・フォロワーシップ]はFD マザーマップ ver.1 では[4. 組織変革時のリーダーシップ・フォロワーシップ]であったが、メンバーシップにはリーダーシップとフォロワーシップが含まれることを確認し、文言の修正を行った。

[1. 組織と個人の理解]は、<自大学・学部学科の歴史の理解><自大学・学部学科の理念の理解><大学の組織体制の理解><大学の組織人としての態度の理解>の4つの細目から構成する。

[2. 組織文化の創造]では、<組織文化の理解・醸成><自大学・学部学科の組織文化の創造>から構成する。

[3. 課題解決に向けた組織マネジメント]では、<組織マネジメントサイクルの理解と活動><課題遂行時のセルフマネジメント><ハラスメント対策><リスクマネジメント>の4つの要素から構成する。このうち<組織マネジメントサイクルの理解と活動>はFD マザーマップ ver.1 では<大学組織マネジメントの基礎>であったが、含まれる内容は課題にフォーカスされており、またこれら内容はマネジメントサイクルに含まれるものであったため、「組織マネジメントサイクル」を用語解説に加えた上で修正した。

[4. 組織変革時のリーダーシップ・フォロワーシップ]は、細目を設けなかった。

これらの、要素と細目については、看護組織論、リーダーシップ論の文献を参考にした。

1) 基盤

基盤要素	レベルI [知る]	レベルII [自立してできる]	レベルIII [支援・指導・拡大できる]
1. 看護系大学教員としての基礎力			
看護学の本質的理解	基盤 1-1.1 ①看護学が、看護実践の根拠の追究、看護の価値の創造およびその発展を目指す科学であることを知る ②諸科学との関連において、看護学独自の意義や役割を知ることを知る	基盤 1-1.2 ①看護学が、看護実践の根拠の追究、看護の価値の創造およびその発展を目指す科学であることをふまえて、教員活動を展開できる ②看護学独自の意義や役割を自覚しながら、教員活動を展開できる	基盤 1-1.3 ①看護学が、看護実践の根拠の追究、看護の価値の創造およびその発展を目指す科学であることをふまえて、他の教員を支援できる ②看護学独自の意義や役割を自覚しながら、他の教員を支援できる
看護学に対する興味・関心	基盤 1-2.1 ①自身の看護学に対する興味・関心が、教員活動のあり方に影響を及ぼすことを知る	基盤 1-2.2 ①教員活動を通じ、看護学に対する興味・関心を深化・発展させ続けることができる	基盤 1-2.3 ①教員活動を通じ、看護学に対する興味・関心を深化・発展させ続ける方向で、他の教員を支援できる
教育活動と研究活動のバランス	基盤 1-3.1 ①看護学に関する教育と研究が看護系大学教員としての主要な責務であることを理解し、教育と研究に費やす時間の配分を現実的に考える必要性を知る	基盤 1-3.2 ①教育と研究に費やす時間の配分を現実的に検討し、バランスのよい教員活動を積極的に展開することができる	基盤 1-3.3 ①教育と研究のバランスのよい教員活動を展開する環境を組織的に整え、他の教員を支援できる
教員活動に対する自己評価	基盤 1-4.1 ①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況等をふまえて、自己の教員活動を評価し改善する意義と方法について知る ②教員活動を持続的に改善するためのFDや学習資源の存在について知る	基盤 1-4.2 ①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況等をふまえて、自己の教員活動を評価し改善することができる ②FDや学習資源を必要に応じて活用し、自身の教育活動を持続的に改善することができる	基盤 1-4.3 ①経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況等をふまえて、教員活動の自己評価について、他の教員を支援できる ②FDプログラムや学習資源を組織的に整え、他の教員を支援できる
看護系大学教員としてのキャリア開発	基盤 1-5.1 ①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況、ワークライフバランス等をふまえて、柔軟に自身の学習ニーズやキャリアパスを検討する必要性を知る	基盤 1-5.2 ①自己の経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況、ワークライフバランス等をふまえて、柔軟に自身の学習ニーズやキャリアパスを検討し、実行に移すことができる	基盤 1-5.3 ①経験や能力、看護職の社会的役割、自大学の置かれた状況、ワークライフバランス等をふまえてキャリア開発について、他の教員を支援できる

2. 看護専門職としての基礎力	<p>基礎2-1.1 ①自身の生活や職場環境の特徴、変化の傾向を把握し、自分の健康との関係を知る ②自身の24時間の生活を通して、健康の原理原則を知る ③成長発達各段階における社会役割の課題、心身の変化の特徴を知る ④健康問題、ストレスの発生に対し、対症療法ではなく、問題発生の根本的な原因を探る必要性を知る</p>	<p>基礎2-1.2 ①自身の生活や職場環境の特徴、変化の傾向を把握し、よりよい健康状態に向けて、生活を調整することができる ②健康的な生活の原理原則を毎日の生活の中で検証し、外界の変化に合わせて調整することができる ③成長発達各段階における社会役割をひまえ、心身のバランスを維持しながら、家庭生活、職業生活を継続・発展させることができる ④健康問題、ストレスの根本原因を探り、自身と周囲の自然・社会環境との調和が取れた状態をつくり出すことができる</p>	<p>基礎2-1.3 ①生活・職場環境の特徴、変化の傾向を把握し、よりよい健康状態に向けて、生活を調整することの意義を、学生や他の教員に示すことができる ②健康的な生活の原理原則を毎日の生活の中で検証し、外界の変化に合わせて調整することの意義を、学生や他の教員に示すことができる ③成長発達各段階における社会役割をひまえ、心身のバランスを維持しながら、家庭生活、職業生活を継続・発展させる方向で、学生や他の教員を支援することができる ④健康問題、ストレスの根本原因を探り、自身と周囲の自然・社会環境との調和が取れた状態をつくり出す意義を、学生や他の教員に示すことができる</p>
看護観	<p>基礎2-2.1 ①看護が対象者の健康を維持、促進する働きであることをひまえて、自身の経験を振り返り、自己の看護観を言語化することができる</p>	<p>基礎2-2.2 ①看護実践経験や教育経験等を統合し自己の看護観を深化させることができる</p>	<p>基礎2-2.3 ①看護実践や教育の経験を統合して看護観を深化させ、教育的観点から他の教員に示すことができる</p>
看護専門職の社会的役割	<p>基礎2-3.1 ①看護専門職が社会において果たすべき役割を自覚する ②最新の保健医療福祉の動向や研究成果を把握する</p>	<p>基礎2-3.2 ①看護専門職が社会において果たすべき役割を自覚し、それらを意識した看護活動を展開できる ②最新の保健医療福祉の動向や研究成果を常に把握し、それらを意識した看護活動を展開できる</p>	<p>基礎2-3.3 ①看護専門職が社会において果たすべき役割を自覚し、それらを意識した教員活動を展開することができるように、環境を組織的に整えることができる ②最新の保健医療福祉の動向や研究成果を常に把握し、それらを意識した教員活動を展開できるように、環境を組織的に整えることができる</p>
看護専門職としての自律性	<p>基礎2-4.1.2 ①看護専門職としての自律性について自身の考えを述べる ②よりよい看護を常に追求し、自身の看護活動を自己評価し続けることができる</p>	<p>基礎2-5.2 ①常に看護専門職としての倫理観を念頭において行動できる ②看護・看護教育において生じた倫理的問題に適切に対処できる</p>	<p>基礎2-4-3 ①部下や後輩の自律性を尊重できる ②よりよい看護を常に追求し、自身の看護活動を自己評価し続ける態度を、教育的観点から他の教員に示すことができる</p>
看護専門職としての倫理観	<p>基礎2-5.1 ①看護専門職としての倫理観を言語化することができる ②看護・看護教育において生じた倫理的問題を知る</p>	<p>基礎2-5.3 ①常に看護専門職としての倫理観を念頭において行動し、他の教員のモデルとなり、他の教員に助言することができる ②看護・看護教育において生じた倫理的問題に適切に対処し、他の教員のモデルとなり、他の教員に助言することができる</p>	<p>基礎2-6.3 ①看護実践スキルの維持・向上のための環境を組織的に整え、他の教員を支援できる</p>
看護実践におけるスキルの重要性	<p>基礎2-6.1 ①看護実践におけるスキルの重要性を知る</p>	<p>基礎2-6.2 ①自身の立場で可能な範囲において看護実践スキルの維持・向上に努めることができる</p>	<p>基礎2-6.3 ①看護実践スキルの維持・向上のための環境を組織的に整え、他の教員を支援できる</p>

2) 教育

教育要素	レベルⅠ [知る]	レベルⅡ [自立してできる]	レベルⅢ [支援・指導、拡大できる]
1. 教育者マインド	教育1-1.1 ①教育が他者を支援するはたらきであることをふまえ、自身の教育者マインドの必要性を知る ②教育者マインドとして自大学で重視する内容を知る	教育1-1.2 ①教育者マインドをもっている ②教育者マインドとして自大学で重視する内容を理解し、説明できる (教育者マインドの例) ・人間の尊厳と多様性を重視する人間性を育む ・多様な人々へ看護を提供できる基礎的能力を育成する ・創造性と論理性を重視した教育を実施する ・主体的に社会や看護の発展に貢献できる人材を育成する	教育1-1.3 ①教育者マインドの醸成を支援できる ②教育者マインドとして自大学で重視する内容を検討できる
2. カリキュラム編成	教育2-1.1 ①各大学のカリキュラムポリシーと国家試験受験資格の要件(保健師助産師看護師学校養成所指定規則)に基づき、カリキュラムが編成されることを知る ②生活背景や人生経験の異なる多様な学生に、生活支援を基盤とする看護学を教授する特徴や工夫の必要性を知る	教育2-1.2 ①各大学のカリキュラムポリシーと国家試験受験資格の要件(保健師助産師看護師学校養成所指定規則)に基づいて、カリキュラムを編成できる ②生活背景や人生経験の異なる多様な学生に、生活支援を基盤とする看護学を教授する特徴や工夫の必要性を理解し、説明できる	教育2-1.3 ①各大学のカリキュラムポリシーと国家試験受験資格の要件(保健師助産師看護師学校養成所指定規則)に基づいたカリキュラム編成について、他の教員に助言できる ②生活背景や人生経験の異なる多様な学生に、生活支援を基盤とする看護学を教授する特徴や工夫の必要性について、他の教員に助言できる
3. 入学者選抜	教育3-1.1 ①自大学の特徴、地域性をふまえて、卒業時到達目標やアドミッションポリシーが決定されることを知る ②アドミッションポリシーに応じた選抜方法について知る ③アドミッションポリシーを多様な場で広報する必要性を知る ④自大学の入試関連の組織について知る	教育3-1.2 ①自大学の特徴、地域性をふまえて、卒業時到達目標やアドミッションポリシーを理解し、説明できる ②アドミッションポリシーに応じた選抜ができる ③アドミッションポリシーを多様な場で広報できる ④自大学の入試関連の組織において活動できる	教育3-1.3 ①自大学の特徴、地域性をふまえて、卒業時到達目標やアドミッションポリシーの策定ができる ②アドミッションポリシーに応じた選抜ができる環境を整える ③アドミッションポリシーを多様な場で広報できる環境を整える ④自大学の入試関連の委員会やワーキンググループ等を組織できる

4. 授業運営	授業設計	<p>教育4-1.1</p> <p>①生活支援学習の基盤としての看護学生の生活体験把握の必要性を知る</p> <p>②学生の既習科目と学習習得状況の把握の必要性を知る</p> <p>③各科目受講前の学生のレディネスをふまえて担当科目の目的・目標を設定する必要性を知る</p> <p>④他の科目内容、関連領域知識との関係性を把握した上で、授業設計する必要性を知る</p> <p>⑤看護概念と実際の看護現象を関連づけて学生が理解できる効果的な教材作成の必要性を知る</p> <p>⑥最新の保健医療福祉の動向や研究成果を授業に活用する必要性を知る</p>	<p>教育4-1.2</p> <p>①生活支援学習の基盤としての学生の生活体験を把握できる</p> <p>②学生の既習科目と学習習得状況の把握ができる</p> <p>③各科目受講前の学生のレディネスをふまえて担当科目の目的・目標を設定できる</p> <p>④他の科目内容、関連領域知識との関係性を把握した上で、授業設計できる</p> <p>⑤看護概念と実際の看護現象を関連づけて学生が理解できる効果的な教材を作成する</p> <p>⑥最新の保健医療福祉の動向や研究成果を授業に活用できる</p>	<p>教育4-1.3</p> <p>①生活支援学習の基盤としての学生の生活体験把握について、他の教員に助言できる</p> <p>②学生の既習科目と学習習得状況把握について、他の教員に助言できる</p> <p>③各科目受講前の学生のレディネスをふまえた担当科目の目的・目標の設定について、他の教員に助言できる</p> <p>④他の科目内容、関連領域知識との関係性を把握した上で授業設計について、他の教員に助言できる</p> <p>⑤看護概念と実際の看護現象を関連づけて学生が理解できる効果的な教材作成について、他の教員に助言できる</p> <p>⑥最新の保健医療福祉の動向や研究成果の授業への活用について、他の教員に助言できる</p>
4. 授業展開	授業展開	<p>教育4-2.1</p> <p>①担当科目の目的・目標を明示し、学習意欲を高める必要性を知る</p> <p>②看護概念と看護現象の関連を論理的かつ臨場感をもって説明する必要性についてを知る</p> <p>③学生の主体的学習への支援（看護専門職の自律性を育む点が看護学教育の特徴）の必要性を知る</p> <p>④対人援助の学習時は、学生の主体性を尊重しながらも、行為の倫理性を強調した学習支援が必要であることを知る</p> <p>⑤対人援助の演習時、学生とケア対象者との相互作用を通して、学生の援助者としての課題を見極め、学生に必要な学習支援をする必要性を知る</p>	<p>教育4-2.2</p> <p>①担当科目の目的・目標を明示し、学習意欲を高めることができる</p> <p>②看護概念と看護現象の関連について、論理的かつ臨場感をもって説明できる</p> <p>③学生の主体的学習への支援ができる（看護専門職の自律性を育む点が看護学教育の特徴）</p> <p>④対人援助の学習時は、学生の主体性を尊重しながらも、行為の倫理性を強調した学習支援ができる</p> <p>⑤対人援助の演習時、学生とケア対象者との相互作用を通して、学生の援助者としての課題を見極め、学生に必要な学習支援ができる</p>	<p>教育4-2.3</p> <p>①担当科目の目的・目標を明示し学習意欲を高めることについて、他の教員に助言できる</p> <p>②看護概念と看護現象の関連の説明について、他の教員に助言できる</p> <p>③学生の主体的学習への支援（看護専門職の自律性を育む点が看護学教育の特徴）について、他の教員に助言できる</p> <p>④対人援助の学習時の、学生の主体性を尊重しながらも行為の倫理性を強調した学習支援について、他の教員に助言できる</p> <p>⑤対人援助の演習時、学生とケア対象者との相互作用を通して学生の援助者としての課題を見極め、学生に必要な学習支援することについて、他の教員に助言できる</p>
4. 評価とフィードバック	評価とフィードバック	<p>教育4-3.1</p> <p>①担当科目の目標に基づく学生の到達度評価について知る</p> <p>②ディプロマポリシーをふまえて、各担当科目の評価を学生へフィードバックする重要性を知る</p> <p>③担当科目履修後の学生の自己学習への動機づけの必要性を知る</p>	<p>教育4-3.2</p> <p>①担当科目の目標に基づく学生の到達度を評価できる</p> <p>②ディプロマポリシーをふまえて、各担当科目の評価を学生へフィードバックができる</p> <p>③担当科目履修後の学生の自己学習への動機づけができる</p>	<p>教育4-3.3</p> <p>①担当科目の目標に基づく学生の到達度評価について、他の教員に助言できる</p> <p>②ディプロマポリシーをふまえて、各担当科目の評価を学生へフィードバックすることについて、他の教員に助言できる</p> <p>③担当科目履修後の学生の自己学習への動機づけについて、他の教員に助言できる</p>

5. 臨地実習指導	<p>実習環境・体制整備</p> <p>教育5-1.1</p> <p>①実習目的・目標に基づき実習施設を選定する必要性を知る</p> <p>②実習施設の特徴を理解することの重要性を知る</p> <p>③実習施設の関係者との連携・協働の必要性を知る</p> <p>④実習施設の看護の質の向上、実習指導者養成に対して協力・支援の必要性について知る</p> <p>⑤実習中のインシデント・アクシデントに関する報告相談、対処の体制を整えることの必要性について知る</p>	<p>教育5-1.2</p> <p>①実習目的・目標に基づき実習施設を選定できる</p> <p>②実習施設の特徴を理解し、説明できる</p> <p>③実習施設の関係者との連携・協働をすすめることができる</p> <p>④実習施設の看護の質の向上、実習指導者養成に対して協力・支援ができる</p> <p>⑤実習中のインシデント・アクシデントに関する報告相談、対処の体制を整備できる</p>	<p>教育5-1.3</p> <p>①実習目的・目標に基づき実習施設選定について、他の教員に助言できる</p> <p>②実習施設の特徴の理解について、他の教員に助言できる</p> <p>③実習施設の関係者との連携・協働について、他の教員に助言できる</p> <p>④実習施設の看護の質の向上、実習指導者養成に対する協力・支援について、他の教員に助言できる</p> <p>⑤実習中のインシデント・アクシデントに関する報告相談、対処の体制について、他の教員に助言できる</p>
<p>臨地での柔軟な 支援方法の工夫</p>	<p>教育5-2.1</p> <p>①学生が遭遇しうる看護現象の予測の必要性を知る</p> <p>②学生の日々のレディネス把握の必要性を知る</p> <p>③学生と関連の人々との相互作用を把握する必要性を知る</p> <p>④関連の人々との役割分担を行い指導をすすめる必要性を知る</p> <p>⑤実践者の判断・行動の教材化の必要性を知る</p>	<p>教育5-2.2</p> <p>①学生が遭遇しうる看護現象を予測できる</p> <p>②学生の日々のレディネスを把握できる</p> <p>③学生と関連の人々との相互作用を把握できる</p> <p>④関連の人々との役割分担を行い指導をすすめることができる</p> <p>⑤実践者の判断・行動を教材化できる</p>	<p>教育5-2.3</p> <p>①学生が遭遇しうる看護現象の予測について、他の教員に助言できる</p> <p>②学生の日々のレディネス把握について、他の教員に助言できる</p> <p>③学生と関連の人々との相互作用把握について、他の教員に助言できる</p> <p>④関連の人々との指導上の役割分担について、他の教員に助言できる</p> <p>⑤実践者の判断・行動の教材化について、他の教員に助言できる</p>
<p>学生の実習経験と 看護概念を関連づける 学習支援</p>	<p>教育5-3.1</p> <p>①実習体験の中から、看護学の学習に必要かつ重要な場面を選定する必要性を知る</p> <p>②学生の学習のタイミングを見極め、振り返りや自己学習を促すことの必要性について知る</p> <p>③学生の体験と学ぶべき看護概念を関連づけ、学生が実践・観察したことを意味づけられるよう支援する必要性について知る</p>	<p>教育5-3.2</p> <p>①実習体験の中から、看護学の学習に必要かつ重要な場面を選定できる</p> <p>②学生の学習のタイミングを見極め、振り返りや自己学習を促すことができる</p> <p>③学生の体験と学ぶべき看護概念を関連づけ、学生が実践・観察したことを意味づけられるよう支援することができる</p>	<p>教育5-3.3</p> <p>①実習体験の中から、看護学の学習に必要かつ重要な場面の選定について、他の教員に助言できる</p> <p>②学生の学習のタイミングを見極め、振り返りや自己学習を促す支援について、他の教員に助言できる</p> <p>③学生の体験と学ぶべき看護概念を関連づけ、学生が実践・観察したことを意味づけられるよう支援について、他の教員に助言できる</p>
<p>臨地での主体的学習 への支援</p>	<p>教育5-4.1</p> <p>①時間的制約・対象者との相互作用の影響をふまえ、実美に基づき、自己評価を促すことで学習を支援することの必要性について知る</p>	<p>教育5-4.2</p> <p>①時間的制約・対象者との相互作用の影響をふまえ、実美に基づき、自己評価を促すことで学習を支援できる</p>	<p>教育5-4.3</p> <p>①時間的制約・対象者との相互作用の影響をふまえ、実美に基づき、自己評価を促す学習支援について、他の教員に助言できる</p>

<p>臨地での倫理的学習への支援</p>	<p>教育5-5.1 ①対象者への看護を実現するために、学生のケアの不足を補う必要性を判断し、学生に説明する必要性を知る ②学生の安全の確保の必要性を知る ③学生が自らハラスメントを予防・対処するための方法等について指導することの必要性を知る ④インシデント・アクシデントへの注意喚起、対処等の学生への指導の必要性を知る</p>	<p>教育5-5.2 ①対象者への看護を実現するために、学生のケアの不足を補う必要性を判断し、学生に説明することができる ②学生の安全の確保ができる ③学生が自らハラスメントを自ら予防するための対処法等を指導できる ④インシデント・アクシデントへの注意喚起、対処等について学生に指導できる</p>	<p>教育5-5.3 ①対象者への看護を実現するために、学生のケアの不足を補う必要性について、他の教員に助言できる ②学生の安全の確保について、他の教員に助言できる ③学生が自らハラスメントを予防・対処する方法等について、他の教員に助言できる ④インシデント・アクシデントへの注意喚起、対処等の学生への指導について、他の教員に助言できる</p>
<p>6. 学生支援</p> <p>学生生活支援</p>	<p>教育6-1.1 ①学生相談に必要な教員の態度・対応を知る ②学生相談の体制、教員の役割・責任範囲（委員会・専門家との連携方法、抱え込まない等）を知る ③学生相談の必要性を知る（健康問題、メンタルヘルス、ハラスメント、経済的困難等）</p>	<p>教育6-1.2 ①学生相談に必要な教員の態度・対応が実践できる ②学生相談の体制、教員の役割・責任範囲（委員会・専門家との連携方法、抱え込まない等）を理解した上で、学生を支援できる ③学生相談の必要性を把握し（健康問題、メンタルヘルス、ハラスメント、経済的困難等）、問題解決への支援ができる</p>	<p>教育6-1.3 ①学生相談に必要な教員の態度・対応について、他の教員に助言できる ②学生相談の体制、教員の役割・責任範囲（委員会・専門家との連携方法、抱え込まない等）を理解し、他の教員に助言できる ③学生相談の必要性を把握し（健康問題、メンタルヘルス、ハラスメント、経済的困難等）、組織的な問題解決につなげることができる</p>
<p>キャリア支援</p>	<p>教育6-2.1 ①学生の将来のキャリア形成にかかわる支援方法（多様な看護職キャリアパス、転部・転学に関する情報伝達等）を知る ②国家試験受験にかかわる基本的な情報（スケジュール、出題傾向、模擬試験等）を把握できる ③看護独自の就職支援（関連情報の伝達、就職活動への助言等）の重要性について知る</p>	<p>教育6-2.2 ①将来のキャリア形成に関して、学生に情報提供、助言（看護職を志望しない学生に対する支援等）ができる ②国家試験受験にかかわる支援（関連情報の伝達、自己学習への支援、担当科目との関連把握等）ができる ③看護独自の就職支援（関連情報の伝達、就職活動への助言等）ができる</p>	<p>教育6-2.3 ①将来のキャリア形成に関する学生への情報提供、助言（看護職を志望しない学生に対する支援等）について、他の教員に助言できる ②国家試験受験にかかわる支援（関連情報の伝達、自己学習への支援、担当科目との関連把握等）について、他の教員に助言できる ③看護独自の就職支援（関連情報の伝達、就職活動への助言等）について、他の教員に助言できる ④近隣地域、関連の保健医療福祉機関と就職に関する情報交換を行い、他の教員に情報伝達・助言できる</p>
<p>国際交流の推進</p>	<p>教育6-3.1 ①留学生の文化や生活スタイルを配慮した学生支援の必要性を知る ②留学生にとっての日本の魅力を理解し、それを深めるための支援の必要性を知る ③学生の国際交流を促進するために必要な支援について知る ④国際交流を組織的に実施することの必要性について知る</p>	<p>教育6-3.2 ①留学生の文化や生活スタイルを配慮した学生支援ができる ②留学生にとっての日本の魅力を理解し、それを深めるための支援ができる ③学生の国際交流を促進するために必要な支援ができる ④国際交流を組織的に実施できるよう協力できる</p>	<p>教育6-3.3 ①留学生の文化や生活スタイルを配慮した学生支援について、他の教員に助言できる ②留学生にとって魅力的な日本理解を深めるための支援について、他の教員に助言できる ③学生の国際交流を促進するために必要な支援について、他の教員に助言できる ④国際交流を組織的に実施できるよう、環境や体制を整備する</p>

3) 研究

研究要素	レベルI [知る]	レベルII [自立してできる]	レベルIII [支援・指導・推進・発展] できる]
1. 研究者マインド	研究1-1.1 ①研究者マインドの必要性を知る	研究1-1.2 ①研究者マインドをもって研究を遂行できる (研究者マインドの例) ・クリティカルシンキング ・真理を追究し、偏見や先入観や世間的な常識に感わされることのない態度 ・真なる意見や他者を尊重する態度	研究1-1.3 ①研究者マインドの醸成を支援できる
2. 研究遂行能力			
看護学研究の理解	研究2-1.1 ①看護学研究とは何であり、何ができるのかについて知る	研究2-1.2 ①看護学研究とは何であり、何ができるのかについて理解して、研究できる	研究2-1.3 ①看護学研究とは何であり、何ができるのかについて助言できる
看護学研究の課題の見つけ方	研究2-2.1 ①看護学研究として独自性・創造性のある研究課題の設定について知る	研究2-2.2 ①看護学研究として独自性・創造性のある研究課題を設定できる	研究2-2.3 ①看護学研究として独自性・創造性のある研究課題の設定を支援できる
分野横断的な研究の進め方	研究2-3.1 ①分野横断的な研究について知る	研究2-3.2 ①分野横断的な研究に参加できる	研究2-3.3 ①分野横断的な研究を企画・運営できる
研究フィールドとの関係の取り方	研究2-4.1 ①研究フィールドとの関係の取り方を知る	研究2-4.2 ①研究フィールドと良好な関係を展開できる	研究2-4.3 ①研究フィールドとの関係の取り方を支援し、発展できる
データの取り扱いとその方法	研究2-5.1 ①データの特性に合わせた適切な分析方法を知る	研究2-5.2 ①データの特性に合わせて適切に分析できる	研究2-5.3 ①データの特性に合わせた適切な分析を支援できる
倫理的配慮(知的財産権、利益相反、オアサーシッパ含む)	研究2-6.1 ①看護学研究における倫理について知る	研究2-6.2 ①看護学研究における倫理をふまえて研究できる	研究2-6.3 ①看護学研究における倫理について助言できる
看護学研究論文の書き方	研究2-7.1 ①学術的な著述の仕方について知る	研究2-7.2 ①学術的な著述ができる	研究2-7.3 ①学術的な著述について助言できる
研究論文のクリティークの仕方	研究2-8.1 ①研究論文のクリティークについて知る	研究2-8.2 ①研究論文をクリティークできる	研究2-8.3 ①研究論文のクリティークについて助言できる
研究成果をもって看護実践の場へコミットする	研究2-9.1 ①研究成果を用いて看護実践の場へコミットし、研究成果を還元することの重要性を知る	研究2-9.2 ①研究成果を用いて看護実践の場へコミットし、研究成果を還元できる	研究2-9.3 ①研究成果を用いて看護実践の場へコミットし、研究成果の還元について助言し推進できる
3. 研究マネジメント・調整能力			
時間のマネージメント	研究3-1.1 ①実習や込み入ったカリキュラムの中で時間を効率的にマネージメントし、研究に費やす時間を確保する必要性について知る	研究3-1.2 ①実習や込み入ったカリキュラムの中で時間を効率的にマネージメントし、研究に費やす時間を確保できる	研究3-1.3 ①実習や込み入ったカリキュラムの中で研究に費やす時間のマネージメントができるように支援できる
研究費の獲得と適切な運用	研究3-2.1 ①競争的資金の獲得に向けて、申請して仕組みを知る ②研究費の適切な運用について知る	研究3-2.2 ①競争的資金を獲得できる ②研究費を適切に運用できる	研究3-2.3 ①競争的資金を獲得し、他の教員に助言できる ②研究費を適切に運用し、他の教員に助言できる

研究者としての人的資源の形成やマネジメント	研究3-3.1 ①人的資源の形成やマネジメントについて知る	研究3-3.2 ①人的資源の形成やマネジメントができる	研究3-3.3 ①人的資源の形成やマネジメントについて助言・支援できる
研究環境の整備	研究3-4.1 ①研究活動を促進するリソースや環境について知る	研究3-4.2 ①研究活動を促進するリソースや環境を活用しながら研究を遂行できる	研究3-4.3 ①研究活動を促進するリソースや環境を整備し、研究活動の推進を支援できる
組織的研究活動の推進	研究3-5.1 ①組織的研究活動の必要性を知る	研究3-5.2 ①組織的研究活動に参加できる	研究3-5.3 ①組織的研究活動を遂行し、他の教員に助言ができる
4. 研究発信の意義と理解			
発信する研究の社会的意義の理解			
看護学教育・実践の質の向上	研究4-1.1 ①看護学教育・実践の質の向上に対する研究の影響力を知る	研究4-1.2 ①看護学教育・実践の質の向上に対する研究の影響力を発信できる	研究4-1.3 ①看護学教育・実践の質の向上に対して研究成果の影響力を発信し、社会的、政策的、国際的展開ができる
看護学研究の発展	研究4-2.1 ①自身の研究が看護学研究の発展につながっていることを知る	研究4-2.2 ①自身の研究を通して看護学研究の発展に寄与できる	研究4-2.3 ①自身のプロジェクト研究を通して看護学研究の発展に寄与できる
新しい変化への対応	研究4-3.1 ①時代、地域特性と共に変化する看護学へのニーズ、関心事を知る	研究4-3.2 ①時代、地域特性と共に変化する看護学へのニーズ、関心事に研究成果を応用できる	研究4-3.3 ①時代、地域特性と共に変化する看護学へのニーズ、関心事に研究成果の活用を支援できる
成果発信			
研究成果の計画的・戦略的な普及・発信	研究4-4.1 ①研究成果の計画的・戦略的な普及と発信の重要性を知る	研究4-4.2 ①研究成果の計画的・戦略的な普及と発信ができる	研究4-4.3 ①研究成果の計画的・戦略的な普及と発信について助言し、推進できる
交流			
研究会・学会活動	研究4-5.1 ①研究会・学会活動の意義と方法について知る	研究4-5.2 ①研究会・学会活動を主体的にできる（研究発表、論文発表等）	研究4-5.3 ①研究会・学会活動について支援でき、普及と発信の場の育成に貢献できる
5. 国際化			
国際学会での発表	研究5-1.1 ①国際学会に参加する意義と方法について知る	研究5-1.2 ①国際学会に参加したり、発表できる	研究5-1.3 ①国際学会での発表への助言や発表の場をつくる(企画・運営等)
国際共同研究の推進	研究5-2.1 ①国際共同研究の意義と方法について知る	研究5-2.2 ①国際共同研究について役割を担うことができる	研究5-2.3 ①国際共同研究を支援し発展させることができる
学術国際交流の推進	研究5-3.1 ①学術国際交流の意義と方法について知る	研究5-3.2 ①学術国際交流について役割を担うことができる	研究5-3.3 ①学術国際交流を支援し発展させることができる

4) 社会貢献

社会貢献		レベルI [知る]	レベルII [自立してできる]	レベルIII [支援・指導・拡大できる]
要素	1. 社会貢献のあり方	社会1-1.1 ①自大学における社会貢献のあり方を知る	社会1-1.2 ①自大学の理念に基づき社会貢献活動ができる	社会1-1.3 ①自大学の理念に基づく社会貢献ができる環境を整えることができる
	2. 看護活動のイノベーション	社会2-1.1 ①社会貢献に必要な社会動向や社会における看護専門職へのニーズを把握するための方法について知る	社会2-1.2 ①最新の社会動向と看護専門職の果たすべき役割について把握できる	社会2-1.3 ①最新の社会動向を把握し、看護専門職が社会において果たすべき役割について、他の教員に助言できる
実践への適用	社会2-2.1 ①最新の研究成果の活用による実践のイノベーションについて知る ②研究成果を応用する際に、必要となる法や制度について知る	社会2-2.2 ①最新の研究成果を活用することで実践のイノベーションに貢献できる ②法や制度をふまえて、研究成果を応用することができる	社会2-2.3 ①最新の研究成果を活用した実践のイノベーションについて、他の教員に助言できる ②法や制度をふまえて、研究成果を応用することについて助言できる	社会2-2.3 ①最新の研究成果を活用した実践のイノベーションについて、他の教員に助言できる ②法や制度をふまえて、研究成果を応用することについて助言できる
	政策への提言	社会2-3.1 ①研究成果を用いた政策への提言方法について知る	社会2-3.2 ①研究成果を用いて、社会の変革に必要な政策を提言できる	社会2-3.3 ①研究成果を用いて、社会の変革に必要な政策の提言を戦略的に行うことができる
3. 地域貢献	看護の社会的役割や意義（価値、特質）の発信と活用	社会3-1.1 ①看護の社会的役割や意義（価値、特質）の発信について知る ②看護の社会的役割や意義（価値、特質）の活用について知る	社会3-1.2 ①看護の社会的役割や意義（価値、特質）を社会に発信できる ②看護の社会的役割や意義（価値、特質）を用いて、社会に貢献できる	社会3-1.3 ①看護の社会的役割や意義（価値、特質）の発信に向けて、他の教員に助言でき、環境を整えることができる ②看護の社会的役割や意義（価値、特質）を用いた社会貢献について、他の教員に助言でき、組織的な取り組みができる
	看護系大学のリソースとしての役割	社会3-2.1 ①地域や自治体との協働により、地域におけるリソースとして看護系大学を活用できることについて知る ②地域貢献のための広報について知る ③地域貢献に関わる法的・倫理的課題と起こりうるリスクについて知る	社会3-2.2 ①地域や自治体との協働により、地域におけるリソースとして看護系大学を活用できることに貢献できる ②地域貢献のための広報活動ができる ③地域貢献に関わる法的・倫理的課題のリスクを回避できる	社会3-2.3 ①地域や自治体との協働により、地域におけるリソースとして看護系大学を活用できるように、環境を整えることができる ②地域貢献のための広報について組織的な取り組みができる ③地域貢献に関わる法的・倫理的課題のリスク回避について、指導・助言ができる
産官学連携の実施	社会3-3.1 ①企業や行政機関との連携事業について知る	社会3-3.2 ①企業や行政機関との連携事業を担うことができる	社会3-3.3 ①企業や行政機関との連携事業の企画・運営ができる	

5) 運営

運営要素	レベルⅠ [知る]	レベルⅡ [自立してできる]	レベルⅢ [支援・指導、拡大できる]
1. 組織と個人の理解 ① 自大学・学部学科の歴史について知る ② 自大学・学部学科の歴史について語る場に参加することができる	運営1-1.1 ① 自大学・学部学科の歴史について知る ② 自大学・学部学科の歴史について語る場に参加することができる	運営1-1.2 ① 自大学・学部学科の歴史について語る場をつくること ② 自大学・学部学科の歴史について語る場をつくること ③ 自大学・学部学科の歴史について語る場をつくること	運営1-1.3 ① 自大学・学部学科の歴史について語る場をつくること ② 自大学・学部学科の歴史について語る場をつくること
自大学・学部学科の理念の理解 ① 自大学・学部学科のミッションについて理解し、学部学科のミッションと戦略をつくりあげる必要性について知る	運営1-2.1 ① 自大学・学部学科のミッションについて理解し、学部学科のミッションと戦略をつくりあげる必要性について知る	運営1-2.2 ① 自大学・学部学科のミッションについて理解し、学部学科のミッションと戦略をつくりあげることに参加することができる	運営1-2.3 ① 自大学・学部学科のミッションについて理解し、学部学科のミッションと戦略をつくりあげることに参加することができる
大学の組織体制の理解 ① 大学がどのような組織構成ならびに構成員により運営され、成立しているのかを知る ② 委員会とその役割について知る ③ 意思決定機関について知る ④ 組織体制上のルールについて知る ⑤ 大学運営における情報共有の範囲と内容について知る ⑥ 可能な範囲における権限の分権・委譲について知る	運営1-3.1 ① 大学がどのような組織構成ならびに構成員により運営され、成立しているのかを知る ② 委員会とその役割について知る ③ 意思決定機関について知る ④ 組織体制上のルールについて知る ⑤ 大学運営における情報共有の範囲と内容について知る ⑥ 可能な範囲における権限の分権・委譲について知る	運営1-3.2 ① 大学がどのような組織構成ならびに構成員により運営され、成立しているのかを説明できる ② 委員会で役割を果たすことができる ③ 意思決定機関に意見を伝えることができる ④ 組織体制上のルールをふまえた活動ができる ⑤ 自身の立場や役割に応じて、大学運営に関する情報共有ができる ⑥ 可能な範囲で権限の分権・委譲に関わる提案ができる	運営1-3.3 ① 大学がどのような組織構成ならびに構成員により運営され、成立しているのかを説明できる ② 委員会を組織することができる ③ 意思決定に関与できる ④ 組織体制上のルールを導くことができる ⑤ 大学運営における効率的・効果的な情報共有のシステムをつくること ⑥ 可能な範囲における権限の分権・委譲ができる
大学の組織人としての態度の理解 ① 場や状況に応じて所属する組織を意識した立場・役割をとる必要性について知る	運営1-4.1 ① 場や状況に応じて所属する組織を意識した立場・役割をとる必要性について知る	運営1-4.2 ① 場や状況に応じて、所属する組織を意識した立場・役割をとることができる	運営1-4.3 ① 場や状況に応じて所属する組織を意識した立場・役割をとることについて、他の教員に助言できる
2. 組織文化の創造 組織文化の理解・醸成 ① 組織文化とは何であるかについて知る ② 自らも組織文化を創ることに貢献できることを知る	運営2-1.1 ① 組織文化とは何であるかについて知る ② 自らも組織文化を創ることに貢献できることを知る	運営2-1.2 ① 組織文化を理解し、それを維持発展できる行動をとることができる ② 自らも組織文化を創ることに役割を果たすことができる	運営2-1.3 ① 組織文化を理解し、それを維持発展できるように環境を整えることができる ② 組織文化を創るために、環境を整え、他者を支援し、自らの役割を果たすことができる
自大学・学部学科の組織文化の創造 ① 自大学・学部学科の組織文化について知る ② 変革時の新たな組織文化創造の必要性とそのための場づくりについて知る	運営2-2.1 ① 自大学・学部学科の組織文化について知る ② 変革時の新たな組織文化創造の必要性とそのための場づくりについて知る	運営2-2.2 ① 自大学・学部学科の組織文化の強み、弱みを自覚できる ② 変革時に新たな組織文化創造の必要性を判断し、創造のための自由な意見交換の場をつくること	運営2-2.3 ① 自大学・学部学科の組織文化の強み、弱みを自覚した上で、さらに発展できるような組織的な行動をとれる ② 変革時の新たな組織文化創造に関する組織的な取り組みを組織し、他の教員を支援できる

3. 課題解決に向けた組織マネジメント	<p>運営3-1.1 ①組織マネジメントサイクルについて知る</p> <p>運営3-2.1 ①モチベーションの維持について知る ②タイムマネジメントについて知る ③ワークライフバランスについて知る ④効果的なコミュニケーション（報告・連絡・相談・情報発信）について知る ⑤組織マネジメントに関与しながらの教員のキャリア開発について知る</p>	<p>運営3-1.2 ①組織マネジメントサイクルについて理解し、自分の役割内で参加できる</p> <p>運営3-2.2 ①モチベーションが維持できる ②タイムマネジメントができる ③ワークライフバランスを意識して活動できる ④コミュニケーション（報告・連絡・相談・情報発信）のスキルを効果的に活用できる ⑤組織マネジメントに関与しながら自らのキャリア開発ができる</p>	<p>運営3-1.3 ①組織マネジメントサイクルを推進できる</p> <p>運営3-2.3 ①モチベーションを維持・喚起できる環境を整える体制をつくること ②タイムマネジメントができる環境を整えることができる ③ワークライフバランスについて他の教員に助言でき、促進する環境を整備できる ④コミュニケーション（報告・連絡・相談・情報発信）について、指導と環境の調整ができる ⑤組織マネジメントに関与しながらの教員のキャリア開発環境を整備できる</p>
ハラスメント対策	<p>運営3-3.1 ①ハラスメントとは何かを知る ②ハラスメントへの組織的対応を知る ③ハラスメントを予防する対策について知る</p>	<p>運営3-3.2 ①ハラスメントとは何かについて理解し、説明できる ②ハラスメントへの組織的対応体制を適切に利用できる ③ハラスメントを予防する対策をとることができる</p>	<p>運営3-3.3 ①ハラスメントとは何かについて、他の教員に助言できる ②ハラスメント時に最善で透明性のある組織的対応がとれるように、体制改善や関係者への支援ができる ③ハラスメントを予防するシステムをつくり、関係者への支援ができる</p>
リスクマネジメント	<p>運営3-4.1 ①災害時や日常の危機管理行動、役割行動について知る ②法制度、倫理的問題を含めて起こりうるリスクについて知る</p>	<p>運営3-4.2 ①災害時や日常の危機管理行動、役割行動がとれる ②法制度、倫理的問題を含めてリスクに対処し最小限にする行動が取れる</p>	<p>運営3-4.3 ①災害時や日常の危機管理に関して、環境を整備し、必要時指揮がとれる ②法制度、倫理的問題を含めて、リスクを最小限にする環境を整えることができる</p>
4. 組織変革時のリーダーシップ・フォローアップ	<p>運営4-1.1 ①ビジョンの共有の重要性について知る ②メンバーをエンパワーする必要性について知る ③リーダーシップのあり方と必要性について知る ④リーダーシップ・フォローアップの発揮に必要なコミュニケーションスキルを知る</p>	<p>運営4-1.2 ①ビジョンの共有をふまえて活動ができる ②メンバーをエンパワーできる ③自らのリーダーシップのあり方と必要性を自覚し、必要時、発揮できる ④リーダーシップ・フォローアップの発揮に必要なコミュニケーションスキルを身につけている</p>	<p>運営4-1.3 ①ビジョンの共有に向けて他の教員に働きかけられること ②メンバーをエンパワーできる組織的な環境を整えることができる ③リーダーシップの発揮について、他の教員に助言できる ④リーダーシップ・フォローアップの発揮に必要なコミュニケーションスキル向上に関して、他の教員に助言でき、支援環境を整えることができる</p>

3) 活用方法

本 FD マザーマップは、看護系大学が社会からの期待に応え、その使命を組織的に果たしていく上で必要となる教員の能力を行動レベルで示した、いわゆる「能力マップ」として構成されている。また、「能力」のレベルは、わが国の看護系大学の現状をふまえ、「教授」「准教授」「講師」「助教」といった職位別ではなく、大学教員としての経験の多寡によって、「レベルⅠ：知る段階」「レベルⅡ：自立してできる段階」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる段階」の3段階に分類されている。

したがって、本マザーマップを参照すれば、ただちに FD が企画できることを意図したものではない。また、対象が「教授」であっても、看護系大学教員としての経験が浅ければ、レベルⅠの能力の育成が必要ということもあれば、「助教」であっても、レベルⅢの能力を有している、ということもあり得る。

開発者としては、本マザーマップが、看護系大学教員の FD 活動の推進のための起点として活用され、看護系大学の組織的発展に資することを願っている。具体的には、以下のような活用の仕方が考えられる。

(1) 組織としての活用

① 自組織の教員構成に即した FD ニーズ分析ツールとしての活用

本マザーマップを活用して、自組織の教員が、本マザーマップに取り上げられた能力をどの程度有しているのかを判断することで、組織の構成メンバーに即した FD ニーズの分析ができる。後述するが、看護系大学教員の「実践・問題意識」、「FD マザーマップ活用」、「FD コンテンツ開発」は、往還しながら、発展を促す関係にある。FD マザーマップを使った組織診断を通して、自大学の教員の能力向上への問題意識をきっかけとして、さらに視野広く教員の能力を考える機会とすることができる。

② 自組織の FD 活動の現状分析、評価ツールとしての活用

本マザーマップを活用して、自組織が実施している FD 活動によってどのような教員の能力が育成されているのかについて、現状分析、評価ができる。

③ 自組織の実情に即した FD マップ作製の雛型としての活用

本マザーマップの基本構成を雛型として活用することで、各大学が自組織の実情に即した FD マップを開発することができる。

④ FD の計画的な企画・実施・評価のモデルとして活用

本マザーマップに取り上げられた教員の能力を FD の達成目標として活用することで、自組織の FD を計画的に企画・実施・評価することができる。

⑤ FD 企画の焦点化の検討のために活用

FD 企画の際、FD マザーマップとの対応を検討することで、より適切な FD の必要性に気づき、FD 企画の焦点化に活用できる。例えば、学生への対応に困る若手教員への FD 企画時に、どのような能力を向上させると若手教員が困らなくなるかを FD マザーマップと対応させて考えた。すると、組織的な体制不足、教育理念に関わる課題であることに気づき、単なる学生への教育的対応の問題ではなく、教育、運営、基盤にかかわる FD として検討できた。このように FD マザーマップを活用して、必要な能力を整理することにより、FD 企画の焦点化に活用できる。

(2) 教員個人としての活用

① 教員の自己評価、目標設定ツールとしての活用

本マザーマップに取り上げられた教員の能力が、自身にどの程度備わっているかを、日頃の大学教員としての活動状況から振り返ることで、看護系大学教員としての能力の自己評価、今後の能力開発に向けた目標設定ツールとして活用できる。「FD 企画の焦点化の検討」で前述したように、日ごろの問題意識や課題を FD マザーマップと対応させて考えることで、自分では気づかなかった課題に気づくことができる。特に自分自身の能力向上だけでは解決できない組織に働きかける必要のある課題について、考える機会とできる。

また、本マザーマップに取り上げられた教員の能力を FD の達成目標として活用することで、これまでの FD 履歴の整理、今後の計画的な FD 研修受講の計画を立てることができる。

(3) FD プランニング支援データベースとしての活用

① FD 活動の雛形としての活用

本マザーマップの基本構成を雛型として活用することで、現状として実施されているものを体系的に整理し、自大学の行った FD の現状を確認できる。これにより、他大学の実施している FD の内容を知り、参考にしつつ、今後必要と思われる FD を検討することができる。

なお、本マザーマップで取り上げられている「能力」は、看護職の有免許者、すなわち看護学系大学教員を主たる対象としたものであるが、看護学教育に携わる看護系大学教員すべてに求められるものも含まれている。各看護系大学の実情に応じて、適宜内容を取捨することが可能である。

また、本 FD マザーマップは、各大学の必要性に応じて実施される全学 FD との関連を意図して作成したものではない。したがって、実際の活用には、全学 FD との関連において各組織それぞれの必要に応じてマップを作成し、看護系大学教員の FD 活動を企画・実施することができる。

3. FD プランニング支援データベースの開発

1) 開発のプロセス

(1) FD プランニング支援データベース開発の目的・意義

FD プランニング支援データベースは、看護学高等教育における FD の取り組みを推進し、また、大学間共同活用体制の構築推進のために開発された。

データベースでは、FD に利用できる資料（物的資源）や講師（人的資源）などを検索でき、各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質を踏まえた有効な FD を計画的に企画・実施・評価する上で有用な情報を提供することができる。またこれらを活用することで大学間の相互交流が活性化され、大学間共同活用体制の構築を推進することができる。

(2) データベースの構成

FD プランニング支援データベースは、以下の 3 つのデータベースより構成される。

①「FD マザーマップ」データベース

看護学教育における FD マザーマップを掲載。FD マザーマップの実施状況を記録できる。

②「FD コンテンツ」データベース

看護系大学における FD を推進するためのツールである FD コンテンツを掲載。関連する FD マザーマップの項目とリンクしている。

③「FD 実績表」データベース

各看護系大学が実際に行った FD 実績を記録した「FD 実績表」を掲載。関連する FD マザーマップの項目とリンクしている。

データベースは一般公開されているページの他に、メールアドレスを登録することによりだれでも利用できる「個人用ページ」と、センターより発行した ID とパスワードを入力することによって利用できる「大学用ページ」がある。

(3) 開発の経緯

本データベースは「看護学教育における FD マザーマップ」の開発と並行して、平成 23 年度から平成 25 年度にかけて行われた。学内会議、専門家会議で掲載すべき情報の検討を重ね、平成 25 年 10 月に一般公開された。当初の事業計画では「FD コンテンツ」データベースは含まれていなかったため、「FD マザーマップ」データベースと「看護系大学の FD 実績表」データベースのみが掲載されていた。平成 26 年度に事業計画の見直しが行われ、FD コンテンツ開発が行われることとなり、本データベースに情報を蓄積するため、平成 27 年 3 月に「FD コンテンツ」データベース機能を実装した。



FD プランニング支援データベースのトップページ
<http://fd.np-portal.com/>

2) 活用方法

(1) 「FD マザーマップ」 データベース

看護学教育における FD マザーマップの全体構成や要素一覧、詳細項目を閲覧することができる。また、全体構成から見たい項目を選択すると、各要素がポップアップ表示され、FD マザーマップの実施状況のチェックをすることができる。個人用ページおよび大学用ページではチェックしたデータを記録として残すことができる。

The process is shown in three steps:

- Step 1: Overview Diagram** - A central hub-and-spoke diagram with five main categories:
 - 社会貢献 (Social Contribution)**: Social contribution methods, innovation in the field, regional contribution.
 - 教育 (Education)**: Education mindset, curriculum development, faculty development, research promotion, student support.
 - 基礎 (Foundation)**: Foundation for nursing faculty, foundation for nursing education.
 - 研究 (Research)**: Research mindset, research ability, internationalization.
 - 運営 (Management)**: Organization and personnel management, organizational culture creation, university management, leadership training, membership.
- Step 2: Detailed Table** - A table listing various social contribution elements. A blue arrow points from the 'Social Contribution' category in the diagram to this table.

要素	レベルI 基本	レベルII 進出してある	レベルIII 実態調査 実施している	実績表
1. 社会貢献のあり方				
社会貢献のあり方				PDF
2. 看護現場のイノベーション				
ニーズ把握の方法				PDF
実践への活用				PDF
政策への提言				PDF
3. 地域貢献				
看護の社会的役割や意義（標準、特質）の発信と活用				PDF
看護系大学のリソースとしての役割				PDF
産官学連携の実施				PDF
- Step 3: Selection Form** - A pop-up form titled '社会貢献のあり方' (Social Contribution Methods) with three levels:
 - レベルI**: ①自大学における社会貢献のあり方を知る
 - レベルII**: ①自大学の理念に基づき社会貢献活動ができる
 - レベルIII**: ①自大学の理念に基づき社会貢献ができる環境を整えることができる
 Buttons: 未実施にする, レベルI 実施済にする, レベルII 実施済にする, レベルIII 実施済にする.
- Step 4: Updated Table** - The table from Step 2 is shown again, but now the 'レベルII' and 'レベルIII' columns for '社会貢献のあり方' are highlighted in yellow, indicating that these levels have been selected.

(2) 「FD 実績表」 データベース

FD 実績表にはデータベース登録大学が実施した FD 企画のプログラム名、プログラム実施方法などの他に、FD に利用できる資料（物的資源）や講師（人的資源）が掲載できるようになっており FD を計画的に企画・実施・評価する上で有用な情報を得ることができる。現在 83 件の FD 実績表が登録されており（平成 28 年 3 月）、FD マザーマップの各項目を選択することによって関連の実績表を閲覧することができる。なお、登録大学用ページでは実績表の検索機能が実装されている。

The image illustrates the navigation from the FD Master Map to the Achievement Database. It is divided into three main sections:

- Top Left: FD Master Map**

A circular diagram with five categories: 社会貢献 (Social Contribution), 教育 (Education), 基礎 (Foundation), 研究 (Research), and 運営 (Management). The 'Management' category is highlighted in orange. Below the diagram is a note: "個人利用の目的以外でFDマザーマップのご利用を希望される際は、問い合わせフォームよりご連絡ください。"
- Top Right: Management Table**

A table titled "運営 Management" with columns: 要 素 (Element), レベルI (Level I), レベルII (Level II), レベルIII (Level III), and 実績表 (Achievement Table). The table lists various management activities, with "ハラスメント対策" (Harassment Measures) highlighted in yellow. A blue arrow points from the 'Management' category in the Master Map to this table.
- Bottom: Achievement Database**

A screenshot of the "FD実績表" (FD Achievement Table) database. It shows a table with the following data:

実施年度	平成24年度
大学名	千葉大学
プログラム名	ハラスメントの理解
プログラムは単独立面かシリーズ企画か	単独
プログラム目的	その他（ハラスメント）
プログラムの実施方法	講義
プログラム内容	ハラスメントの具体的な内容について理解を深め、教育研究活動の中で生じやすいハラスメントとそれの対策について共有する。講義として、専任法務研究科の遠藤弘子教授を招いた。
実施主体	その他（）
対象者	特定の教員（研究科教授会に参加する教員（教員35名・事務編43名））／事務員
参加人数	35人
プログラム実施時間	60分
使用した教材・資料	資料の有無：なし
使用した機器・物品	使用機器・物品の有無：あり
プログラムの計画費・立派費	計画費・立派費の有無：なし
費用	費用の有無：なし
詳細表示	詳細表示

A blue arrow points from the 'Assessment' row in the Management table to this database entry.

(3) 「FD コンテンツ」データベース

FD マザーマップに関連したコンテンツを閲覧することができる。コンテンツにはFD マザーマップ活用ガイドや、外国語版FD マザーマップ（英語、中国語）、FD マザーマップの紹介や活用方法を示す動画、資料等が掲載されている。FD マザーマップの各項目を選択することによって関連の実績表を閲覧することができる。なお、登録大学用ページでは実績表の検索機能が実装されており、また、一般用ページでは公開されていないFD コンテンツも含まれている。

The image shows a screenshot of the FD Mother Map support database website. The browser address bar shows 'fd.np-portal.com/univ/content/'. The page title is 'FD マザーマップ・支援データベース'. Below the title, there is a search bar with 'FDコンテンツ検索' and fields for 'カテゴリ' and 'キーワード'. The search results list several items, including 'マザーマップを用いたFD企画' and 'FDマザーマップによる自己「診断」'. A video player is shown below the search results, displaying a video titled 'P1FDマザーマップによる自己「診断」' with a duration of 15:45 / 26:27. The video player is overlaid on a larger image of a presentation slide titled 'FD Mother Map for Nursing Education' from the 'Center for Education and Research in Nursing Practice, Graduate School of Nursing, Chiba University'.

FD プランニング支援データベースは現在（平成 28 年 3 月）28 校が登録しており、実績表は 83 件掲載されている。FD コンテンツは公開準備が整ったものより順次掲載している。

4. FD コンテンツの開発

1) 開発のプロセス

(1) 開発の経緯

本センターでは平成 23 年度以降 FD マザーマップの開発に取り組み、看護学教育における FD マザーマップ ver.1 および ver.2 を開発してきた。FD マザーマップを実際に活用した大学からは「必要とされる能力が体系的にまとまっていてよい」「自大学の FD を見直す良い機会になる」等の高評価をいただいていた。一方で、「実際に FD マザーマップをどのように活用すればよいのか」「具体的にはどのような FD 企画を立案すればよいのか」といった戸惑いの声も聞かれた。FD マザーマップの開発と同時に作成した「看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド」には FD マザーマップの活用例を紹介してきたが、看護学教育の現場ではより具体的、実践的な FD ツールが求められており、FD コンテンツ開発の必要性が生じた。

また、平成 26～27 年度は「大学間共同活用体制の構築と展開」として全国を 6 ブロックにわけ基幹校を選定、FD ディベロッパーを育成して、全国の看護系大学の FD 推進を図る予定であったが、基幹校の選定、ブロック別の FD 展開が困難であることから、事業計画を見直すこととなった。平成 26～27 年度は FD マザーマップコンテンツ開発事業に取り組む大学を選定し、FD マザーマップのコアバリューを明確にしたコンテンツ開発を通じて大学間共同活用体制を構築することとした。

(2) FD コンテンツの開発

FD コンテンツ開発は学内会議、平成 26 年度の専門家会議で検討した結果、「FD マザーマップ紹介コンテンツ」、「FD 企画者向けコンテンツ」、「FD マザーマップ対応型教材」の 3 種類のコンテンツから構成することとした。コンテンツ開発の全体の枠組みは以下の図のとおりである。

コンテンツ種別	FDマザーマップ紹介コンテンツ	FD企画者向けコンテンツ	FDマザーマップ対応型教材
ねらい・対象	「FDマザーマップ」のを知りたい、という看護系大学向けに、「FDマザーマップ」の概要を紹介する	看護系大学のFD企画者が、自大学のFDニーズを的確に把握し、効果的なFDを企画するための組織分析の方法を身につける	FDマザーマップの各区分、要素、能力レベルに対応した看護系大学教員の能力を高める
形態	冊子 PPT教材 ビデオ教材	冊子 ビデオ教材 ワークショップ (センター事業「看護学教育ワークショップ」として年1回の定例開催)	ビデオ教材 事例集(冊子) ワークショップ
コンテンツ(案)	FDマザーマップ開発の経緯 FDマザーマップの構成 FDマザーマップの内容 FDマザーマップの活用 FDマザーマップを活用した大学の声	FDマザーマップによる自己診断 FDマザーマップによる組織課題の発見 FD研修企画に必要な基礎知識	「基盤」「教育」「研究」については、FDマザーマップの各区分、要素、能力レベルにそってビデオ教材をシリーズ化(教材+FD活用ガイド) スーパー先生による授業ビデオ+スーパー先生インタビューシリーズ 「社会貢献」good practice事例集「こういう活動も社会貢献になる！」シリーズ 「運営」...good practice事例集、ハラスメント対策事例集
備考	センター教員がこれまでの実績をふまえて作成	専門家会議メンバーの協力を得ながら開発	モデル校、先進校との共同開発

図 FD マザーマップコンテンツ開発事業の全体イメージ

平成 26 年度第 3 回専門家会議は拡大会議として共同で FD コンテンツ開発に取り組む看護系大学教員にも参加いただいた。会議では実際に「FD マザーマップ対応型教材」の開発（企画案の立案まで）を行うことを目的として 2 日間の合宿形式で開催した。コンテンツ開発に先んじて、専門家委員の川島啓二先生（国立教育政策研究所）より「FD マザーマップの自己診断」、中島英博先生（名城大学）より「マザーマップを用いた FD 企画」のワークショップを行っていただいた。なおワークショップの風景は許可を得た上で撮影し「FD 企画者向けコンテンツ」として FD プランニング支援データベースに掲載している。

本会議の成果である企画案や、企画立案にあたり得られた意見や検討内容をもとに「FD マザーマップ対応型教材開発の基本的な考え方」を作成し、開発方針を確認した上で、平成 27 年度は FD コンテンツ開発委員会を立ち上げ、コンテンツ開発に取り組んだ。

FD マザーマップ対応型教材開発の基本的な考え方

1. 看護系大学教員の生涯にわたる能力開発に資する教材を開発する
2. 各看護系大学が、他大学や当センターの支援を受けながら、自主的・継続的・体系的に FD 活動を発展させていくことのできる教材を開発する
3. **看護**が対象者の健康を維持、促進する働きであることをふまえた教材を開発する
4. **看護学**が看護実践の根拠の追究、看護の価値の創造およびその発展を目指す科学であることをふまえた教材を開発する
5. **教育**が他者を支援するはたらきであることをふまえた教材を開発する
6. **研究**が真理を追究する活動であることをふまえ、異なる意見や他者を尊重する態度を重視した教材を開発する
7. 看護の**社会的役割**や意義をふまえた教材を開発する
8. 大学**組織と個人**との関係をふまえた教材を開発する

※1～4 は、すべての教材開発における基本的な考え方である。

4, 6, 7, 8 は、それぞれ「教育マップ」「研究マップ」「社会貢献マップ」「運営マップ」に対応した教材開発における基本的な考え方である。

2) 開発コンテンツ

(1) 開発コンテンツ一覧

コンテンツ種類	ID	タイトル	形態	FDマザーマップ該当項目
	00	FDプランニング支援データベース 説明書	PDF	
FDマザーマップ紹介 コンテンツ Introduce	I-1	看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト 活動・成果報告書 2011年度～2012年度	PDF、冊子	
	I-2	看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドver.1	PDF、冊子	
	I-3	看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドver.2	PDF、冊子	
	I-4	看護学教育におけるFDマザーマップ 最新版	PDF	
	I-5	FD Mother Map for Nursing Education (FDマザーマップver.2英語版)	PDF、冊子	
	I-6	护理学教育中的教員専門能力発展基本図 (FDマザーマップver.2中国語版)	PDF、冊子	
	I-7	FDマザーマップcheck sheet(レーダーチャート)	excel	基盤1-4 教員活動に対する自己評価 基盤1-5 看護系大学教員としてのキャリア開発
	I-8	FDマザーマップの活用の実際～組織評価の試み～	動画	基盤1-4 教員活動に対する自己評価 基盤1-5 看護系大学教員としてのキャリア開発
FD企画者向け コンテンツ Planner	P-1	FDマザーマップによる自己「診断」 2015年3月26日川島先生	動画	基盤1-4 教員活動に対する自己評価 基盤1-5 看護系大学教員としてのキャリア開発
		FDマザーマップによる自己「診断」 配布資料	PDF	
	P-2	マザーマップを用いたFD企画 2015年3月26日中島先生	動画	基盤1-4 教員活動に対する自己評価 基盤1-5 看護系大学教員としてのキャリア開発
		マザーマップを用いたFD企画 配布資料	PDF	
FDマザーマップ 対応型教材 Teaching Material	M-1	はじめての臨地実習指導とその支援 看護学教育の基礎	動画	教育5 臨地実習指導
		看護学教育の基礎 配布資料	PDF	
	M-2	はじめての臨地実習指導とその支援 臨地実習指導の基礎	動画	教育5 臨地実習指導
		臨地実習指導の基礎 配布資料	PDF	
	M-3	自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション	動画	教育5 臨地実習指導
		自施設の現状を踏まえた指導過程のリフレクション 配布資料	PDF	
	M-4	臨地実習場面の教材化	動画	教育5 臨地実習指導
	M-5	東洋医学とセルフケア	動画	基盤2-1 看護専門職としての健康管理
	M-6	先輩教員に学ぶ授業の秘訣(シリーズ)	PDF	対応項目は各コンテンツで異なる
	M-7	すっきり納得カリキュラム	PDF	教育2 教育者マインド 教育4 授業運営 運営1 組織と個人の理解
M-8	学校への対応に困る事例シリーズ—教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える—	PDF	対応項目は各コンテンツで異なる	
M-9	臨地実習における合理的配慮に関する組織的取り組みのためのFDコンテンツ開発	未定	基盤2 看護専門職としての基礎力 教育5 臨地実習指導 運営3 課題解決に向けた組織マネジメント	
M-10	10年先を見据えたグローバル人材育成 国際交流の推進 国際交流委員にあたってしまつたら!	未定	教育6 学生支援 研究5 国際化	

※コンテンツは準備の整ったものより順次 FD プランニング支援データベースに掲載する

(2) 開発した FD コンテンツ例

FD コンテンツ①

先輩教員に学ぶ授業の秘訣

鈴木友子¹⁾，吉本照子¹⁾，野地有子¹⁾，中島英博²⁾

看護実践研究指導センター¹⁾，名古屋大学高等教育研究センター²⁾

【開発の背景・目的】

看護系大学の急増にともない、看護系大学教員の需要が供給を上回る状況が近年続いている。それは同時に新任教員をはじめとする教育経験の少ない教員の雇用につながっており、彼らに対する FD は日本の看護学高等教育における課題となっている。本コンテンツは教育経験の少ない教員が、教育現場で直面する様々な問題をケースとして取り上げ、それらの問題を解決・検討するためのケースメソッドシリーズである。各ケース教材を手掛かりに、問題の本質は何か、どの様に解決するのかを追求し、教育経験の少ない教員が教育力を高めることを目的としている。

【開発プロセス】

教育経験の少ない教員と日々の業務で直面する問題や悩みを討議して抽出し、ケース教材のテーマを決定した。先輩教員の授業見学とインタビューをもとに、習得すべき教育スキルを抽出し、教育経験の少ない教員が自ら問題を解決する力を開発するように間を設定し、あわせて、各ケースに対する解答例を作成した。

【開発したコンテンツ】

各ケース教材は以下のツールにより構成した。

- ① ケース：日常の教育活動で直面する問題等
- ② ワークシート A：①の要因を分析するワークシート
- ③ 先輩教員からの学び：先輩教員の②に対する回答例
- ④ ワークシート B：①、②を踏まえ再度①の要因と解決方法を検討するワークシート

各ケース教材は、各大学が状況に応じて活用することを想定し、「実習における患者中心の思考を促す指導方法」、「教育内容の精選」等に関し作成した。各教員・各教育組織の主體的な FD とするために、

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| ・ファシリテーターによるオリエンテーション。グループ分け (3~4人) | 【10分】 |
| ・個人ワーク① | ワークシートAに記入 【10分】 |
| ・グループワーク① | ワークシートAをグループで共有、意見交換 【15分】 |
| ・個人ワーク② | 先輩教員例を提示。上記を踏まえワークシートB 【10分】 |
| ・グループワーク② | ワークシートBをグループで共有、意見交換 【10分】 |
| ・意見交換・総括 | グループ間の意見交換、ファシリテーター総括 【5分】 |

図2 グループワークの進め方 一例

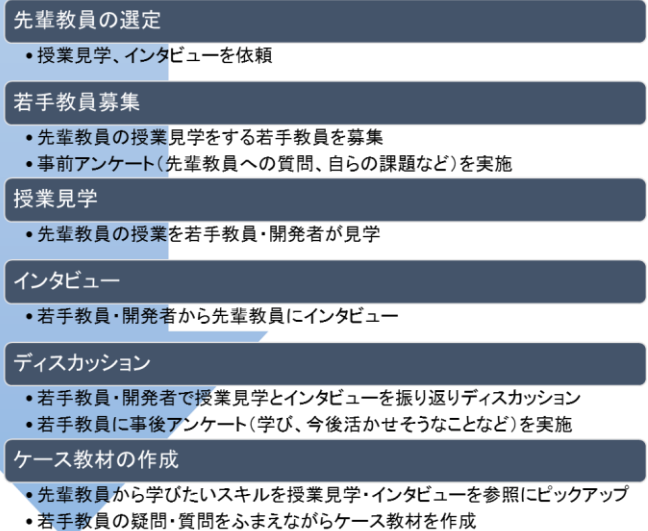


図1 開発プロセス

当事者中心のグループワークを推奨する。グループワークの進め方の一例を図2に示す。

FD コンテンツ②

すっきり納得カリキュラム

山本真実¹⁾、高島尚美²⁾、飯岡由紀子³⁾、和住淑子⁴⁾、黒田久美子⁴⁾
岐阜県立看護大学看護学部¹⁾、東京慈恵会医科大学医学部看護学科²⁾、
東京女子医科大学看護学部³⁾、千葉大学大学院看護学研究科⁴⁾

【開発の背景・目的】

大学のカリキュラムは、様々な科目が関連し合いながら展開されている。そのため、教員は、担当科目と他科目との関連、自大学のカリキュラム全体における担当科目の位置づけなどを意識する必要があり、それは自大学・学部学科の理念の理解にもつながる。しかし、日々の教育活動のなかで、常に科目同士の関連に関心を向けることは難しく、また各科目の目的の理解は、教員ごとに異なっているのではないかと感じる。

本 FD コンテンツは、科目同士の関連やカリキュラム全体における科目の位置づけを考え、話し合う機会を持つことで、担当科目への理解を深めることを目指し開発したものである。

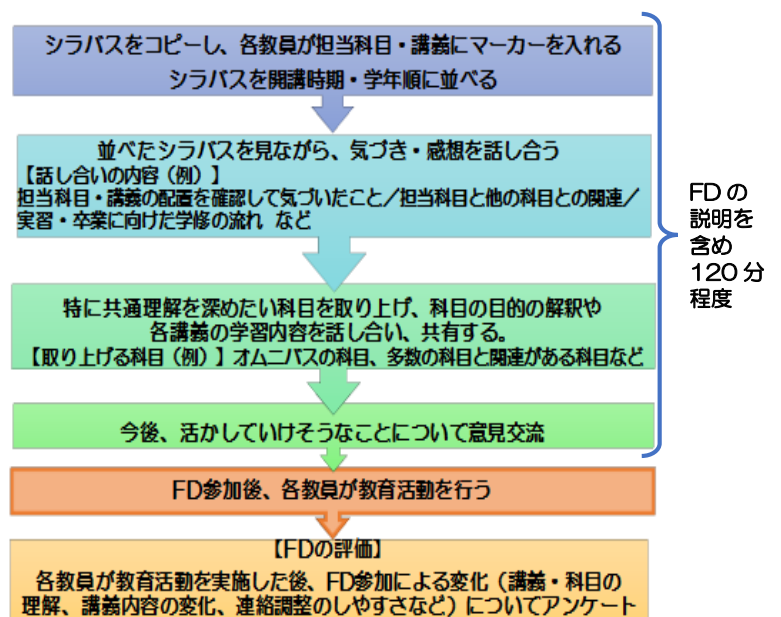
【開発方法】

本 FD コンテンツは、開発チームのメンバーである山本が、上席教員から受けた指導にヒントを得て開発した。上席教員と共に各科目のシラバスのコピーを開講時期に添って並べ、全体を俯瞰したところ、科目同士の関連、そして領域全体の科目に対する担当科目の位置づけがスッキリと理解できた。この経験を基に、本 FD コンテンツでは、グループワークにより、シラバスのコピーを配置し、ディスカッションを行うことで、各教員が、科目に対する自身の理解状況を確認し、担当科目を改善しようというモチベーションや希望を持ち、改善すべき課題を意識できるようプログラムを構成した。また、本 FD に参加し、教員がそれぞれ教育活動を行った後、アンケートにより各教員の変化を把握することで、教員自身の教育活動の振り返りと FD の評価を行えるようにした。

【コンテンツ内容】

本 FD コンテンツは、全教員が対象と成り得るものであり、グループ編成は、講座や領域、職位、就職時期、委員会など、大学の科目理解の状況によって様々になると考える。本 FD の進め方を図 1 に紹介する。

本 FD コンテンツに対応するマザーマップは、「教育 2・カリキュラム編成」「教育 4・授業運営」「運営 1-2・自大学・学部学科の理念の理解」である。本 FD が、大学・学部学科における学修の構成や教育のねらい、教育上の強みや特色についても考える機会となれば幸いである。



学生への対応に困る事例シリーズ
—教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える—

高島尚美、東京慈恵会医科大学医学部看護学科
飯岡由紀子、東京女子医科大学看護学部
山本真実、岐阜県立看護大学看護学部
和住淑子、千葉大学大学院看護学研究科
黒田久美子、千葉大学大学院看護学研究科

【開発の背景・目的】

教員として、日々の学生との関わりの中で、どのように対応したらよいか、困ることがある。どのように対応するかは、個人に任されているが、教員間で対応が食い違ったり、後から組織的な問題に発展したりすることもある。つまり、対応に困る状況に対する個々の教員の反応は、その教員個人のもつ教育観の現われであり、また、それだけではなく、組織のあり方にも影響を受けているといえる。

本FDコンテンツは、日々の学生との関わりの中で、教員が対応に困る典型的な場면을教材に、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えることを目的に開発したものである。

【開発方法／開発プロセス】

教員として対応に困る典型的な状況を場面として記述し、その事例を使いながら、教員として、組織として、どのような対応が考えられるか、その根拠は何か、等を教員間で自由に話し合えるFD企画として提示した。

【コンテンツ概要／コンテンツ内容／成果物】

開発した教材事例一覧

- A. 提出期限が過ぎたレポートを受け取ってしまい、どうすればいい？
- B. 教員の採点の適切性を判断することを根拠に答案の返却を求めてきた学生に対してどう対応する？
- C. 個別課題レポートなのに、複数の学生から同じ文章のレポートが提出された。これってどういうこと？
- D. 実習中の学生への個別指導は何時までOK？
- E. 再試になった学生から合格させてくれとクレームがあったときにどうする？
- F. 出席不足がありレポートも未提出なのに単位が欲しいと言っている学生と保護者への対応をどうする？
- G. アポイントをとらずに教員に相談に来る学生に対してどう対応する？
- H. 他の教員の研究指導のあり方へのクレームを話して来る学生に対してどう対応する？
- I. 教室のコンセントでスマートフォンの充電をする学生に対してどう対応する？
- J. 学生からの授業評価を気にしすぎる若手教員にどう対応するか？

FD コンテンツ③つづき

期限の切れたレポートを受け取りますか？

【コンテンツ内容】

①対象者

レポート課題を出すすべての教員

②FD 構成：5~6人で1Gになる、ワークシートを使用、ファシリテーターは組織の判断で

③スケジュール 1時間（図に提示）

④事例

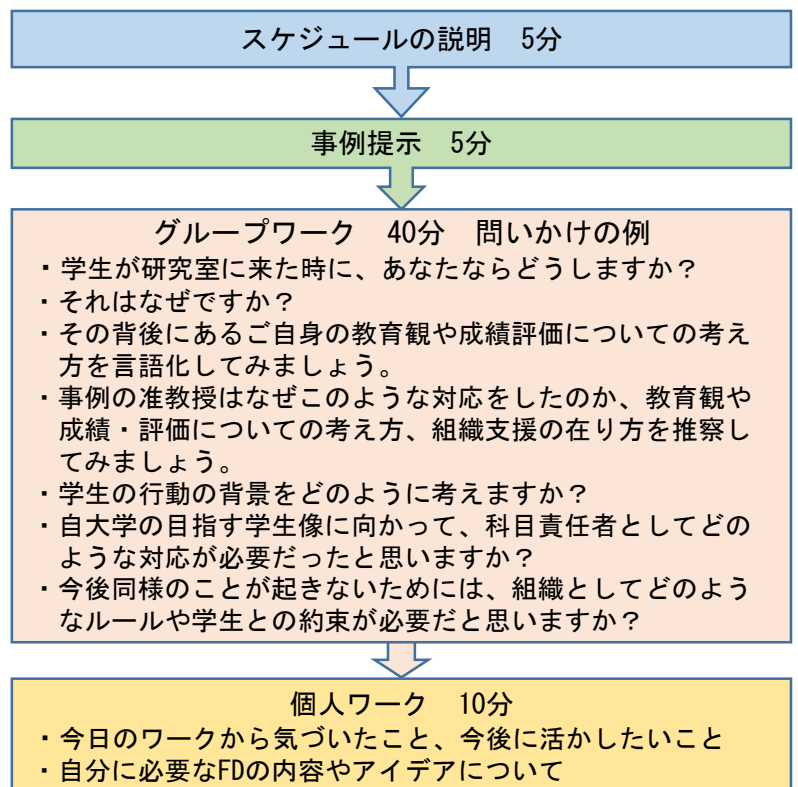
4年生の選択科目である〇〇看護論の科目責任者である准教授の私が、研究室で選択科目のレポートの提出時刻 8時50分にレポート提出ボックスから提出物を回収し、10時すぎに提出状況をチェックしていました。すると、4年生のA子が「あの一、先生（にっこりと満面の笑で）、〇〇のレポートなんですけど、ちょっと今朝、気持ちが悪くなって家を出られなくて、でも、レポート提出日だったので頑張って来たんですけど、結局時間に間に合わなくて、レポート提出ボックスもなかったの・・・」と提出時刻の2時間後に訪ねてきたのです。顔色は悪くなく、さほど具体が悪そうにはみえませんでした。「時間に遅れたということは、普通は提出がなかったとみなされるのですよ。」と言うと、「えーっ、書いていたのですよーちゃんと、それにこの単位を落としたり卒業できないじゃないですか！」とA子。「朝、何時に起きて、どのような具合だったのですか？」と問うと、「7時には起きたけどなんだか気分が悪くて、でも頑張って行かなくちゃと思って家を出たんですけど、電車の途中でまた気分が悪くなって一度降りてしまったんです。」とA子。私は「電話をすとかできなかつたんですか？期限を過ぎるということは提出がなかったとみなされることは知っているでしょう？」と言うと、「でも先生、そうは言っても大抵の先生はなんだかんだで受け取ってくれますよー、だからわざわざ電話までしなくても大丈夫だと思ったので・・・」

私は自分だけが厳しいと思われることが嫌だと思ったことと、選択科目で単位を出さないことで卒業ができないというのも却ってややこしいことになりそうだなと思いました。そこで「じゃあ、受け取るだけ受け取って内容をみて判断しますね。」とレポートを受け取りました。

結局、最低点での成績評価をしてしまい、本当によかったのか、もやもやしています。

⑤学べるポイント

- ・ 科目責任者としての成績評価の考え方
- ・ 成績評価の公平性
- ・ 教員の対応が学生の規範形成に与える影響
- ・ 教員同士の対応の意思統一



FD コンテンツ④

東洋医学とセルフケア

錢 淑君¹⁾, 山本利江²⁾, 松本 毅³⁾

看護実践研究指導センター¹⁾, 千葉大学看護学研究科文化理論看護学²⁾,

千葉大学医学部附属病院柏の葉鍼灸院³⁾

【開発の背景・目的】

看護系大学の急増にともない、看護学生の健康問題及び対応については学会でよく報告されているテーマであり、特に不定愁訴と生活習慣に関する研究が多くなされている。開発者らの看護学生を対象とした調査では、対象者の約7割がじんましん、鼻炎、頭痛、肩こり、不眠、低体温、生理痛、胃腸炎、腰痛などの症状に悩まされていた。看護学生は将来、看護職として、人々の個別性を大切にしながら生活支援をする重要な人材であるため、上記の症状を改善できるセルフケアの能力を身につけることが大事である。従って、指導者として看護教員自身が健康の法則を理解し、日常生活において活用できるセルフケアの実施方法を把握する必要がある。

そこで、東洋医学の治療法として鍼灸についてとりあげることにした。“個の医学”とも言われる東洋医学では、自然・環境の中で暮らす人間は自然の一部であり、体・心を一つのものとして捉え、その人の体質や生活習慣、体内バランスの乱れは病気の原因であると考えられているので、このような東洋医学の概念に基づく健康維持・促進法は症状を抑えるための薬物に頼る手法ではなく、生活過程を整え、本人の細胞のつくりかえる力(図1)が発揮できる看護ケアの概念には即していると考えられる。本コンテンツの開発に着手した。

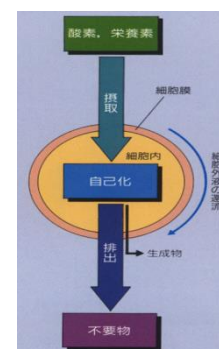


図1 薄井
「細胞のつくりかえモデル」, 1994

【開発方法／開発プロセス】

- 東洋医学のセルフケアの技法は多種類存在しているので、IPW を活用し、専門職の鍼灸医を開発グループのメンバーとして参加するように働きかけ、日常生活の中に取り入れやすいものを選定する。
- どのような形式でコンテンツを表現するかを目的・対象・実行の方法及び可能性などの要素を開発グループで議論し、どこでもいつでも利用できる画像の e-learning の教材として開発することになった。
- 上記の内容を業者と打ち合わせ、画像を撮影する日時・場所・進行方法を決め、コンテンツを作成する。
- 撮影したコンテンツについて、見やすさ、音声の効果、などについて確認し、修正する。
- 撮影した内容に関わる著作権を確認した上、ウェブ上に掲載する。

【コンテンツ内容】

約1時間の画像のコンテンツの構成には東洋医学に基づく現代養生の概念、ツボ、灸の紹介、自分の健康状態を知るためにどのように「手のつくり」、肩こり、腰痛の即効性のつぼ刺激などが含まれ、即ち東洋医学の視点→必要な基礎知識→基本の手法→実施という流れで展開している。

このコンテンツは鍼灸のごく基本的な概念のみを紹介しています。皆様のさらなる健康維持・促進のFDの企画にとって役立てることを願っております。

参考文献：薄井坦子.(1994). ナースが視る病気, p22. 講談社.

初めての臨地実習指導とその支援

和住淑子、千葉大学大学院看護学研究科
黒田久美子、千葉大学大学院看護学研究科
高島尚美、東京慈恵会医科大学医学部看護学科
飯岡由紀子、東京女子医科大学看護学部
山本真実、岐阜県立看護大学看護学部

【開発の背景・目的】

臨地実習は、看護実践能力を育成する上で中核的な授業形態であるが、実習環境、体制整備、学生の実習経験と看護概念を関連づける学習支援など、臨地での柔軟な支援方法の工夫が求められ、特に、経験の浅い若手教員には修得が難しいとされている。

本FDコンテンツは、特に、初めて臨地実習指導を経験する若手教員と、若手教員を支援する立場にある中堅教員向けに、初めての臨地実習指導に必要な基本的事項を、臨地実習で教員が遭遇する事態に即して、ビデオ教材としてまとめたものである。

【開発方法／開発プロセス】

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター主催の平成27年度看護学教育指導者研修（ベーシックコース）において行われた講義を収録した。

【コンテンツ概要／コンテンツ内容／成果物】

- 看護学教育の基礎（講師：和住淑子）
- 臨地実習指導の基礎（講師：黒田久美子）

本事業のホームページ <http://fd.np-portal.com/>にて、公開

FD コンテンツ⑥

臨地実習における合理的配慮に関する組織的取り組みのためのFDコンテンツ開発

飯岡由紀子(東京女子医科大学)、遠藤和子(山形県立保健医療大学)、小川純子(淑徳大学)、
中島英博(名古屋大学)、松岡千代(佛教大学)、吉本照子(千葉大学)

I 開発の必要性・目的

教育機関は多様な対象者への就学機会の保証が期待されてきた。2016年4月、障害者差別解消法及び改正障害者雇用促進法の施行により、看護系大学も障がいをもつ学生の看護学の就学機会を保証する必要がある、「合理的配慮」のための各教員および教育組織の教育力を高める必要がある。

看護学教育における臨地実習は、実習施設の患者・実践者、他の学生等の安全、教育の質の確保等の条件下で当該学生の就学機会の保証のための合理的配慮を行う。その中で、両立の困難な条件や合理的調整が困難な価値が多く、看護学教育固有の問題といえる。そこで、全看護系大学が活用できるように、FD マザーマップに対応した基本プログラムを開発し検証することを目的とした。

II 開発過程

開発組織は看護学・教育学の研究教育者で構成した。各メンバーが教育・研究・社会活動をもとに、臨地実習における困難感とその状況を収集し、統合した。困難感の要因を分析し、問題を構造化した。ついで看護学、教育学、社会学等の学際的な先行研究・実践例をもとに、障がいをもつ学生に保証すべき卒業時の到達目標、学習支援内容(受容・受療支援、学習支援、キャリア形成支援)を検討した。こうした検討過程を各大学が系統的・計画的に実施することが、効果的・効率的な「合理的配慮」に関する組織的取り組みになりうると考えた。そこで、当該学生の到達目標の達成および必要な学習支援を行うための、FD マザーマップのレベルIからIIIのコンテンツを考案し、レベルIのコンテンツを2大学で試行し検証した(3月)。

III 成果

ケース、ケースにおいて検討すべき問いおよび回答例で構成し、「他者の意見を否定しない」等のグラウンドルールを含めて、研修の設計方法を示した。以下に各レベルのコンテンツの狙いと概要を示す。

● レベルI 多様な障害に関する全教員の理解の促進

担当教員個人が対応し困難感を認識している現状に対し、組織的に取り組み、解決するために、全教員の共通基盤を整える。まず全教員を対象に支援対象学生の理解を促す。専門家の講演、DVD等の既存教材の活用と統合により、視覚・聴覚障害、発達障害、精神障害等の特徴とアセスメント方法を学習する。臨地実習における教育目標の態度、知識、技術習得に各々どのような問題があるか、家族・学生にキャリア形成に関する可能性と制約条件を示しながら、情報提供することの必要性を理解する。

● レベルII ケースメソッドを適用した個別事例への教育実践力強化

レベルIで習得した対処の考え方を活用し、各教員の臨地実習において必要な合理的配慮を系統的に原則に沿って導けるように、ケース(聴覚障害)をもとに、問いとして、予測しうる多様な教育問題、対処方法、対処のために活用する地域の資源を立て、グループワークを行う。

● レベルIII 合理的配慮の組織的取り組みの立案

自大学の臨地実習における合理的配慮の現状を全教員、実習施設、学生当事者の立場から明らかにし、課題を抽出し、課題解決のためのしくみづくりを計画し実施するためのグループワークを行う。ケースに対する問いとして、合理的配慮の考え方、客観性を保持し多面的な判断を保証するための方針、各教員に対する支援体制と各職位の教員の支援者役割を立て、明文化する。



10年先を見据えたグローバル人材育成と国際交流の推進 - MOUの評価を通して

MOUとは・・・Memorandum of Understanding (大学間・学部間交流協定) のこと

～国際交流委員にあたってしまったら！～

野地有子¹⁾, 近藤麻理²⁾, 小寺さやか³⁾, 飯岡由紀子⁴⁾, 溝部昌子⁵⁾, 炭谷大輔¹⁾

- 1)千葉大学大学院看護学研究科 2)東邦大学看護学部 3)神戸大学大学院保健学研究科
4)東京女子医科大学看護学部 5)神奈川歯科大学短期大学部看護学科



開発の背景・目的

看護学教育FDマザーマップ“教育マップ”6. 学生支援の要素の中の「国際交流の推進」に関するFDコンテンツを開発することを目的とした。多くの大学でグローバル教育の意欲は高く、マップのチェックリスト①～④を推進するのは国際交流委員会が鍵となると考え、テーマを「国際交流委員にあたってしまったら！」とした。

開発プロセス

コンテンツ開発は3段階で行った。1段階は「こういう学生を育てたい」から教育プログラムの検討、2段階は「そのための教職員能力開発」からFD/SDプログラムの検討であった。以上より3段階では、国際交流委員としての課題と必要な情報や資料の集約を行い見える化を図り、必要な教職員が自由に使える冊子として作成する。また看護系大学にMOU（交流協定書）に関する調査を実施しており、現状分析のうえ開発を継続する。

開発したコンテンツと評価

報告会において開発したコンテンツの提示を行いアンケートにて評価したところ40名から回答があり、8割に国際交流委員になることへの捉え方に前向きな変化がみられた。

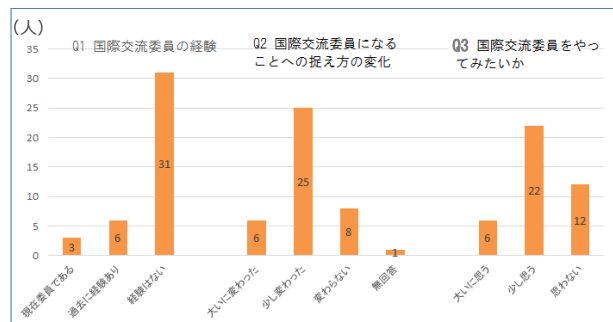


図1 コンテンツ提示後のアンケート評価

FD マザーマップ check sheet

川島啓二（九州大学基幹教育院），鈴木友子（看護実践研究指導センター）

【開発の背景・目的】

本プロジェクトにより開発した「看護学教育におけるFD マザーマップ」を、実際に看護学教育の現場でどのように活用できるのか？その一例を示すべく開発した。FD マザーマップに示された内容を、どれだけ自身（または大学）が行っているのか、その全体像を図に示し確認することで、看護系教員（大学）としての自己「診断」に活用する。

【開発方法】

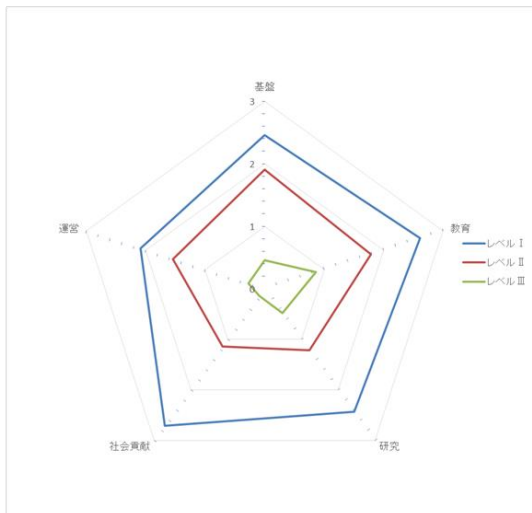
本プロジェクトにより開発した「FD マザーマップ ver.2」をもとに開発した。FD マザーマップの各項目に、4段階を選ぶためのボタン「できない」、「何とかできる」、「普通にできる」、「優れてできる」を埋め込み、看護系大学教員に求められる諸能力について、それを身につけているかどうか、その能力ごとに評価できるようにする。本シートは誰でも手軽に活用できるようにエクセルで作成した。

【コンテンツ内容】

FD マザーマップ check sheet の各シートへの回答結果は、「できない」0点、「何とかできる」1点、「普通にできる」2点、「優れてできる」3点として、レベルごとに平均点が表に算出・表示される。

	基盤	教育	研究	社会貢献	運営
レベル I	2.45455	2.61538	2.43478	2.71429	2.09091
レベル II	1.90909	1.78571	1.21739	1.14286	1.54545
レベル III	0.45455	0.85714	0.47826	0.14286	0.27273

また、平均点はレーダーチャートに自動的に描画される。



活用例として、大学組織においては、自大学の教員特性の把握や自大学のFD ニーズの分析などに活用できる。また教員個人では、看護系大学教員としての総合能力の診断や、自身の強み・弱みを明らかにした上でキャリア開発計画を立てる等、それぞれの立場や状況に応じて活用することができる。

3) FD マザーマップ コンテンツ開発・実践の往還と発展

図1は、FD マザーマップ開発当初に想定していた開発のプロセスである。しかし、開発がすすむうち、看護系大学教員の実践と、FD マザーマップの活用、コンテンツ開発には往還と発展があることが明らかになっていった。(図2-1)

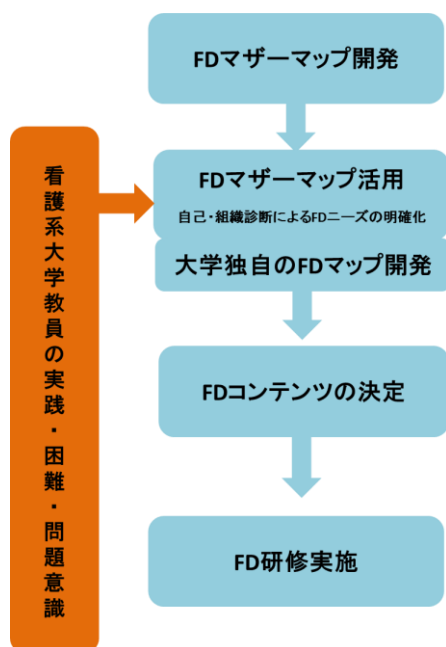


図1 FD マザーマップ開発当初の FD 研修実施までのプロセス

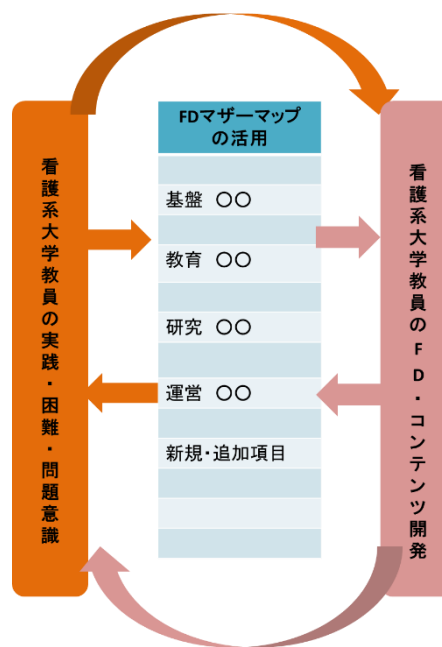


図2-1 FD マザーマップ活用・コンテンツ開発・実践の往還と発展

ワークショップに参加した多くの看護系大学教員は、FD マザーマップを使った自己・組織診断を通して、自大学の教員の能力向上への問題意識が一側面ではないことに気づき、さらに視野広く教員の能力を考えるように変化していた。開発者らも、FD マザーマップの検討の過程が看護系大学の教員の能力と必要なFDを考える貴重な時間となり、FD に対する問題意識が明確になっていった。これらは、FD マザーマップの活用を通して、看護系大学教員の実践・困難・問題意識に新たな発展をもたらしていると考えられた。

一方、FD コンテンツ開発の過程で、あらためてFD マザーマップがあることの意義、想定していなかった看護系大学教員の実践と、FD マザーマップの活用、コンテンツ開発間の往還と発展が確信できた。

例えば、学生への対応に困る若手教員へのFD コンテンツ開発では、なぜ困るのかを考えると、組織的な体制不足、教育理念に関わる課題であることがわかり、単なる学生への教育的対応の問題ではなく、教育、運営、基盤にかかわるFDとして検討することになった。これは、現状から必要なFD コンテンツを開発する過程で、あらためて必要な能力を考えることができ、FD マザーマップを活用して、必要な能力を整理することが可能となることを示していた。

以上のように、看護系大学教員の「実践・問題意識」、「FD マザーマップ活用」、「FD コンテンツ開発」は、往還しながら、発展を促す関係であると示された。(図2-2)。

このことは、FD マザーマップを一方的に提供して必要な大学で活用してもらうというよりも、各大学が、「実践・問題意識」、「FD マザーマップ活用」、「FD コンテンツ開発」のどこかに参画してもらいながら、当センターも FD マザーマップを発展させていく関係性で共同研究できることがより適切であることが明確になった。



図 2-2 FD マザーマップ活用・コンテンツ開発・実践の往還と発展

5. FD コンサルテーション事業

1) コンサルテーション実績

平成 23 年度に本事業「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」が発足して以降、本センターは、プロジェクトの一環として、要請のあった看護系大学に対し、個別に FD に関するコンサルテーションを行ってきた。その数は延べ 20 大学に上る。(20 大学に対する FD 支援の実績は、64～65 頁に一覧として示した。)

この 20 大学を設置年度別、設置主体別に整理してみると、以下の表ようになる。

設置年度	設置主体		
	私立	公立	国立
平成18年度～平成27年度	10	—	—
平成8年度～平成17年度	4	3	1
平成7年度以前	—	2	—

この表にみるように、当センターに FD に関するコンサルテーションを要請した大学は、圧倒的に設置から 10 年未満の私立大学が多い。このような新設大学は、さまざまな経歴、背景をもつ教員が集まっており、教育理念を共有し、組織的な教育活動を展開することに困難を抱えている、という共通の課題を有していた。そこで、要請に応じる際には、数多くの教員が一堂に会し内容を共有できる講演会形式の支援を行った。講演では、まず、看護系大学急増の背景や FD の必要性について概略を伝えた後、自大学の教員組織の能力開発ニーズを把握できる、という点で、FD マザーマップが活用できることを伝え、その後、質疑応答や FD 委員会への個別のコンサルテーションを行う、という形式をとった。講演の際に使用したスライド資料を 66～71 頁に示す。

また、設置から 10 年以上を経過している看護系大学からは、職位別 FD グループワークのファシリテーションや、FD 委員会への FD 企画のコンサルテーションなどの要請もあり、教員組織の活性化や、組織分析を踏まえた体系的な FD 実施のニーズが高いことが伺われた。また、自大学独自の FD マップ作製をしたい、という要請もあった。

さらに、59 頁で紹介した FD マザーマップ check sheet を活用して、教員が自身の教育能力を自己評価したデータを収集した大学からは、その結果をどのように読み取り、FD につなげればよいか、についての助言を求められた。そこで、FD マザーマップ check sheet を活用した、教員の自己評価データの読み取りについてのコンサルテーションを実施した。このコンサルテーションは、組織分析を踏まえた体系的な FD の実施、という観点から、支援効果が高い、と思われたため、コンサルテーションを受けた大学の許諾を得て、当センターが主催した、「平成 27 年度看護学教育ワークショップ」において、参加者に報告した。その時に使用したスライド資料を 72～74 頁に示す。

以上のように、センターが各看護系大学に FD 支援を行う際は、単なる 1 回限りの講師派遣にとどまらず、各大学が主体的、組織的に課題解決ができるよう支援を行う、という点が重要であり、その趣旨をより明確にするため、平成 27 年 12 月 3 日「FD コンサルテーション事業の特徴と手続き」を次のように定めた。本プロジェクトは平成 27 年度をもって終了するが、FD コンサルテーション事業は今後も継続して実施していく。

FD コンサルテーション事業の特徴と手続き

1. 組織的な依頼であること

学科長など所属組織の責任者の承諾を得た上で、組織としてご依頼ください。

2. 依頼大学での連絡窓口を決めること

本センターとの連絡調整を担当する窓口となる担当者をお決めください。委員会活動等により担当者が変わる際は、本センターおよび所属組織の責任者にご一報ください。

3. 活動に関する経費は依頼大学が負担すること

コンサルテーション費用は無償ですが、講師派遣費、資料印刷費等の諸経費が必要となる場合は、依頼大学側でご負担ください。

4. 看護系大学の FD に関する課題のみを取り扱うこと

コンサルテーションで取り扱う課題は看護系大学の FD に関するものであり、総合大学の全学 FD 等への対応はいたしません。

5. 課題解決の主体は依頼大学であること

コンサルテーションは依頼大学が自ら課題解決をしていくためのサポートをするものであり、本センターが解決策を提示するものではありません。

6. コンサルテーションの実績はセンターの事業として公表すること

コンサルテーションに関する実績は本センターで運営する FD プランニング支援データベース^{※1}や報告書等に掲載し、公表させていただくものとします。情報の取り扱いに関しては、「センター事業に係る情報の取り扱いに関する指針^{※2}」をご参照ください。

※1FD プランニング支援データベース : <http://fd.np-portal.com/>

※2センター事業に係る情報の取り扱いに関する指針 : <http://www.n.chiba-u.jp/center/outline/security.html>

なお、FD マザーマップの使い方等、個人でのご質問・ご相談にはメールで対応させていただいておりますので、お気軽にお問い合わせください。


<http://www.n.chiba-u.jp/center/use/consultation.html>


看護系大学に対するFD支援（講師等派遣）実績

年度	番号	実施年月日	大学名	研修会名等	派遣教員	内容・成果
平成23年度	1	平成24年1月6日	(私)聖尚医療科大学看護学部看護学科 (平成12年度開設、入定120)	平成23年度第2回FDセミナー 「看護学教育の質を高めよう！体系的なFD体制の構築に向けた 「看護学教育の質を高めよう！体系的なFD体制の構築に向けた」	和住淑子	聖尚医療科大学看護学部より講師派遣要請を受け、「看護学教育の質を高めよう！体系的なFD体制の構築に向けた」と題し講演を行った。当日はFDについて、看護学教育の質を高めるための体系的なFD体制の構築に向けた取り組みについて話をし、FDマザーマップ開発の取り組みについても話し、教員とのコミュニケーションを促進した。得られた意見はFDマザーマップ開発に活かした。
	2	平成24年2月6日	(公)横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻 (平成17年度開設、入定100)	看護学専攻主催FDワークショップ 「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と今後の方向性について」	和住淑子	横浜市立大学大学院医学研究科看護学専攻より、講師派遣要請を受け、講演及び職位別グループワークのファシリテーションを行った。約30名の看護学専攻教員が参加し、「看護学教育におけるFDマザーマップの開発と今後の方向性について」の講演の後、FDニーズに関する職位別グループワークを行った。
	3	平成24年10月1日	(獨)聖山大学医学部保健学科 (平成18年度大学統合により設置、入定80)	FD講演会「看護系大学の置くべき未来を担うFDのありかた」	和住淑子	聖山大学医学部保健学科より、講師派遣要請を受け、講演及び職位別グループワークのファシリテーションを行った。講演には、二階堂副学部長、永山看護学部長をはじめ約35名の看護学専攻教員が参加し、「看護系大学の置くべき未来を担うFDのありかた」FDマザーマップの開発を通して、「看護学教育の質を高めよう！体系的なFD体制の構築に向けた」の講演の後、大卒者に対するFDに関する職位別グループワークを行った。講演では、当センターが開発中の「看護学教育の質を高めよう！体系的なFD体制の構築に向けた」FDマザーマップ(案)の基本構造及び内容を紹介し、教員の質問に対し丁寧な回答ができた。得られた意見はFDマザーマップ開発に活かした。
	4	平成25年3月16日	(公)岡山県立大学保健福祉学部看護学科 (平成5年度開設、入定40)	第5回FD・教員力向上支援事業3回 研修会 「看護FDマザーマップの開発と活用への期待」	北浦正	研修には19名の教員が参加し、「FDマザーマップの開発と活用への期待」の講演の後、マザーマップの内容に焦点をあてて、自大学のFDマザーマップ作成に向けて検討を行った。
平成24年度	5	平成25年6月20日	(私)札幌保健医療大学看護学部看護学科 (平成25年度開設、入定100)	看護学第3回FD研修会 「FDマザーマップの活用方法について」	野地有子 鈴木友子	札幌保健医療大学から依頼を受け、「看護学教育におけるFDマザーマップ活用Ver.1(試行版)」の内容および活用方法の紹介を行った。研修会には学生の指導員江藤祐、FD委員長の高橋教子教授をはじめ約50名以上の看護学教員が参加され、FDマザーマップについて、また、看護系大学としての課題や看護学教員としての課題について意見交換を行った。
	6	平成25年10月2日	(公)新潟県立看護大学看護学部看護学科 (平成14年度開設、入定93)	平成25年度FD委員会主催研修会 「FDマザーマップの開発とその活用」	北浦正	研修には教員21名、事務職員7名の合計28名が参加し、「FDマザーマップの開発とその活用」の講演の後、意見交換を行った。また、今後モデル校として参加することについても検討していただき意見を交換を行った。
	7	平成25年10月6日	(私)佛教大学保健医療福祉学部看護学科 (平成24年度開設、入定65)	佛教大学保健医療福祉学部看護学科主催FD 「看護学教育におけるFDマザーマップ」	黒田久美子	佛教大学から講師依頼を受け、本学が開発中のFDマザーマップ開発の背景、経緯を話し、「看護学教育におけるFDマザーマップ活用Ver.1(試行版)」の内容を紹介した後、質疑応答、意見交換を行った。当日は、日隈ふみ子看護学部長、窓口となった松岡千代教授をはじめ、約30名の教員が参加し、活発な意見交換ができ、当センターにとっても関係が得られた。
平成25年度	8	平成25年10月17日	(私)広島文化学園大学看護学部看護学科 (平成11年度開設、入定120)	教員研修会「看護学教育におけるFDマザーマップ」	和住淑子	広島文化学園大学看護学部より講師派遣要請を受け、当センターが開発中のFDマザーマップ開発の背景、経緯を話し、「看護学教育におけるFDマザーマップ活用Ver.1(試行版)」の内容を紹介した後、質疑応答、意見交換を行った。当日は、佐々木秀美副学長、島内副学部長、山内京子看護学部長、窓口となった通達課長准教授をはじめ、約40名の教員、大学院生が参加し、活発な意見交換ができ、当センターにとっても関係が得られた。研修会後のアンケートでは、「FDを展開する際の指針として活用できる」「自分の立場、目標、働きが明確になる」「学生支援として重要」「自身のキャリア開発に活かすことができる。」等の感想があった。
	9	平成25年3月7日	(公)岡山県立大学保健福祉学部看護学科 (平成33年度開設、入定40)	岡山県立大学版FDマップ作成へのコンサルテーション	黒田久美子 若杉步	岡山県立大学では、平成25年度の講演後、FDの第一歩として、東証を目指す若手教員の教育への向上を目指し大学のFDマップの作成に向けた「意見者問合し」を行い、意見交換を行った。当日は、佐々木秀美副学長、島内副学部長、山内京子看護学部長、窓口となった通達課長准教授をはじめ、約40名の教員、大学院生が参加し、活発な意見交換が行われた。研修会後のアンケートでは、「FDを展開する際の指針として活用できる」「自分の立場、目標、働きが明確になる」「学生支援として重要」「自身のキャリア開発に活かすことができる。」等の感想があった。
10	平成25年3月20日	(私)産業医科大学産業保健学部看護学科 (平成3年度開設、入定70)	看護学コロウム 特別企画セミナー 「看護系大学へのFD活動の現状と課題、FDマザーマップの開発と大学間共同活動推進の取り組み」	和住淑子	産業医科大学から講師依頼を受け、「看護系大学のFD活動の現状と課題」について話し合った後に、当センターが開発した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の内容を紹介し、活用方法について話し、また、セミナー終了後、看護学コロウムメンバーの教員と、「看護系大学におけるFDマザーマップ」の活用について意見交換を行った。当日は、福村一孝副学部長、窓口となった立野達子教授をはじめ、23名の教員が参加し、活発な意見交換が行われた。当日は、福村一孝副学部長、窓口となった立野達子教授をはじめ、23名の教員が参加し、活発な意見交換が行われた。研修会後のアンケートでは、「FDを展開する際の指針として活用できる」「自身の課題を明確にする」「ニーズの分析や本学教員の傾向を知ることができる」「FD定数の方向性が明確になる」「新入教員にとっては学ぶべき方向性が明確になる」等の感想があった。	

11	平成26年度9月3日	(私) 藤ノ宮医療大学保健医療学部看護学科 (平成23年度開設、入定80)	平成26年度 SFD 研修会 「看護学教育におけるFDマザーマップの活用」	北地正	研修には3名の教員が参加し、「看護学教育におけるFDマザーマップの活用」の講演の後、参加者がマザーマップを参考に自己診断を行い、今後のFD活動の方向性について検討を行った。
12	平成27年3月5日	(私) 青森中央学院大学看護学部看護学科 (平成26年度開設、入定80)	視察訪問	野地有子 糸沼智子 鈴木友子	青森中央学院大学看護学部より当センターのFD活動について視察依頼があり、牧原由佳先生、中川孝子先生が来学された。当日は本センターの野地有子教授、糸沼智子講師、鈴木友子特任助教とFDマザーマップについて意見交換を行った。FDマザーマップの実践的活用方法や、自大学で取り組んでいるFD企画について、新任教員や臨床経験の浅い教員らとFD活用について専ら、活発な意見交換を行うことができ、当センターにとってもFDマザーマップに関する今後の活動の考えを踏まえた上で、今後のFDについて専ら、活発な意見交換を行うことになった。
13	平成27年3月6日	(私) 上野大学総合人間科学部看護学科 (平成23年度開設、入定70)	FD講演会「FDマザーマップと教員の能力開発」	野地有子	若手の助教を中心に各領域から教員を各20名の教員が参加した。実習中の領域の教員には事後広電された。「看護学教育におけるFDマザーマップ活用ガイドVer.1」が各人に配布され、内容と活用方法について開発の理念を踏まえ紹介し、質疑応答も随分と多かった。当日は本センターから、演習と実習に関する質問が多くみられ、これまでのセンターにおける研修等から書籍された至理の事例等から参加者による課題解決にむけ自律的な取り組みが導きだされた。
14	平成27年3月19日	(公) 名桜大学人間健康学部看護学科 (平成19年度開設、入定80)	「FDマザーマップ」に関する講演会	和住潔子	「FDマザーマップ」に関する講演会が有り、当センターが開発した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の背景や内容を紹介し、活用方法について話し、また、名桜大学人間健康学部看護学科では、「FDマザーマップ」に示された各能力の到達状況について、事前に各教員がチェックリストを併せて自己評価していたので、チェックリストの使い勝手や、自己評価結果からFDニーズをどのように分けるか、について、意見交換を行った。チェックリストを併せて教員からは、「年度ごとにチェック表として自己の成長を確認したい」「今後のようなことを強めていければよいのかを知らないと分からない」といった声もあつた。
15	平成27年5月7日	(私) 亀田医療大学看護学部看護学科 (平成24年度開設、入定80)	「FD」に関する講演会・FDとは何か	和住潔子	当日は、亀田省吾学長、専攻長、専攻副学長、窓口となった小幡光子教授をはじめ、多くの教員が参加し、活発な意見交換ができ、当センターにとっても今後のFDマザーマップの活用支援に向けた活動への示唆が得られた。
16	平成27年5月27日	(私) 福岡大学医学部看護学科 (平成19年度開設、入定100)	FD事業計画研修会 「教育力の継続的質向上を目的としたFDについて」	和住潔子	福岡大学医学部看護学科は、これまでも当センターが開発したFDマザーマップに関するワークショップに教員を派遣し、FDマザーマップを活用した継続分析の方法に關し、講師派遣要請があつた。当日は、「教育力の継続的質向上を目的としたFDについて」をテーマとして、当センターが実施した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の背景や内容を紹介し、活用方法について話し、事前に各教員がチェックリストを併せて自己評価していたので、「継続分析」について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、主任、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。
17	平成27年7月9日	(私) 石川県立看護大学看護学部看護学科 (平成12年度開設、入定80)	「看護大学のFDを考える座談会」	和住潔子	石川県立看護大学FD委員会では、どのように教員のFDニーズを捉え、体系的なFDを企画するかを議題としており、FD委員会からの要請を受けて、FD委員会メンバーに対し、コンサルテーションを行った。当日は、若手教員も参加し、「看護大学のFDを考える座談会」を行い、当センターが開発した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の背景や内容を紹介し、FDマザーマップを活用したFDニーズの把握方法、継続分析方法、体系的なFDの企画等について懇談した。
18	平成27年12月24日	(私) 四日市看護医療大学看護学部看護学科 (平成19年度開設、入定100)	FD研修会「FDマザーマップについて」	和住潔子	四日市看護医療大学看護学部は、開学9年目を迎えた大学であり、現場での経験はあるものの大学の教員としての経験の浅い教員も多いため、教員への教育力の向上を促すべく、FDマザーマップを活用したFD研修会を開催することになり、FDマザーマップについて話し、事前に各教員がチェックリストを併せて自己評価していたので、「継続分析」について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、主任、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。
19	平成26年1月29日	(私) 慶應義塾大学看護医療学部看護学科 (平成13年度開設、入定100)	FD研修会 「看護医療学部教員の能力向上のための継続的なFD活動のあり方」	和住潔子	慶應義塾大学看護医療学部では、教員の能力向上のため、FDをどのように継続して行っていくべきかを考えた。このことで、講師派遣要請があつた。当日は、「看護医療学部教員の能力向上のための継続的なFD活動のあり方」をテーマとして、FD委員会が開発した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の背景や内容を紹介し、その活用方法について話し、事前に各教員がチェックリストを併せて自己評価していたので、「継続分析」について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、主任、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。
20	平成26年3月7日	(私) 崇徳大学健康科学部看護学科 (平成25年度開設、入定80)	FD研修会	和住潔子	常葉大学健康科学部FD部会より「教員としての基礎力」をテーマに教員の研修を要請したい、とのことで、講師派遣要請があつた。当日は、理学療法士と合同で「教員としての基礎力」をテーマとしたFD研修会を開催され、和住は、「看護系の教員としての基礎力」をテーマとして、当センターが開発した「看護系大学におけるFDマザーマップ」の背景や内容を紹介し、その活用方法について話し、事前に各教員がチェックリストを併せて自己評価していたので、「継続分析」について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、主任、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。当日は、宮林部子学長、研究員等と自己評価結果を用いた継続分析のFDニーズをどのように分析するか、について、意見交換を行った。

**看護学教育におけるFDマザーマップの開発と
大学間共同活用の促進**




 看護学教育研究共同利用拠点
 千葉大学大学院看護学研究科附属
看護実践研究指導センター
Center for Education and Research in Nursing Practice, Graduate School of Nursing, Chiba University

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

看護系大学のFD活動の現状と課題

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

我が国の高等教育の将来像(平成17年1月28日)

<中央教育審議会答申 ポイント>

I: 高等教育の量的変化の動向
II: 高等教育の多様な機能と個性・特色の明確化
III: 高等教育の質の保証

- ・ 高等教育の量的側面での需要の充足、大学設置に関する抑制方針の撤廃や準則主義化等による大学等の新設や量的拡大、高等教育の多様化の一層の進展につれて、**学習者の保護や国際的通用性の保持のため、高等教育の質の保証が重要な課題。**
- ・ 国による質の保証の仕組みと各機関の自主的努力が相まって信頼確保。
- ・ 事前・事後の評価の適切な役割分担と協調の確保による質の保証。**(設置認可の的確な運用、認証機関による第三者評価システム及び自己点検・評価の充実)**
- ・ 評価結果等に関する情報の積極的な開示と活用。

IV: 高等教育機関の在り方
V: 高等教育の発展を目指した社会の役割

我が国の高等教育の将来像(中央教育審議会答申 平成17年1月28日)

第2章 新時代における高等教育の全体像
4 高等教育の質の保証

(抜粋)

高等教育の質の保証を考える上では、教員個々人の教育・研究能力の向上や事務職員・技術職員等を含めた管理運営や教育・研究支援の充実を図ることも極めて重要である。評価と**ファカルティ・ディベロップメント(FD)**や**スタッフ・ディベロップメント(SD)**等の自主的な取組との連携方策等も今後の重要な課題である。

我が国の高等教育の将来像(中央教育審議会答申 平成17年1月28日)

用語解説

ファカルティ・ディベロップメント

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。

新時代の大学院教育

—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—(平成17年9月5日)

<中央教育審議会答申>

第2章 新時代の大学院教育の展開方策

〈体系的な教育課程の編成と教育内容・方法の改善のための組織的活動の実施〉

各大学院における教育課程の編成、実践等に当たっては、**関係する教員が課程の目的、教育課程等について共通理解を深めるとともに、教員の教育・研究指導能力の一層の向上を図る取組**があいまって初めて効果的に機能するものである。このような教育の課程の組織的展開の重要性にかんがみ、それぞれの大学院教育の現場における教育研究の特色、創造性等が阻害されることのないよう留意しつつ、**各大学院における課程の目的、教育内容・方法についての組織的な研究・研修(ファカルティ・ディベロップメント(FD))を実施することが必要**である。これを踏まえ、各大学において授業及び研究指導の内容等の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする旨の**規定を大学院設置基準に置くことが適当**である。

大学院設置基準

改正

平成18年3月31日公布
平成19年4月1日施行

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)
第14条の3 大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

大学設置基準

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)
第25条の2 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究の実施に努めなければならない。

改正

平成19年7月31日公布
平成20年4月1日施行

(教育内容等の改善のための組織的な研修等)
第25条の3 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。

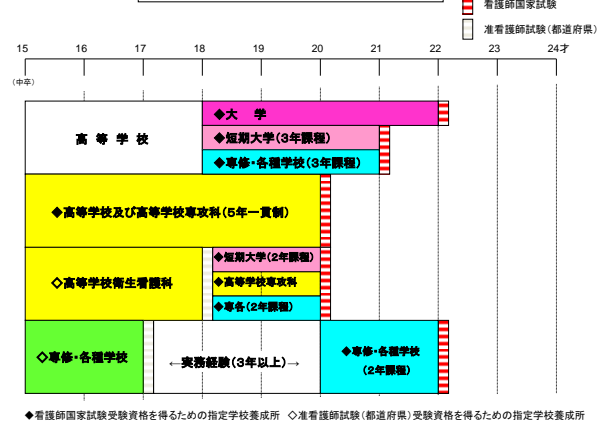
留意事項

大学設置基準第25条の3の規定によるいわゆるファカルティ・ディベロップメント(FD)については、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものであること。これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取組を行うことが望まれること。

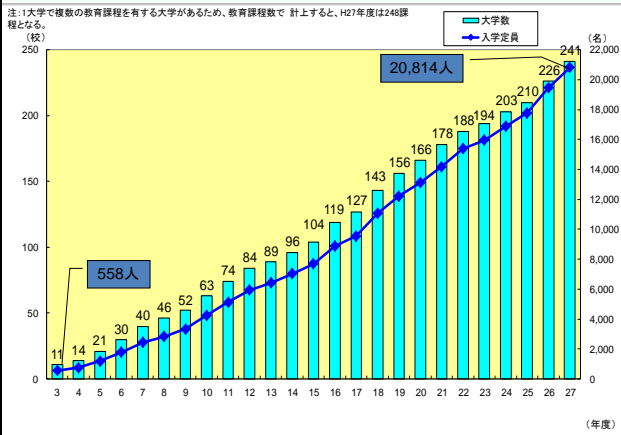
『学士課程教育の構築に向けて』によるFDの用語解説(2008)

教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。なお、大学設置基準等においては、こうした意味でのFDの実施を各大学に求めているが、FDの定義・内容は論者によって様々であり、単に授業内容・方法の改善のための研修に限らず、広く教育の改善、更には研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員団の職能開発の活動全般を指すものとしてFDの語を用いる場合もある。

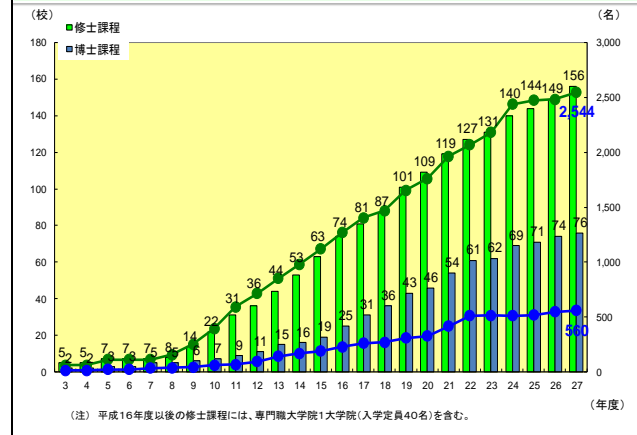
看護師養成制度(平成27年4月現在)



看護系大学数及び入学定員の推移

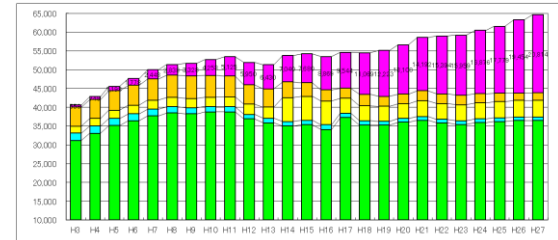


看護系大学院数及び入学定員の推移



看護師学校・養成所の入学定員の推移 (平成27年4月現在)

	H3 (40,806人)	H27 (84,841人)
■ 大学	658人	→ 20,814人
■ 短期大学	5,090人	→ 1,980人
■ 高等学校 (5年一貫制・専攻科)	1,825人	→ 4,420人 (H26年度定員)
■ 文部科学省指定専修学校	1,960人	→ 980人
■ 厚生労働省指定専修・各種学校	31,172人	→ 36,447人 (H26年度定員)



(年度)

看護学教育の特質をふまえた大学教員の能力開発へのニーズ

看護・医療の高度化・専門分化、保健医療福祉制度改革に伴い、
変化する役割にキッチアップし、
より高度な実践能力を持つ看護教員が求められている

役割の拡大等、看護職に対する社会の期待に対応するとともに、
国民の健康増進に資するため、
看護を学問として教授できる能力を持つ看護教員が求められている

わが国における大学改革のとして教育の質の向上のために大学教員の能力開発が行われている
大学化が進む看護学教育において、**看護学としての実践能力と看護を学問として教授する能力**の
両方を兼ね備えた大学教員の能力の育成・強化に資する全国的な体制を構築することが喫緊の課題

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

これまでのFD活動



全国の看護系大学のFD活動は**体系的に整理されておらず**、
試行錯誤を重ねている段階にあり、
各大学がバラバラで単発的な講演会の開催等に終始する等、
活動内容に偏りがある可能性が非常に高い

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

千葉大学におけるプロジェクトの概要

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

目的

各看護系大学が高等教育における看護学教育の特質を
ふまえた有効なFD(ファカルティ・ディベロップメント)を計画的に企画・実施・評価できるように支援すること

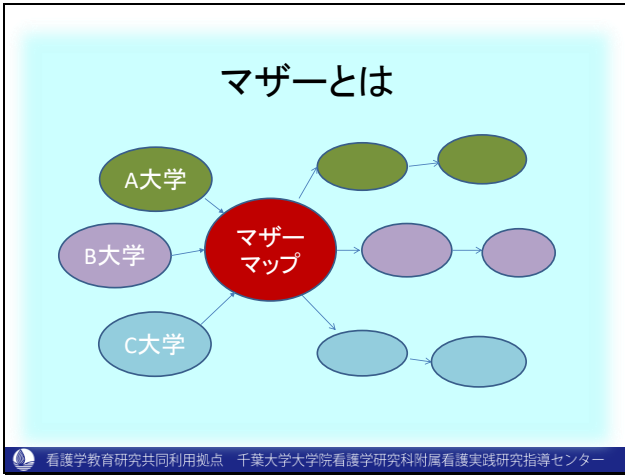
1. 高等教育における看護学教育の特質をふまえた体系的なFDマザーマップおよびFDプランニング支援データベースを開発する
2. 開発したFDマザーマップを看護系大学間で共同活用できる体制を構築し、全国の基幹校で研修を受けた教員(ファカルティ・ディベロッパー)により推進体制を構築する

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDマザーマップ

看護系大学において、看護学を学ぶ学生に教育活動を行う教員を対象に、看護系大学教員として備えるべき能力を行動レベルで示した、体系的な見取図

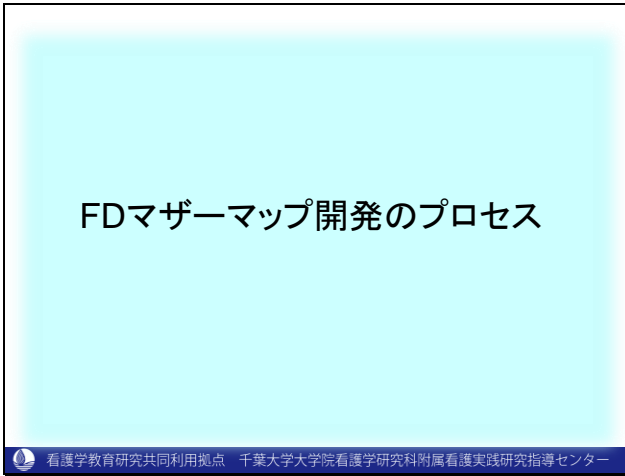
看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター



看護学教育におけるFDマザーマップの開発と 大学間共同活用の促進 年次計画(修正版)

事業フェーズ	看護学教育におけるFDマザーマップの開発フェーズ			大学間共同活用体制の構築と展開フェーズ		
	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成27年度(修正)
マザーマップ	開発準備 看護系大学職員に 求める能力の 明確化	開発 FDマザーマップ 開発	試用 FDマザーマップを 複数大学で試用	洗練 FDマザーマップの活用がパラレルな作成 ・高専校を中心としたFDマザーマップ活用に向 けた個別研修を実施	実用化 データベース(関係コ ンテンツ)・FD実務者の 収集・活用により大 学間共同活用システ ムの構築	大学間共同活 用体制の構築 ・大学間共同によるFD マザーマップ実用化に 向けたコンテンツ開発
FDプランニング支援 データベース	開発準備 現状のFDプログラ ムの実態調査	開発準備 各看護系大学のFDに 関する人的・物的 資源の情報をFDマ ザーマップに集める み、データベース化す る	開発・試用 全国に公開	活用 高専校を中心にFDマザーマップの 大学間共同活用システムを整備	実用化 データベース(関係コ ンテンツ)・FD実務者の 収集・活用により大 学間共同活用システ ムの構築	大学間共同活 用体制の構築 ・大学間共同による FDマザーマップの 開発と共同研究体制 の構築
専門家会議 情報発信	検討・検証・質の担保・開発準備 教員の能力を向上さ せるために強化す べきFDを検討 FD先進地域との会議	検討・検証・質の担保・開発準備 各大学が相互に活用 可能なFDの企画・実 施・評価支援システム 構築を検討	検討・検証・質の担保・開発準備 FDマザーマップの 試用後の効果の検証 ・国際発信の準備	成果の発信 FDマザーマップを 広く活用するための 情報発信を行う	成果の発信 FDマザーマップを 広く活用するための 情報発信を行う	成果の発信 FDマザーマップを 広く活用するための 情報発信を行う

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター



プロジェクト組織

<p>看護実践研究指導センター 北池 正 センター長 野地 有子 教授 和住 淑子 教授 黒田 久美子 准教授 ○宮芝 智子 特任講師 ○松田 直正 特任助教 ※銭 淑君 准教授 ※鈴木 友子 特任助教 ※若杉 歩 特任助教 ○H23年度のみ ※H24年度から ※H25年度から</p>	<p>専門委員会(高等教育系) 川島 啓二 国立政策研究所高等教育研究部 部長 佐藤 浩章 大坂大学全学教育推進審議教育学習支援部門 准教授 近田 政博 名古屋大学高等教育研究センター 准教授 加藤 かおり 新潟大学教育・学生支援機構大学教育機能開発センター 准教授 中島 英博 名城大学大学院大学・学校づくり研究科 准教授</p>
<p>専門家委員(看護学系) 松浦 和代 札幌市立大学看護学部 教授 吉沢 豊予子 東北大学大学院医学系研究科 教授 飯岡 由紀子 東京女子医科大学看護学部 教授 水山 くに子 富山大学男女共同学舎 学長補佐 阿曾 洋子 武庫川女子大学看護学部・看護学研究科設置準備室 教授 城西 智恵美 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授 井手 知恵子 大分大学医学部看護学科 教授 遠藤 和子 山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科 教授 正木 治恵 千葉大学大学院看護学研究科 教授 宮崎 美砂子 千葉大学大学院看護学研究科 教授・研究科長 吉本 照子 千葉大学大学院看護学研究科 教授 中山 登志子 千葉大学大学院看護学研究科 准教授</p>	

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDの定義

○教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称
(中教審答申2012.8.28)(狭義のFD)

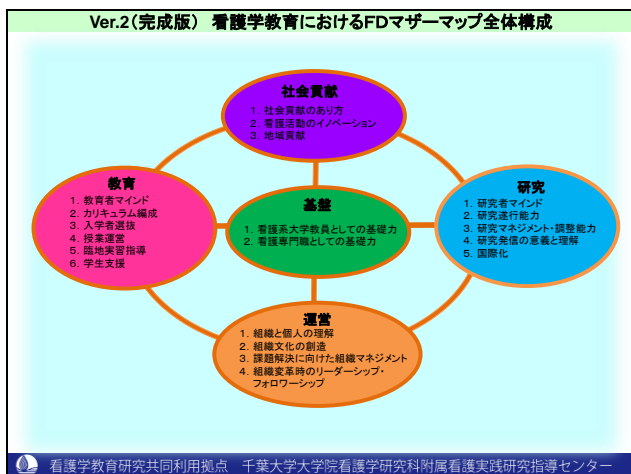
○広く教育の改善、さらには研究活動、社会貢献、管理運営にかかわる教員団の職能開発の活動全般を指す。授業内容・方法の改善のための研修に限らない(広義のFD)

FDの概念

授業内容・方法の改善⇒職能開発重視へ

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター





FDプランニング支援データベースについて

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDプランニング支援データベースとは

FDプランニング支援データベースとは

各看護系大学のFDの取り組みをサポートするために看護実践研究指導センターが作成したウェブサイトである。
(URL:<http://fd.np-portal.com/>)

当サイトには「看護学教育におけるFDマザーマップ」と、看護系大学が実際にに行ったFD企画を記録した「看護系大学のFD実績表」が掲載されている。

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDマザーマップの活用

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDマザーマップ活用のポイント

- 1)看護系教員の能力査定ではなく能力向上に向けた活用
- 2)各大学の必要性・実情に合わせた十分なカスタマイズ

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

組織としての活用例

- ★マザーマップと雛形として自大学独自のマップをつくりたい
- ★自大学の教員の特性やFDニーズを分析したい
- ★これまでのFD活動履歴を整理し評価したい
- ★FD担当者として、計画性をもってFDを企画したい
- ★これから行うFD活動の履歴を蓄積したい
- ★他の大学と連携してFD研修を分担したい
- ★採用面接や目標面接の指標として活用したい

教員個人としての活用例

- ★自身の教員としての能力を診断し、課題を見極めたい
- ★自身のこれまでのFD研修受講履歴を整理し、キャリア開発のエビデンスとしたい
- ★今後のキャリアプランにあった効果的なFD研修受講計画を立てたい

FDマザーマップ コンテンツ開発事業

FDマザーマップコンテンツ開発事業の全体イメージ

コンテンツ種別	FDマザーマップ紹介コンテンツ	FD企画者向けコンテンツ	FDマザーマップ対応型教材
ねらい・対象	「FDマザーマップ」のを知りたい、という看護系大学向けに、「FDマザーマップ」の概要を紹介する	看護系大学のFD企画者が、自大学のFDニーズを的確に把握し、効果的FDを企画するための組織分析の方法を身につける	FDマザーマップの各区分、要素、能力レベルに対応した看護系大学教員の能力を高める
形態	冊子 PPT教材 ビデオ教材	冊子 ビデオ教材 ワークショップ （センター事業「看護学教育ワークショップ」として年1回の定例開催）	ビデオ教材 事例集（冊子） ワークショップ
コンテンツ（案）	FDマザーマップ開発の経緯 FDマザーマップの構成 FDマザーマップの内容 FDマザーマップの活用 FDマザーマップを活用した大学の声	FDマザーマップによる自己診断 FDマザーマップによる組織課題の発見 FD研修企画に必要な基礎知識	「基礎」「教育」「研究」については、FDマザーマップの各区分、要素、能力レベルによってビデオ教材をシリーズ化（教材+FD活用ガイド） スーパー先生による授業ビデオ+スーパー先生インタビュー シリーズ 「社会貢献」good practice事例集「こういう活動も社会貢献になる！」シリーズ 「運営」…good practice事例集、ハラスメント対策事例集
備考	センター教員がこれまでの実績をふまえて作成	専門家会議メンバーの協力を得ながら開発	モデル校、先達校との共同開発

初めての臨地実習指導とその支援

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDマザーマップコンテンツ

千葉大学大学院看護学研究科
千葉大学大学院看護学研究科
東京慈恵会医科大学医学部看護学科
東京女子医科大学看護学部
岐阜県立看護大学看護学部

和住 淑子
星田久美子
高島 尚美
飯岡由紀子
山本 真実



提出期限が過ぎたレポートを受け取ってしまいどうすればいい？ 教員としての教育観とその背景にある組織のあり方を考える

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

FDマザーマップコンテンツ

千葉大学大学院看護学研究科 和住淑子
東京慈恵会医科大学医学部看護学科 高島尚美
東京女子医科大学看護学部 飯岡由紀子
千葉大学大学院看護学研究科 黒田久美子
岐阜県立看護大学看護学部 山本真実




FDマザーマップの活用の実際

ー 組織評価の試みー

福岡大学医学部看護学科
宗正みゆき


福岡大学医学部看護学科の紹介

- ▶ 福岡市郊外にある病院施設を有する総合大学
 - ・ 9学部31学科
 - 10研究科34専攻
- ▶ 敷地は福岡ヤクオクドームのフィールド面積約44個分



大学設立
81周年

積質穩思
極実健想
進剛中堅
取健正実



本学の建学の精神と教育研究の理念

福岡大学は、「建学の精神」に基づいた全人教育を目標として、「教育研究の理念」に掲げる三つの共存をはかることによって、真理と自由を追求し、自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与することを使命としている。

- ▶ 「人材教育 (Specialist)」と「人間教育 (Generalist)」の共存
- ▶ 「学部教育 (Faculty)」と「総合教育 (University)」の共存
- ▶ 「地域性 (Regionalism)」と「国際性 (Globalism)」の共存

本学ビジョン2014-2023

4つの重点項目

- ①時代の要請や社会ニーズに対応した教育・研究・医療の提供
- ②先進的で高度な研究活動の遂行
- ③アジア諸国との関係を中心にして行方グローバル人材育成
- ④福岡を中心とする地域の活性化と発展の促進



看護学科の教育理念・教育目標

教育研究の理念

学部教育と総合教育の共存

人材教育と人間教育の共存

地域性と国際性の共存

福岡大学の教育研究は、建学の精神に基づいた全人教育を理想とし、この三つの共存をはかることによって、真理と自由を追求し、自発的で想像力豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与することを目的とするものです。

教育目標

人間性を養う

柔軟な思考力を養う

協働・連携の能力を養う


学際的能力を養う

科学的探究の態度を養う

国際的視野を養う

本学科の背景

- ▶ 看護学科は開設9年目
- ▶ 専門学校教育から大学教育への転換
- ▶ 教員確保が困難
- ▶ 看護学科教員の多様な背景 (*)
 - ・ 教育経験が少ないが、臨床経験がある、あるいはその逆のパターン
 - ・ 教育経験はある (看護系大学を卒業した教員が少ない)




教育・臨床ともに経験を兼ね備えた教員が少ない

本学科の教員構成と組織の特徴 (*)

- ▶ 本学科の教員構成
 - 教授 8名
 - * その内医学系教員 2名
 - 准教授 11名
 - 講師 4名
 - 助教 8名
 - 助手 3名

半数以上の教員が新任又は就任3年未満である



大学教員としての経験年数、職位層が低い!

本学科の特徴（＊）

- ▶ 本学科の教育理念や教育目標は示されているが、卒業時到達目標が明確ではない
(2011年に提示された学士課程教育のコアとなる実践能力と卒業時到達目標を代用)

↓

本学の学部・学科の医療人養成の目的、Learning Outcomeが明確ではない

↓

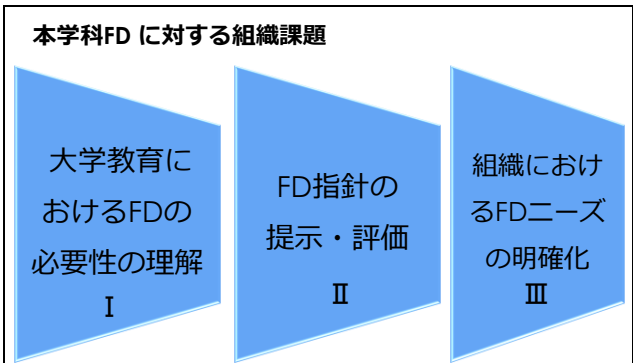
本学科の学士課程の教育の問題について、
学科全体で議論する場や機会がない

本学科のFDの現状

- ▶ 大学教育、大学院教育の動向に対する関心が薄い
- ▶ FDの意義についての理解が不十分
- ▶ 看護学科は他の学部・学科に比べ、歴史が浅くFDが成熟していない＊
- ▶ 年2回の授業評価のアンケートの実施、評価、研修会の開催＊、学外研修会への教員の派遣などを行っている
(＊内部質保証のための検証システムの構築、キャリア支援・キャリア教育、発達障害を抱える学生の学修支援を柱に意識改革、基盤づくりに取り組んでいる)
- ▶ 職位に対する役割・責任についての認識がさまざまで、学士課程教育の改革・改善に対する意識に温度差がある
- ▶ 領域間の連携がほとんどなく、教育全般の見直しや改善が困難

↓

組織としてのFDの方向性が不明確
体系的・継続的なFDの取り組みが困難



FDの組織課題への対策

- ▶ **大学教育におけるFDの必要性の理解**
 - ・ 大学教育、大学院教育の動向、医療社会ニーズの変化、看護系大学及び大学院の現状と課題の把握
- ▶ **FD指針の提示・評価**
 - ・ 看護学教育の特質を踏まえたFDマザーマップ(FD指針)の活用【基盤】【教育】
 - ・ FDマザーマップを使って自己評価 (現時点での能力評価、立ち位置を明確にする)

I、II に対し 「教育力の質向上を目的としたFD」の研修会を企画
- ▶ **組織におけるFDニーズの明確化**
 - ・ 来年度、FDマザーマップの自己評価をもとにワークショップを開催予定

FDマザーマップの活用の実際

研修会の目的

1. FDに関する自己評価・組織評価を踏まえて本学科におけるFDの必要性を理解する
2. FDマザーマップの活用意義を理解し、FDマザーマップによる組織および自己評価をもとに主体的にFDに取り組むことができる

評価用具 : FDマザーマップ【基盤】・【教育】

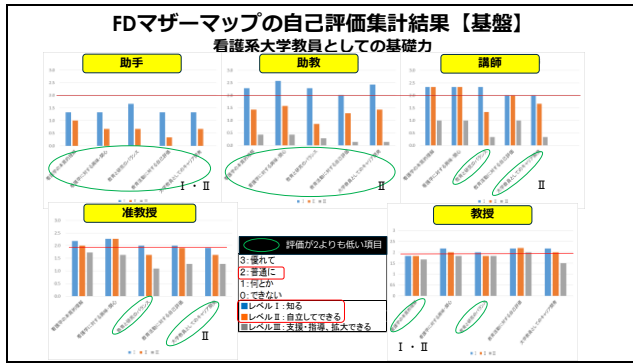
マップ項目の選択理由 : 【基盤】看護系大学教員として、看護専門職としての基礎力の見極め
【教育】看護学教育に特化した能力の見極め

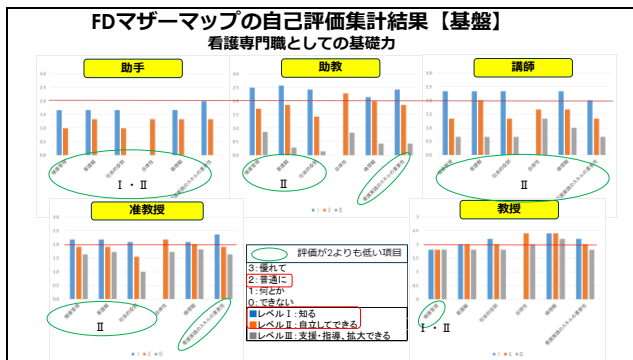
能力評価 : 「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」

▶ 各レベルの4段階評価 0：できない・1：何とか・2：普通に・3：優れて

対象 : 看護学科教員33名

分析 : 31名のデータを職位別の各項目の平均値から分析

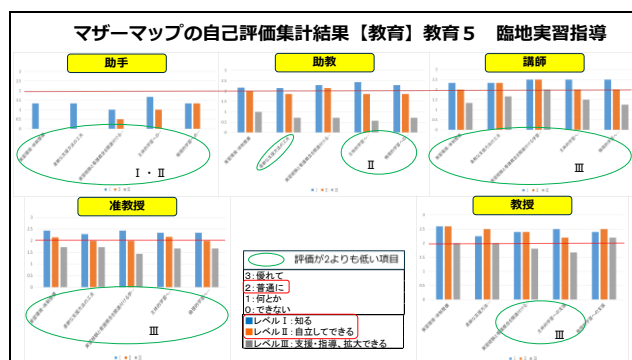
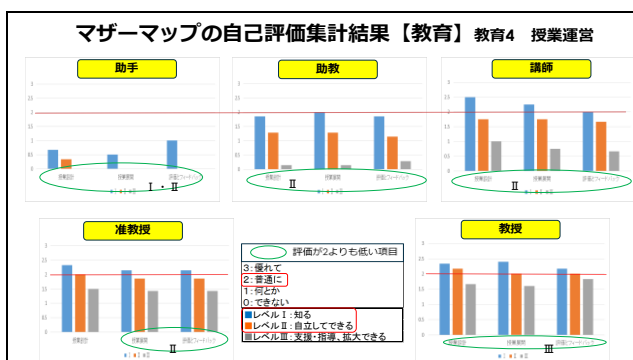




FDマザーマップの自己評価集計結果より【基盤】 看護系大学教員としての基礎力・看護専門職としての基礎力

- ◆ 分析結果より組織のFDニーズ、職位によるFDニーズが明確になる
 - ・職位によりどの項目の評価が低いのか、どの項目を高めていく必要があるのかを知ることができる
- ◆ FDニーズに応じた職位別のFD企画が可能になる
 - ・職位別自己評価を知ることにより、教員間で意識して指導的、教育的関わりができる
- ◆ 今回自組織の評価をして分かったこと
 - ・大学教員としての基礎力の組織の課題は、教育と研究のバランス、大学教員としてのキャリア開発
 - ・職位別にとると、助手であれば全項目においてⅠ・Ⅱのレベル、助教においてはⅡのレベルを高めるFDについて検討が必要
 - ・看護専門職としての基礎力の組織の課題は、健康管理、社会的役割

【基盤】 組織としてのFDの方向性が確認できる



FDマザーマップの自己評価集計結果より 【教育】教育4 授業運営・教育5 臨地実習指導

- ◆ 分析結果より、組織のFDニーズ、職位によるFDニーズが明確になる
 - ・職位によりどの項目の評価が低いのか、どの項目を高めていく必要があるのかを知ることができる
- ◆ FDニーズに応じた職位別のFD企画が可能になる
 - ・職位別自己評価を知ることにより、教員間で意識して指導的、教育的関わりができる
- ◆ 今回自組織の評価をして分かったこと
 - ・授業運営についての組織の課題は、Ⅱ自立できるレベルにおいて、授業設計、授業展開、評価とフィードバック
 - ・臨地実習指導についての組織の課題は、全要素においてⅡ自立できるレベルの強化、重支援・指導、拡大できるレベルの改善（特に教授、准教授、講師）
 - ・職位別にとると、臨地実習指導にかかわりの深い助手の自己評価がⅠ・Ⅱのレベルで低い評価

【教育】 組織として授業に関するFDの課題、臨地実習指導における職位別のFDの方向性の確認

2) FD マザーマップに関連した看護系大学との協働について

看護学教育研究共同利用拠点として千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、平成 23 年度より「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」事業に取り組んできました。

その一環として、多くの大学から講師派遣の問い合わせを頂いております。当センター、各大学とも人員や時間の限りはありますが、多くの大学との協働をすすめたいと思っておりますので、以下をご参照の上、お問い合わせをお願い申し上げます。

1. FD マザーマップ活用・コンテンツ開発・実践の往還と発展について

これまでの FD マザーマップと関連の開発事業を通して、看護系大学教員の「実践・問題意識」、「FD マザーマップ活用」、「FD コンテンツ開発」は、往還しながら、発展を促す関係であると示されました（図）。そこで、各大学が、「実践・問題意識」、「FD マザーマップ活用」、「FD コンテンツ開発」のどこかに参画してもらいながら、当センターも FD マザーマップを発展させていく関係性で協働できることがより適切であると考えております。

2. FD マザーマップ紹介

当センターでは、複数の FD マザーマップ紹介コンテンツを開発しております。FD マザーマップについてももう少し情報がほしい、あるいはマップを使ったチェックを試してみたい等のご希望の場合、まずは、FD マザーマップ紹介コンテンツをご活用の上、さらなる講師派遣が必要であるかをご検討下さい。現在、以下の FD マザーマップ紹介コンテンツをご紹介します。気軽にお問合せ下さい。

- ・開発の経緯（教員による説明 DVD 送付）
- ・FD マザーマップ構成・内容・活用方法（マップ冊子の送付、センターHP からの閲覧）
- ・FD マザーマップを使ったチェック（チェックファイル メール添付による送付）
- ・活用した大学の声（センターHP からの閲覧）

3. 当センターからの派遣目的や依頼内容について

講演や講師派遣の目的を明確にした上で、ご相談下さいますようお願いいたします。

また、日程等の選択肢が少ない場合には、希望の日時に応じられない場合があります。なるべくゆとりをもって、ご相談下さいますようお願いいたします。

6. FD マザーマップ活用実績とその評価

1) FD マザーマップ活用の実績

平成 23 年度に本プロジェクトが発足して以来、本センターが提供する企画や支援は多くの看護系大学と看護学教育に携わる教員に活用いただいた。平成 27 年度時点で、看護系大学は 241 校あるが、そのうち、ワークショップや FD 支援（講師派遣）を通じて本プロジェクトに参加した看護系大学は 159 大学にのぼる。また、看護学教育に携わる教員やスタッフにおいては、学会の交流集会参加者も含めると、わかっている範囲で、のべ 800 名以上の方たちに参加いただいた。

【FD 企画（黄色プロット）】

平成 25 年 6 月 FD 講演会「看護系大学における大学院教育の FD を考える」（千葉）

平成 26 年 8 月 「看護系大学教員のための FD 推進ワークショップ」（京都）

平成 26 年 10 月 平成 26 年度看護学教育ワークショップ

「看護系大学教員の職能開発とキャリア支援」（千葉）

平成 27 年 10 月 平成 27 年度看護学教育ワークショップ

「10 年後を見据えた看護学教育の質改善の取り組み」（千葉）

平成 27 年 11 月 FD 報告会「今こそ教員組織の教育力を高める」（東京）

【学会発表（青色プロット）】

平成 25 年 8 月 日本看護研究学会

平成 25 年 9 月 千葉看護学会

平成 25 年 12 月 日本看護科学学会

平成 26 年 2 月 EAFONS

平成 27 年 10 月 International Nursing Conference

【講師対応（赤色プロット）】

愛知医科大学	横浜市立大学
富山大学	岡山県立大学
札幌保健医療大学	新潟県立看護大学
佛教大学	広島文化学園大学
岡山県立大学	産業医科大学
森ノ宮医療大学	青森中央学院大学
上智大学	名桜大学
亀田医療大学	福岡大学
石川県立看護大学	四日市看護医療大学
慶應義塾大学	常葉大学



2) FD マザーマップ活用の評価

(1) FD マザーマップ利用申込大学へのアンケート

FD マザーマップの利用を申し込んだ大学は 28 校あり、そのうち、千葉大学と申し込みをしてからまだ間もない大学を除く 26 大学に FD マザーマップの活用状況に関するアンケートを依頼した。アンケートは平成 28 年 1 月に実施し、21 大学 (80.8%) より回答を得た。

【FD マザーマップの活用状況】

FD マザーマップを「活用している」「以前使ったことがあるが現在は活用していない」大学は併せて 13 大学 (61.9%) であり、「活用しようとしたが、できなかった」「活用していない」大学は 6 大学 (28.6%) あった。

FD マザーマップを活用したことがある大学はその活用方法として、「自大学教員の能力特性を分析」5 大学、「自大学教員の FD ニーズを分析」6 大学、「自大学独自の FD マップを作成」0 大学、「FD 企画を立案する際に参照」5 大学であった。その他と回答した大学は 6 大学あり、その活用方法として「各教員の年間目標立案に活用」、「FD マザーマップにて自己評価後、今後の自己課題を無記名にてアンケート」などが挙げられた。

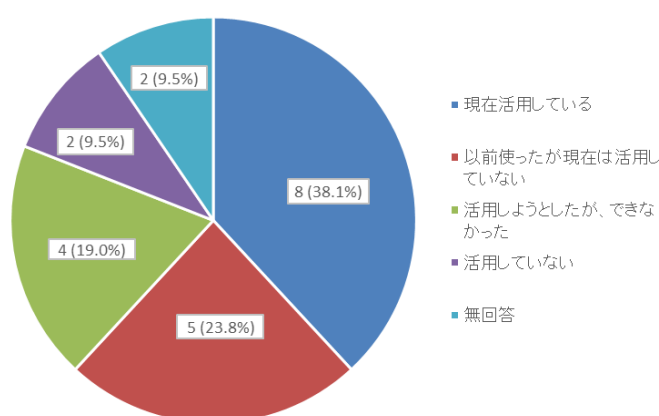
また、回答した大学の中には独自の職位別 FD マップをすでに作成している大学もあり、その大学においては「FD マザーマップは、看護系大学の教員に求められている能力についてあわせて検討することを希望する教員が利用できるように情報提供」していた。

一方で、「活用しようとしたが、できなかった」「活用していない」大学においては、その理由として以下の理由が挙げられた。

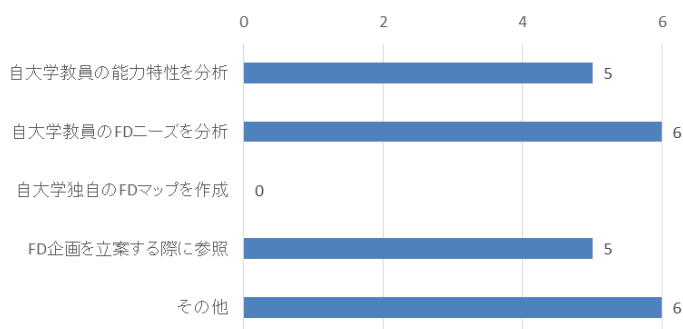
FD マザーマップを活用できなかった／活用していない理由

- ・ FD を専門に行う組織はなく、教授会傘下の FD 委員会が FD 活動を行っている。ここ数年間委員の交代が多く、全員が兼務であり職務への適応に時間を要したため、現状の本学の FD 活動を安定的に行うことを優先してきた。
- ・ 基盤・教育・研究・社会貢献・運営ごとに求められる能力の全体像等は把握（理解）できる様であるが、各教員レベルにおとしての活用となると困難を伴う。
- ・ FD マザーマップに関しての説明会を開催したが、FD マザーマップを使用して FD 活動を行うところまでのコンセンサスには至っていないため。
- ・ FD 委員会でマザーマップの説明を行ったが、それを組織的に活用するまでに至らなかった。

FDマザーマップの活用状況 n=21



FDマザーマップの活用内容 n=13 ※複数回答

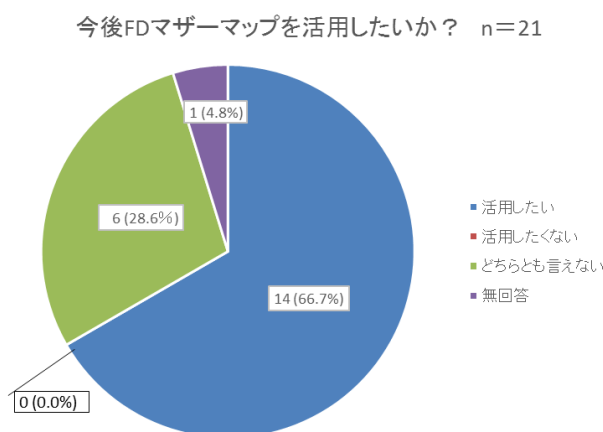


【FD マザーマップの今後の活用意向】

今後、FD マザーマップを活用したいか意向を聞いた質問では、「活用したい」14 大学、「活用したくない」0 大学、「どちらとも言えない」6 大学であった。

「活用したい」大学の理由としては、「FD のニーズを把握するために使用したい」「教員全体の課題が分かり、授業運営に関して取り組む必要性が抽出された」「学科で行っている組織的な FD 活動の全体が把握できるので活用する意義がある」など組織としての FD ニーズ把握および FD 企画の立案・検討のために活用したいとする意見が最も多かった。次いで多かったのは教員の自己分析のためであり「教員の能力を自己評価して、自身の長所と修正すべき点に気づいてもらうため」「看護系大学教員として求められる能力を自己分析」「教員の振り返りと課題を FD につなげていけるよう、継続的に FD マザーマップを活用していきたい」などの意見が挙げられた。その他に、FD マザーマップを活用することで、「他大学の FD 状況を知り、比較することで当学科での FD 活動への示唆を得たい」といった意見も挙げられた。

一方で、「どちらとも言えない」と回答した大学の理由としては、「組織として本学版のラダーの作成が課題となっているが、FD マザーマップに基づいてそれを行えるかは思案中」、「看護教員の教育力向上の必要性は十分に理解しており、喫緊の課題であると考えているが、実践レベルでの活用に困難感を伴っている」、「活用することのメリットとデメリットが十分に理解、共有、検討できておらず、現段階では何ともいえない状況である」、「使いやすいとは言えないし、使う利点が見いだせない」などと言った意見が挙げられた。



ここまでのアンケート結果より、FD マザーマップの活用は、自大学、自己分析に有用であり活用したいとするという意見がある一方、実際の FD 企画の計画・実施は困難であるとする意見が挙げられていた。アンケートの最後の問いである「本センターに関する要望、感想等」の自由記載にも、「マザーマップの全体構成を参照することで、看護系大学教員に求められる能力の要素が明確化される点は、組織として FD のテーマを計画する上で役に立った。一方、背景が多様な教員集団に、個人・組織としてそれぞれに適した FD の計画や実施を行うまでの活用は難しいと感じている」という回答があった。また、その他の要望として「カリキュラム改革のための知識やノウハウに関する研修会をしてほしい。地域包括ケアシステムが求められる時代の看護実践を変えるためにカリキュラムを変える必要があり、ニーズが高い」といった研修会を希望する声や、「研修のモデルを頂けると、今後研修会企画に組み込むことができ助かる」、「FD マザーマップの活用例をご提示いただくことで、FD マザーマップに対する理解が進んだり、具体的な活用をイメージできたりするようになるのではないか」「マザーマップを紹介したが、それを活用するノウハウまで伝えきれなかった。マザーマップの有効活用によって成果を上げている施設の紹介等があると参考になる。活用例があると個人から始めて、組織的な活用へ繋がる」といった具体的な

活用例を示してほしいといった要望があった。平成 27 年度はこの問題を解決すべく FD コンテンツの開発に取り組んできたが、まだ情報の周知は進んでいない状況にあり、また、各看護系大学の抱える多様なニーズに対応するためにも、今後もさらに多くの FD コンテンツを開発する必要がある。

また一方で、「FD プランニング支援データベースへの入力は行ってきたが、実際には閲覧以上の活用方法がなく、参加していることのメリットがあまり実感できない」、「他大学の傾向や実践が閲覧、共有できるよう、データを蓄積してほしい」との意見も寄せられている。FD プランニング支援データベースは看護系大学の FD 推進のために構築したデータベースであるが、登録校数は 28 校にとどまっている現状がある。今後、本センターが看護学教育研究共同利用拠点としての役割を果たしていくためにも、情報の収集・蓄積・発信にさらに力を注いでいく必要がある。

7. 情報収集・蓄積・発信

1) ホームページ・発行物

(1) 看護実践研究指導センターホームページ

平成22年9月より、看護実践研究指導センターのホームページを開設した。ホームページには、等FDプロジェクトをはじめとするプロジェクト事業や、センターで開催する研修事業、最新の活動情報などの掲載を行っている。

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/>

The screenshot shows the website for the Center for Education and Research in Nursing Practice at Chiba University. The browser address bar displays www.n.chiba-u.jp/center/. The page layout includes a top navigation bar with links for HOME, SITE MAP, and ENGLISH. Below this is a main banner image of a building with cherry blossoms, with the text "教育・研究・実践をつなぐ" (Connecting Education, Research, and Practice). The main content area is divided into several sections:

- お知らせ (Notice):** A list of recent news items with dates and brief descriptions, such as "FD成果報告会「今こそ教員組織の教育力を高める」を開催しました" (FD Achievement Report Meeting 'It's time to raise the educational power of the faculty organization' was held).
- 看護実践研究指導センター概要 (Center Overview):** A section with a list of links for various topics like "ご挨拶" (Greetings), "センター概要" (Center Overview), "ケア開発研究部" (Care Development Research Department), etc.
- 看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト (Project Overview):** A section detailing the development of the FD Mother Map and its use in inter-university cooperation.
- 研修事業 (Training Programs):** A section listing various training programs, including "看護学教育指導者研修" (Nursing Education Supervisor Training) and "看護学教育ワークショップ" (Nursing Education Workshop).

(2) FD プランニング支援データベース

本データベースは、看護学高等教育における FD の取り組みをサポートするために看護実践研究指導センターが独自に開発した web サイトである。当サイトには「看護学教育における FD マザーマップ」、看護系大学教員の能力開発のために作成された「FD コンテンツ」、看護系大学が実際に行った FD 企画を記録した「看護系大学の FD 実績表」が掲載されている。

本データベースはだれでも自由に閲覧することができる「一般用」ページと、本センターより発行した ID・パスワードを利用してログインする「登録大学用」ページがあり、登録大学用ページには一般用ページよりもより多くの機能が実装されている。

URL : <http://fd.np-portal.com/>



<トップページ>



<FD マザーマップ全体図>



<FD コンテンツ>

(3) ニュースレターの発行

本センターでは平成 23 年度より毎年ニュースレターを発行しており、平成 27 年度には Vol.5 まで発行している。ニュースレターには、本プロジェクトを含むセンター事業の成果や案内等が掲載されており、本事業についても毎年のトピックを掲載している。また、今までに発行されたニュースレターは、センターホームページにも掲載されている。



URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/outline/newsletter.html>

2) FD 企画

(1) キックオフ講演会

平成 23 年 6 月 28 日(火)、「看護学教育における FD マザーマップの開発」プロジェクトが本年度より開始となったことを記念して、「看護学教育における FD マザーマップの開発キックオフ講演会—看護系大学の輝く未来を担う FD のあり方を問う—」を開催した。

川島啓二氏(国立教育政策研究所)による基調講演「大学教育の革新と FD マップ」では、高等教育における FD 活動、とりわけシステムティックに行う FD 活動の方法論等について示された。

また、Sally Brosz Hardin 氏(サンディエゴ大学)による講演「Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development from a Dean's perspective」では、看護系大学における研究活動の推進と研究成果の発信、さらには研究活動に専念できる組織的な環境整備の重要性が示された。次に、Cynthia D. Connelly 氏(サンディエゴ大学)によるビデオを用いた講演「Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development: A Researcher's Fresh Perspective」では、サンディエゴ大学を中心とした学際的で組織的な研究活動のあり方について、具体的な研究内容をもとに、研究者の視点から述べられた。最後に北池正氏(前看護実践研究指導センター長)による講演「看護学教育における FD マザーマップの開発」では、現在の看護系大学が抱える課題をもとに、看護学教育研究共同利用拠点として取り組むべき本プロジェクトの方向性について、5 年間の計画とともに示された。

看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
看護学教育におけるFDマザーマップの開発
キックオフ講演会
—看護系大学の輝く未来を担うFDのあり方を問う—

日時 平成23年
6月28日(火)
14:00~16:00 (受付開始13:30)

場所 千葉大学けやき会館大ホール
千葉県千葉市稲毛区弥生1-33
千葉大学西千葉キャンパス内

プログラム

- 開会の挨拶
山本 恵司
千葉大学理事 (企画担当)
- 基調講演 大学教育の革新と FD マップ
川島 啓二 氏
国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官
日本高等教育開発協会会長、大学教育学会常任理事、初年次教育学会理事
- Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development from a Dean's perspective
Sally Brosz Hardin, PhD, RN, FAAN
Dean and Professor
University of San Diego, Hahn School of Nursing and Health Science
- Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development: A Researcher's Fresh Perspective
Cynthia D. Connelly, PhD, RN, FAAN
Professor
University of San Diego, Hahn School of Nursing and Health Science
- 看護学教育における FD マザーマップの開発
北池 正
附属看護実践研究指導センター長
※遠方遠征を行います。 ※試験の事情により、プログラムが変更となる場合があります。

(対 象) 看護系大学の教員、大学院生等、本講演会に関心のある方
(申込方法) お名前(ふりがな)、ご所属、ご連絡先(電話番号、e-mail アドレス)を明記の上、件名を「キックオフ講演会参加希望」としてメール、または FAX にてお申し込みください。
■e-mail: nursing-practice@office.chiba-u.jp ■FAX: 043-226-2459
(申込締切) 平成 23 年 6 月 16 日(木)
■郵送申込書にご記入の上、FAX でお申し込みください。
■e-mail からのお申込みいただけます。

無料

【注 意】 看護学教育研究共同利用拠点
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
看護学教育におけるFDマザーマップの開発と大学間共同活用促進プロジェクト
〒260-8672 千葉県千葉市中央区安養 1-9-1
TEL: 043-226-2459 [直通、FAX 共用] URL: <http://www.n.chiba-u.jp/center/>

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/use/symposium.html>

(2) センター研究会

平成 24 年 6 月 29 日 (金)、サンディエゴ大学からコニー・カラン先生、アン・メーヨー先生を講師にお迎えしてセンター研究会を開催した。コニー先生からはコミュニティの中で看護研究をすすめることについてや、国際研究についてご講義いただいた。また、メーヨー先生からは 2010 年に出版された IOM レポート: Future of Nursing に基づき、質の高い、患者中心のケアのためには、看護師の教育レベルの向上、看護を実践するうえでの現場での障壁をなくすこと、看護のリーダーシップの必要性などについてお話いただいた。本研究会を通して、質の高い看護職を要請することの重要性、またそれを達成するための FD の重要性を再確認することができた。



学内教員・院生の皆様へのご案内

看護実践研究指導センター研究会
IOM Report: The Future of Nursing
～米国 IOM Report の看護教育改革およびFDについて～

日時：平成24年6月29日(金)
15時～17時

場所：COE会議室

講師：米国サンディエゴ大学看護学部
アン・メーヨー先生
コニー・カラン先生



アン・メーヨー先生
コニー・カラン先生

センター30周年記念講演会のために来日される先生方をお見せ、米国のIOM(Institute of Medicine)レポートを中心に看護教育改革とFDについて学びます。参加希望者は、6月27日(水)12時までにご連絡ください。
(センター特任助教 鈴木友子 内線: 5673, Email: nursing-practice@office.chiba-u.jp)

平成 25 年 6 月 28 日 (金)、サンディエゴ大学からスーザン・インストン先生、シンシア・コネリー先生をお迎えしてセンター研究会を開催した。研究会のテーマは、前回と同様、「IOM Report : The Future of Nursing」とし、IOM Report の内容、およびその背景である米国の医療や看護の現状について、より深く理解することを目的に、企画した。研究会では、昨年のプレゼンテーション内容を確認した後、討議を行った。討議では、国民の医療ニーズに応えるために看護職のリーダーシップの発揮や役割拡大が求められている一方で、様々な障壁によって役割拡大が進まない現状が共有され、そのような状況の中で、



看護職がどのように取り組んでいく必要があるのかについて、教育・実践・研究それぞれの観点から活発な意見交換がなされた。会の中でインストン先生は “We can’t be silent. We have to speak.” と述べられ、看護職は自身の行っている実践活動とその意義について、もっと社会へ発信していく必要があることを再確認した。研究会を通して、当センターが現在取り組んでいるプロジェクトの意義を改めて確認するとともに、参加者それぞれの関心に応じて貴重な学びを得ることができた。

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/use/research.html>

(3) FD 講演会

平成 25 年 6 月 29 日（土）、FD 講演会「看護系大学における大学院教育のFDを考える」を開催し、全国から 116 名の参加者を迎えた。

Susan L.Instone 氏の講演「米国における大学院教育－DNP コース Developing DNP Faculty: Opportunities and Challenges」では、より高いレベルの看護実践者を養成する、DNP コースの新たなプログラムデザインについて、続いて Cynthia D.Connelly 氏の講演「米国における大学院教育－PhD コース Educating the Next Generation of Nurse Scientists」では、看護研究者への期待が増大する現代において、看護における研究者の育成と科学の発展を促進するために、新たな世代の教育をどのように考えていくのかについて、最後に近田政博氏の講演「大学院における研究室教育の課題と展望」では、日本において大学院に入学してくる現代の学生に必要な、研究室教育について講演いただいた。各講演後には活発な意見交換がされ、盛況のうちに会を終了することができた。



▲Suzan L. Instone 博士
(DNP コース部長)

Cynthia D. Connelly 博士
(PHD コース部長)

URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/use/fdlecture.html>

(4) 看護系大学教員のための FD 推進ワークショップ

平成 26 年 8 月 7 日（木）、「看護系大学教員のための FD 推進ワークショップ」を開催した。本ワークショップは日本高等教育開発協会（JAED）の支援を受け、また FD マザーマップに実際に取り組んでいる佛教大学に会場をご提供いただき開催した。ワークショップは 50 名の募集に対し、全国より 64 名の皆さまからご応募いただいた。

講演「FD マザーマップの開発とその活用」では、当センターの和住淑子教授より開発の経緯を説明した後、FD マザーマップの実際の活用例として、佛教大学の松岡千代先生、岡山県立大学の難波峰子先生より、それぞれの大学における取り組みについてご紹介いただいた。

その後のプログラムでは、実際に FD マザーマップを使いながら参加者の皆様とワークを進めた。



ワークショップ①では国立教育政策研究所の川島啓二先生より「FD マザーマップの自己診断」ワークショップ②は 2 グループに分かれ、ワークショップ②-A は名古屋大学高等教育研究センターの中島英博先生より「教員個人の到達目標の構築」、ワークショップ②-B は帝京大学高等教育開発センター井上史子先生より「組織的課題の発見」にそれぞれ取り組んだ。ワークショップ③は新潟大学教育・学生支援機構の加藤かおり先生より「全体の共有と振り返り」として、ワークショップ②の成果の共有、1 日を通しての

学びの振り返りを行った。参加者の皆様からは「マザーマップの具体的な活用方法がみえてきた」、「自大学の課題が他大学でも課題と知ることができた」、「FD 企画立案につながる具体的なワークショップをやってほしい」等の貴重なご意見を多数頂戴することができた。



URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/use/workshop.html>

(5) タイ国のコンケン大学 FD ミーティング

平成 27 年 2 月 2 日、タイ国のコンケン大学より Khanitta Nuntaboot 学部長、Pakvilai Srisaeng 副学部長（研究）、Nichapatr Phutthikhamin 副学部長（国際）、Busaba Somjaivong 副学部長（学生支援）が来学され、日本、タイ両国の看護学教育および FD について本センターの教員と下記のとおり討議、情報交換を行った。

■タイ国の看護学教育について

政府は大学全体に対して FD 支援を行っているが、看護学教育への直接の支援はない。しかしタイの看護カウンスルが FD の基礎となるガイドラインを作成しており、各大学の看護学部はそれに加えて独自のプランニングを作成し取り組んでいる。タイの看護に関する組織は看護協会と看護カウンスルの 2 つがあり、両者は別組織であるが常に協力し合っている。看護カウンスルは現在の看護学教育の問題点・課題をふまえ、将来を見据えた 10 年計画を立案し政府に申し立てを行っている。タイでは現在看護系教員が 4000 人不足している。タイの大学教員は必ず PhD を取得していなければならないが、看護学教育においては人手不足であることから修士修了者でありかつ 1 年以上の教育経験（TA を含む）を有する者であれば教員になっているという現状がある。ただし修士修了後に教員になった者は Ph.D を取得することが奨励されており、そのためのサポート体制もとられている。また、タイにおいては大学院の入試に 2 年以上の臨床経験を要するため、臨床経験のないものが教員になることはない。

■コンケン大学について

コンケン大学は①Teaching、②Research、③Academic service、④Cultural preservation の 4 つミッションがある。コンケン大学はこれらのミッションを遂行するため、新任教員のための 4 か月間の教育プログラムを用意している。コンケン大学には 3 つの研究センターがあり教員になるための基礎的な研究に関する研修を行う。またコンケン大学は 28 学部あり、各学部が有するセンターとコラボして研修を受けることもできる。また一方で、看護カウンスルに認定されたプログラムがコンケン大学看護学部では同時に行われており、これら研修のコンビネーションで新任教育を行っている。

Teaching と Research の両立は大変難しいが、看護学部では 2 つのセメスターの間の約 4 か月間（4 月～7 月）に研究を行うよう決めている（この期間も有給であり、米国とは違う）。ただし、この期間内に研究のすべてが行われる訳ではなく、セメスター中も授業（教育）優先ではあるが研究を行っている。学生が実習に出る際、教員も一緒に病院やクリニックに同行するので、各施設で研究が行えるよう、すべての教員に Pakvilai 先生がサポートしている。ただし、サポートがあっても研究を行わない教員もいる。Academic service は大学で開発した知識を使っていくためのサービスであり、faculty practice（病院等でのサービス）と general population（地域でのサービス）を行っている。Cultural preservation は文化の継承・保存を意味している。タイでは、地域ごとの生活や文化を大切にしている。実際の臨床現場ではナースキャップを着用しないが、コンケン大学では学部 2 年生に戴帽式を行っており、学生の看護師としての意識づけのために大事なセレモニーとして継続されている。また、大学には学生が教員に敬意を示す日として teacher's day が設けられており、これもタイの culture である。

■FD マザーマップについて

レベルが 3 段階設定されているが、どの職位がどのレベルに対応するのか目安があるとよい。また、大学において組織として教員が有するべき能力の割合が示されてもよいかもしれない（例；レベル I は 20%、II は 40%、III は 40%など）。タイも看護教員が不足していることから、日本のように看護学教育の教員の質担保が問題になるかもしれない、その時はこのマップを参考にできるだろう。

(6) 平成 26 年度看護学教育ワークショップ

平成 26 年 10 月 20 日（月）～22 日（水）、平成 26 年度看護学教育ワークショップ「看護系大学教員の職能開発とキャリア支援 ～FD マザーマップの活用を通して～」を開催し、全国の看護系大学より、初日の講演の部 36 名、全日程 53 名の先生方にご参加いただいた。



本ワークショップでは、看護系大学教員の職能開発とキャリア支援に焦点をあてた FD 推進をテーマとして、「看護学教育における FD マザーマップ」を活用することとした。初日は多くの大学が参加しやすく、新たな情報を共有できることを目的として講演会とシンポジウムを行った。基調講演「看護系大学教員キャリアの構造と課題～FD マザーマップの枠組みから～」では講師に国立教育政策研究所 高等教育研究部 部長の川島啓二氏をお迎えし、看護系大学教員とは何者であり、看護系大学職員としてどのような能力が求められるのか、また、その職能開発を促すにはどのような支援が必要なのかについてご講演いただいた。特別講演「変化する社会とこれからのキャリア開発とその支援」では、講師に慶應義塾大学名誉教授 花田 光世氏をお迎えし、キャリアを自ら開発していくことについて、自分らしさや肯定的自己意識の重要性について提言された。

2 日目と 3 日目は、FD 推進を検討することを目的とし、基礎、発展ワークショップおよびミニ・セミナーを通じたグループディスカッションを行った。基礎ワークショップ「FD マザーマップによる自己分析」は川島啓二氏、名古屋大学高等教育研究センター中島英博氏を講師に、FD マザーマップの基本的な使い方と FD マザーマップを活用した自大学での FD 企画について取り組んだ。発展ワークショップは参加者が二手に分かれて行われた。中島英博氏と東邦大学看護学部の近藤麻理氏の各講師のもとでワークショップ「マザーマップを用いた FD 企画」が行われ、7～8 名のグループを編成してグループワークに取り組んだ。その後、各グループの検討内容の共有（ミニ・セミナー）、全体討議を通じて情報共有を行い、活発な意見交換が行われた。



http://www.n.chiba-u.jp/center/training/workshop_h26.html

(7) 平成 27 年度看護学教育ワークショップ

平成 27 年 10 月 28 日（水）～30 日（金）、平成 27 年度看護学教育ワークショップ「10 年後を見据えた看護学教育の質改善の取り組み～臨地実習の質保証に焦点をあてて～」を開催し、全国の看護系大学より講演の部 56 名、全日程 64 名の先生方にご参加いただいた。

1 日目の講演の部では基調講演「人口問題から 10 年後の課題と展望」に講師として医療経済研究機構所長（一般財団法人医療経済研究・社会保険協会）、国立社会保障・人口問題研究所名誉所長の西村周三氏をお迎えし、京都大学副学長（教育担当）のご経験も踏まえた、看護系大学の教育の質改善のために留意すべき 10 年後の課題と展望について人口問題から提言いただいた。



特別講演「臨地実習の質保証に向けた新たな取り組み」の講師には、看護における質と安全教育（QSEN: Quality and Safty Education in Nursing）のリーダーのひとりである、Jane Barnsteiner, PhD, RN, FAAN ペンシルバニア大学看護学部名誉教授を招聘した。バーンスタイナー氏は、QSEN の目的は看護職が働く医療制度の質と安全を持続的に向上させるための 6 つのコンピテンシーを身につけた看護職を教育することであり、2006 年以降全米の看護学部の質と安全教育の実態評価を実施し、認証基準への適用を進めてきたと話され、臨地実習においても、初学者から患者・

家族中心の医療システム環境に責任を持つ教育の必要性と、教員としての意志、考え方、実行について提言された。

2 日目の「自組織の組織分析のためのワークショップ」では、九州大学基幹教育院 川島啓二教授に、FD マザーマップを組織分析にどのように活用できるかについてご講演いただいた。また、福岡大学医学部看護学科の宗正みゆき准教授に、FD マザーマップを活用した組織分析の実例をご紹介いただいた。福岡大学では、「基盤マップ」、「教育マップ」のチェックシートを使って各教員が能力の到達度を自己評価した結果を集計し、FD 課題の明確化に役立てておられ、当センターの和住淑子教授から組織の外部者の立場から集計結果を見た場合、どのような教員組織の特徴と FD 課題を読み取ることができるかについてフィードバックし、体系的な FD の展開に向けたマザーマップ活用の可能性と、当センターが担うべきコンサルテーションの内容について述べた。これらを踏まえ、3 日目は各グループの成果発表と全体討議を行い、各大学様々な立場から活発な意見交換が行われた。

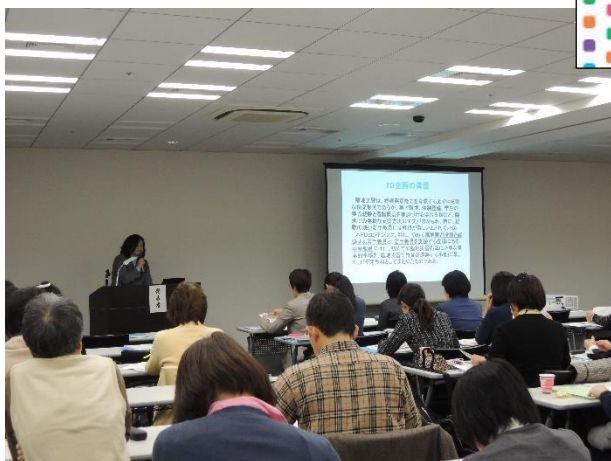


URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/training/workshop.html>

(8) FD 成果報告会

平成 27 年 11 月 23 日 (月・祝)、FD 成果報告会「今こそ教員組織の教育力を高める～FD マザーマップの自律的な展開方法～」を開催し、全国の看護系大学より 61 名の先生方に参加いただいた。

本報告会は平成 23 年度から取り組んでいる「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進」プロジェクトの最後のイベントであり、プロジェクトの成果である FD コンテンツ開発について報告した。FD コンテンツはテーマごとに他大学の教員とも協力して開発しており、平成 27 年度中に開発に取り組んだ FD コンテンツの中から 7 つのコンテンツを紹介した。FD コンテンツは、「期限の切れたレポートを受け取りますか?」「初めての実習指導とその支援」など日々教育の現場で直面しうる局面をテーマに挙げており、ご参加いただいた皆様からは「FD コンテンツを活用したい」、「FD コンテンツについてもっと詳しく知りたい」、「ハラスメントやマネジメントレベルの教員へのコンテンツを開発してほしい」等の貴重なご意見を多数頂戴した。



URL : <http://www.n.chiba-u.jp/center/use/report.html>

3) 学会発表

(1) 日本看護研究学会 交流集会

平成 25 年 8 月 22 日、秋田で開催された日本看護研究学会第 39 回学術集会に参加し、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」のテーマで交流集会を開催した。

交流集会では、山形県立保健医療大学の遠藤和子教授（元看護実践研究指導センター特任准教授）から看護学教育における FD マザーマップの開発と活用について、看護実践研究指導センター北池正センター長から全看護系大学を対象とした FD 実態調査について、同センター鈴木友子特任助教から FD プランニング支援データベースの利用について、それぞれ発表した。また、国立教育政策研究所高等教育研究部より川島啓二部長をお招きし、高等教育における FD の進め方についてご発表頂いた。交流集会にはおおよそ 50 名の方にご参加頂き、FD マザー



マップについて活発な質疑応答がなされた。また 8 月 22 日、23 日の両日、附設展示会に同テーマでポスターや、看護学教育における FD マザーマップ活用ガイド ver.1（試行版）、FD プランニング支援データベース等の展示を行い、ご来場いただいた方々との意見交換を行った。

(2) 千葉看護学会 交流集会

平成 25 年 9 月 14 日、千葉看護学会第 19 回学術集会に参加し、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用の促進プロジェクト」のテーマで交流集会を開催した。



交流集会は、看護実践研究指導センター長北池 正教授の進行のもと、山形県立保健医療大学の遠藤和子教授（元看護実践研究指導センター特任准教授）から看護学教育における FD マザーマップの開発と活用について、また同センター鈴木友子特任助教から FD プランニング支援データベースの利用についてそれぞれ発表した。交流集会是小さい会場で行われたが、参加者との距離が近くアットホームな雰囲気の中進められ、忌憚ない意見交換が行われた。

(3) 日本看護科学学会 交流集会

平成 25 年 12 月 7 日第 33 回日本看護科学学会学術集会に参加し、「看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間共同活用について」本センターの前センター長 北池 正教授の進行のもと交流集会を開催した。発表では和住淑子教授から「看護学教育における FD マザーマップの開発について」、黒田久美子准教授から「FD マザーマップ (試行版) の活用について」、鈴木友子特任助教から「FD プランニング支援データベースの利用について」それぞれ発表した。

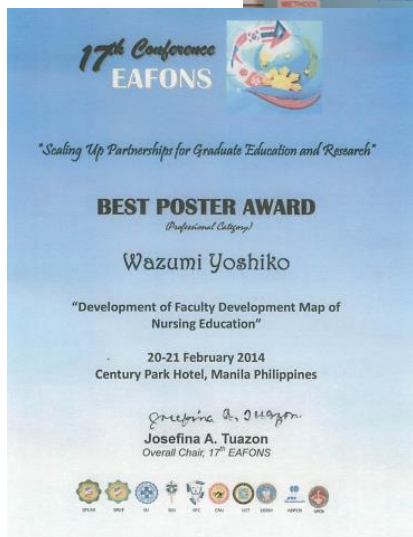
交流集会には 22 名の方にご参加いただき、発表後に意見交換を行った。また会場には文部科学省石橋みゆき看護教育専門官が来場されており、FD マザーマップの活用を全国の看護系大学に推進していくことの必要性についてコメントを頂くことができた。



(4) East Asian Forum of Nursing Scholars International Conference ポスター発表

平成 26 年 2 月 20~21 日にフィリピン・マニラにおいて開催された 17th East Asian Forum of Nursing Scholars International Conference (EAFONS) において、センターが開発した看護学教育における FD マザーマップ (試行版) に関する研究成果をポスター発表した。

中国、台湾、韓国、日本の研究者の方々がポスターを見に来てくださり、中でも、看護学教育における FD ニーズは、中国が一番強い印象を受けた。なお、このポスターは、Professional Category の BEST POSTER AWARD を受賞し、表彰された。



DEVELOPMENT OF THE FACULTY DEVELOPMENT MOTHER MAP IN NURSING EDUCATION

Y. Wazumi, RN, PhD; K. Kuroda, RN, PhD; T. Suzuki, RN, MN; S. C. Chien, RN, PhD; A. Noji, RN, PhD; T. Kitaoka, PhD

The Center for Education and Research in Nursing Practice, Graduate School of Nursing, Chiba University, Chiba, Japan

AIMS
The Center for Education and Research in Nursing Practice has been working on a project to construct a mother map of faculty development (FD) in nursing education and to promote collaborative activities among nursing universities since 2011. We will develop a master plan of faculty development (called FD mother map) and a database for FD planning to keep pace with progress towards higher levels of professionalism and a more highly educated university-based student body.
The purpose of this study was to develop the FD mother map in nursing education for the trial.

METHODS
Council of Experts was organized to accomplish the goal of the project. Members included 19 faculties from 3 nursing universities and 4 specialists of higher education in Japan. Council of Experts identified competences required of nursing university faculty members, according to position, from education, research, nursing practice and management perspectives. Based on the identified competences, Council of Experts developed an appropriate FD mother map for nursing education.

RESULTS
Council of Experts identified 20 factors of competences required of nursing university faculty. Those 20 factors were divided into 5 categories. Those were **FUNDAMENTALS, EDUCATION, RESEARCH, SOCIAL CONTRIBUTION and MANAGEMENT**. Council of Experts also examined the 20 factors and found out that each of these competences had 3 different levels of mastery. Three different levels were primary, independent and advanced. The structural framework of the map was also decided based on the 5 categories and the 3 different levels of mastery. Developed guide book of FD mother map included not only the contents of competences but also the way of application.

CONCLUSIONS
By utilizing the FD mother map as a master plan of faculty development, each nursing university would be able to clarify their states of FD activities and to set the goal of FD planning easily.

(5) International Nursing Conference 招聘講演

平成 27 年 10 月 22 日～23 日に韓国ソウル市において開催された 10th International Nursing Conference において、野地有子教授が招聘講演 “Nursing Faculty Development and Collaborative Activities between Universities” を行った。全国共同利用拠点として取組んできた看護教育における FD マザーマップの開発と大学間共同利用に関する日本の取組みを紹介し、大会長であり韓国看護科学学会理事長の Dr.Sookbin Im から韓国と日本の看護教育の課題の類似性が述べられた。

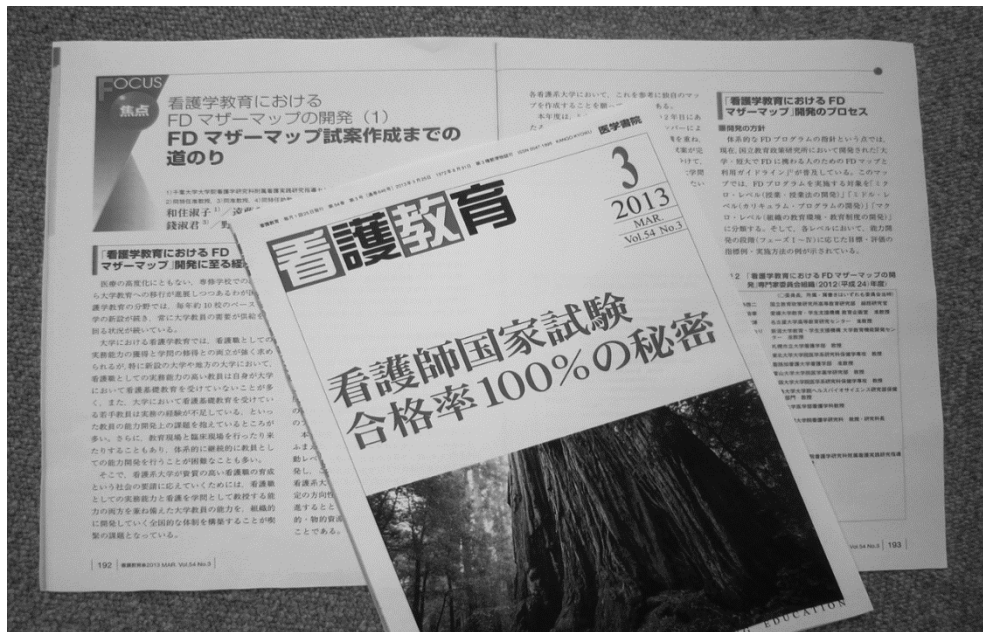


▲ INC2015 大会長 Dr.Sookbin Im と野地教授

本大会にはアジア圏を中心に日本を含む世界 15 か国 750 名余りの参加者が集い、米国、英国、中国、タイ国からの最新の取組みも紹介され、会場での質疑応答は熱気に溢れていた。本招聘講演への質問では、FD マザーマップを活用した評価方法についてあげられ、教員個人だけでなく大学組織や、学生からの評価を含む多様な評価軸の可能性について意見交換が行われた。

4) 雑誌掲載

雑誌「看護教育」においてFDマザーマップが2回取り上げられた。第54巻第3号に「看護学教育におけるFDマザーマップの開発(1)FDマザーマップ試案作成までの道のり」が掲載され、第54巻第4号に「看護学教育におけるFDマザーマップの開発(2)FDマザーマップの活用法」が掲載されている。



和住淑子, 遠藤和子, 黒田久美子, 鈴木友子, 錢 淑君, 野地有子, 北池 正: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発(1)FDマザーマップ試案作成までの道のり. 看護教育, 54(3), 192-199, 2013

遠藤和子, 黒田久美子, 鈴木友子, 錢 淑君, 野地有子, 和住淑子, 北池 正: 看護学教育におけるFDマザーマップの開発(2)FDマザーマップの活用法. 看護教育, 54(4), 298-303, 2013

5) 国内外における情報収集・発信

(1) 平成 23 年 6 月 22 日～25 日 韓国・韓国教育開発院および梨花女子大学

出張者：野地有子

目的：FD マザーマップ開発プロジェクトの国際発信（東南アジア編）の研究連携のため

内容：韓国高等教育開発院（KEDI）を訪問し、Dr. Kwang-Hee Chung 部長と面談し、韓国の高等教育の動向、および、大学教育力プロジェクトについて具体的に資料提示を受けながら聴き取り調査を実施した。6 月 23～25 日は、梨花女子大学で開催された第 1 回 Global Qualitative Health Research Congress（世界 25 か国 700 名の参加者）に出席し、本センターの FD に関するプロジェクトの国際発信を行った。韓国、フィンランド、ドイツ、香港、米国、カナダおよび日本等の研究者と意見交換し、研究連携の基盤づくりを実施した。

(2) 平成23年9月 京都大学高等教育研究開発推進センター

出張者：松田直正

目的：京都大学高等教育研究開発推進センター主催の第4回FDネットワーク代表者会議への参加

内容：各FD ネットワークの代表者より、それぞれのFD活動について発表があり、看護学教育研究共同利用拠点である看護実践研究指導センターは「看護学教育におけるFDネットワークおよび看護学教育研究共同利用拠点の現状と展望」をテーマに発表を行った。

(3) 平成 24 年 2 月 20 日～22 日 米国・ニューヨーク大学メディカルセンター

出張者：和住淑子、黒田久美子

目的：看護学教育における病院と大学との協働、関連の FD・SD に関する情報収集

内容：ニューヨーク大学メディカルセンターにおける、病院と大学との協働、関連のFD・SDに関する活動の紹介を受け、看護管理・教育の観点から意見交換を行った。ユニークな活動として Attending Nurse プログラムが紹介された。これは、新人スタッフ看護師やインターン医師の教育を目的としたプログラムであり、3 年前より実施されていた。先輩医療職が新人看護師や研修医とともに院内をラウンドし、ロールモデルとなるものである。病院長や看護管理者もラウンドに参加しているが、さらに大学教員もラウンドに参加しており、これが教員の FD にもなっている。また教員は多くの共同研究を病院スタッフと協働で行っており、その協働を通じて、お互いの FD・SD の役割が果たされている様子が理解できた。

(4) 平成 24 年 8 月 2 日～19 日 米国・University of San Diego

出張者：野地有子

目的：プロジェクトおよび研究打ち合わせ

内容：平成 23 年キックオフ講演で招聘したサンディエゴ大学看護学部長 Dr. Hardin および、平成 24 年講演会で招聘した Professor Mayo、Professor Curran に面談し、その後のプロジェクト進捗について報告し今後の進め方について助言をいただいた。特に、Hardin 学部長より、次年度講演会の講師について推薦を得た。また、滞在期間に開講されたシュミレーションセンターにおける授業および演習に参加させていただき、学生ならびに臨床教授らと FD に関する意見交換を行った。大

学院の授業にも参加し、社会人など多様な学生への対応の実際を学んだ。サンディエゴ大学と当センターの継続した交流により、相互の教育研究の発展が期待される。

(5) 平成 24 年 9 月 5 日 京都大学高等教育研究開発推進センター

出張者：北池 正、遠藤和子、鈴木友子

目的：京都大学高等教育研究開発推進センター主催の第 5 回 FD ネットワーク代表者会議への参加

内容：各 FD ネットワークの代表者より、それぞれの FD 活動について発表があり、看護学教育研究共同利用拠点である看護実践研究指導センターは「看護学教育研究共同利用拠点の現状と課題」をテーマに北池センター長が発表を行った。

(6) 平成 24 年 10 月 27 日 岐阜大学サテライトキャンパス

出張者：黒田久美子、遠藤和子

目的：第 46 回医学教育セミナーとワークショップの参加および見学、懇親会参加

内容：関係者への挨拶、3 つのワークショップの見学、セミナーおよび懇親会に参加した。岐阜大学医学教育開発研究センター長および、今回の企画責任者から、共同利用拠点としてのワークショップ、セミナーの開催について、具体的な企画方法と現状の問題等について教示を得た。懇親会にて、企画担当者やワークショップ講師等が、今後、本看護実践研究指導センターとの協働を希望していることを確認した。

(7) 平成 24 年 11 月 23 日、24 日 くにびきメッセ（島根県立産業交流会館）

出張者：鈴木友子

目的：大学教育学会 2012 年度課題研究集会への参加

内容：本集会は「グローバル社会における大学教育の質保証」をメインテーマに、基調講演と 5 つのシンポジウム「中退問題から考える大学の質保証」「共通教育の新段階」「FD の実践的課題解決のための重層的アプローチ」「資格課程カリキュラム・マネジメントにおける大学人の構成と機能」「学生支援に携わる教職員に求められる能力とは何か」が行われた。本集会を通じて、現在の日本の高等教育が直面している課題や、FD の新たな取り組みに関する知見を得ることができた。同時に今後看護学教育における FD を推進していく上で、看護学以外の領域の FD の取り組みから知見を得ることも重要であることを認識した。

(8) 平成 24 年 12 月 15 日 熊本大学生命科学研究部 看護学専攻棟 E506

出張者：遠藤和子

目的：国際シンポジウム—看護学・保健学における大学院教育と研究—への参加

内容：看護学系大学の大学院教育と研究に関して、3 題の講演があった。①アメリカの“The Future of Nursing”（報告書）に基づいた、高度実践看護師（APN）の人材確保のための、博士課程教育の動向について、②日本の看護教育の動向、③大学院研究の国際化とその進め方、である。講演内容と質疑から、大学院教員の能力とその人材養成について、開発中の FD マザーマップの枠組みが確認され、研究における要素について新たな知見があった。

(9) 平成 25 年 2 月 4 日～10 日 カナダ・アルバータ大学

出張者：遠藤和子

目的：看護学教育におけるFDに関する情報収集

内容：アルバータ大学における看護学教員に対する教育・研修の紹介を受け、看護に特化したFDについて意見交換をした。アルバータ大学大学院の Donna M Wilson 教授、Jane Drummond 副総長、Anita E Molzahn 研究科長、Florence Myrik 副研究科長、Sheree T Kwong See 教授、Gail Low 教授、Ma Ewan 大学の Gail Couch 教授である。教員の能力開発のためのシステムとして、学際的な他学部との協働メンバーによる取り組みがなされていた。開発中のFD マザーマップは、特に教員としての発達に即してレベルを示した点が斬新であると評価を得て、今後も共同研究等で交流を続けたいとの希望があった。

(10) 平成 25 年 2 月 20 日～23 日 バンコク・タイ

出張者：大野稔子、鈴木友子

目的：EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) へ参加し、東アジアにおけるFDに関する知見を得る

内容：本フォーラムは“Developing International networking for Nursing Research”をテーマに開催された。基調講演は“Strategies for Strengthening Faculties & Doctoral Students”と“Translation of Science & Research into Nursing Practice”をテーマとする、2つが行われた。看護研究を積極的に進めることの重要性とともに、博士課程の学生および教員の研究能力向上の必要性について、また、看護実践能力の向上と教育改善の必要性について講演された。本フォーラムを通じて、東アジアの看護学系大学におけるFDの重要性と、国境を越えたネットワークを築いてゆくことの重要性を確認した。

(11) 平成 25 年 3 月 19 日～24 日 米国・University of San Diego

出張者：北池正、野地有子、赤沼智子、大野稔子、鈴木友子

目的：サンディエゴ大学の教員と当センターで開発したFD マザーマップについて内容の検討を行う。

また平成 25 年 6 月 29 日に開催するFD 講演会に招聘予定の Dr. Connelly、Dr. Inston と講演会の打ち合わせを行う

内容：3 月 20 日 (水) 6 月講演会の打ち合わせ会議 (Dr. Connelly)

3 月 21 日 (木) FD マザーマップの検討会 (Dr. Mayo, Dr. Urden & Dr. Hawkins)

3 月 22 日 (金) 6 月講演会の打ち合わせ会議 (Dr. Inston)

(12) 平成 25 年 9 月 京都大学高等教育研究開発推進センター

出張者：北池 正

目的：京都大学高等教育研究開発推進センター主催の第 6 回 FD ネットワーク代表者会議への参加

内容：各 FD ネットワークの代表者より、それぞれのFD 活動について発表があり、看護学教育研究共同利用拠点である看護実践研究指導センターは「看護学教育研究共同利用拠点における現況と課題」をテーマに発表を行った。

(13) 平成 26 年 9 月 12 日 京都大学高等教育研究開発推進センター

出張者：鈴木友子

目的：京都大学高等教育研究開発推進センター主催の第 7 回 FD ネットワーク代表者会議への参加

内容：各 FD ネットワークの代表者より、それぞれの FD 活動について発表があり、看護学教育研究
共同利用拠点である看護実践研究指導センターは「看護学教育研究共同利用拠点における現況と
課題」をテーマに発表を行った。

(14) 平成27年10月19日(月)、第2回平成28年2月6日(火) TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター

出張者：吉本照子

目的：大学教職員の能力開発に関する懇談会への参加

内容：研究倫理の義務化、知財教育の導入、国際化、合理的配慮を要する学生への対応等、大学教育
の課題が山積する中で、各拠点の役割遂行が期待されている。一方、拠点事業の財源確保等、持
続的な運営に多くの課題がある。こうした中で各拠点や地域FDネットワークの経験を共有し課
題を明確にし、情報や共同事業の可能性について議論を交わした。

FD拠点としての機能強化に向け、看護学教育および本センターの活動状況を発信し、多分野
のFD拠点の活動内容、看護学分野との共通課題および看護学分野固有の課題に関する情報を得
た。なお、本懇談会は東北大学高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センターにより提案
された。

III 今後の予定

FD マザーマップは様々な職位の教育者の能力を発展させるための道標であり、今後、開発した教員個人および教育組織の教育力について、教育成果である学生の卒業時到達目標達成度により、有効性を検証する必要がある。

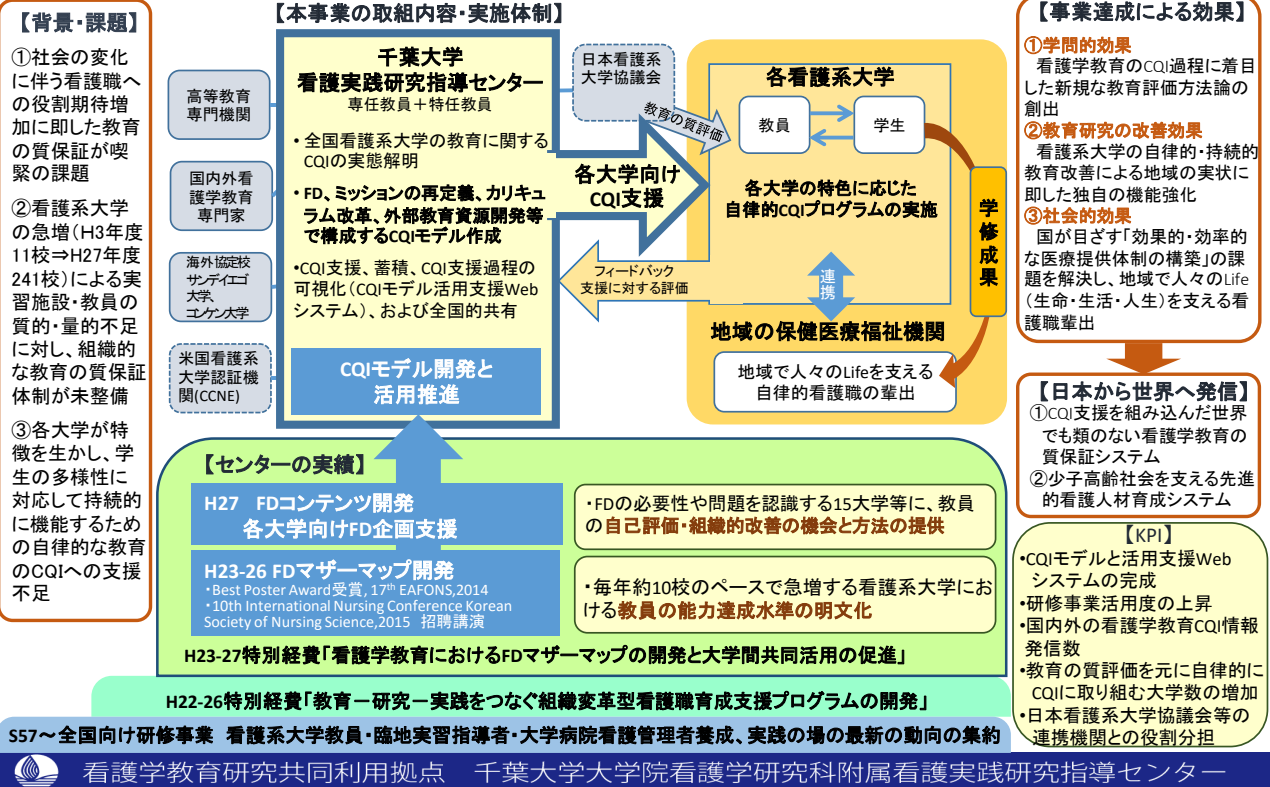
そこで平成 27 年度に、文部科学省の医療人養成受託事業「看護師等の卒業時到達目標等に関する調査・研究」に応募した結果、採択され、平成 27 年度から「学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発」に取り組んでいる（平成 29 年度まで）。本研究の目的は、看護系大学が「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標（到達目標 2011）」等を活用しながら、卒業時到達目標の達成に向けて、着実に教育の質改善を継続できる（CQI）ように、各看護系大学の多様性・主体性を前提とした評価方法を提言することである。こうした提言を手がかりに、各看護系大学が FD マザーマップおよび共用性の高いコンテンツを活用しながら、効果的・効率的に CQI を推進できるように、CQI プロジェクトの一環として、継続して FD 支援を行う。

平成 28-31 年度はさらに、全看護系大学が看護職に対する社会的要請の変化に即して、自律的に教育の質を保証するために、看護学教育の CQI モデルの開発と活用推進による成果および機能強化をもとに、CQI に対する支援体制を構築する。

看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進

事業概要の説明図

【事業目的】 国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement: CQI)モデルを開発し、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援する



IV 資料

1. 用語解説

- ・アドミッションポリシー 入学者選抜方針のこと。
- ・FD (ファカルティ・ディベロップメント) faculty development 大学教員の資質を開発すること。広く教育の改善、さらには研究活動、社会貢献、管理運営にかかわる教員団の職能開発の活動全般を指す。授業内容・方法の改善のための研修に限らない(狭義のFD)。

FDは2008年の大学設置基準の見直しによって、大学院教育課程及び、学士教育課程において実施が義務化された、教育の質的保障を実現するために教育内容や教育方法の改革に取り組むための手段の一つである。中央教育審議会の答申では、狭義のFDの定義「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称」が用いられており、大学設置基準では、広義にFDを用いている場合もある。(参考：中教審答申2012.8.28の用語集)。

- ・FD マザーマップ 看護系大学において、看護学を学ぶ学生を対象に教育活動を行う教員を対象に、看護系大学教員として備えるべき能力を行動レベルで示した、体系的な見取り図である。看護系大学教員とは、看護職の有免許者を中心に、看護学教育に携わる人である。看護職の免許を有する大学教員である看護学系教員の現状から、看護職としての実務能力と看護を学問として教授する能力の両方を兼ね備えた大学教員としての能力を区分しその中の要素を特定し、さらに強化すべき能力を要素として選定した。その上で要素それぞれの能力開発の段階をレベルとして示した。

本マザーマップを基に、各大学が組織的な取り組みとして自大学のFDプログラムの点検や、各大学の現状から必要に応じた独自のFDマップの開発に活用できる。また、教員個人が看護系大学教員としての能力を客観視する際にも有用なツールとなり得る。

- ・FD マップ FDプログラムの体系表のこと。2009年に国立教育政策研究所FDer研究会によって開発された。開発の目的は、主として、大学教育センター等においてFDを専任で担当する教職員(以下、FDer：ファカルティ・ディベロッパーという)、FD委員会の委員、管理者など、FDを担当する大学関係者に、何がFDであるのか、FDの目標は何か、FDの効果的な実施方法はどのようなものか、FDの成果は何によって明らかになるのかについて一定の枠組みを示すことである。

このFDプログラムを体系化したものを示すことによって、各大学の大学教育センター等において活動する、FDer、FD委員会の委員、管理者などの関係者がFDプログラムのあり方を検討するための有用なツールとなり、大学教育に携わる者としての教員のキャリア開発を目的に設計されたプログラム(FDプログラム)として、FDの取り組みに活用されている。

(参考：国立教育政策研究所FDer研究会編,大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン,国立教育政策研究所,2009.)

- ・カリキュラム 教育目的に即して、学生の学習活動を援助するために、教育施設が計画的・組織的に編成した教育内容を示すもの。

(参考：杉森みどり,舟島なをみ：看護教育学第5版,医学書院,2012.)

- ・「基盤」 基盤とは、「物事を支えるよりどころ。物事の土台」(広辞苑)であるが、FDマザーマップでの「基盤」は、看護系大学教員としての基礎力、看護専門職としての基礎力から形成される。看護にアイデンティティをもつ者としての基礎的な素養(知識、スキル、マインド)と、大学教員としての基

本から構成される素養を基に看護系大学教員の根源を形成するものをいう。

- ・**キャリア支援** 専門的スキルを要する職業に就く人の、職業人として、人間的な発達も含めて成長を助けること。
- ・**「教育」** マザーマップでの「教育」は、看護系大学教員に必要な能力の側面として区分されたものを意味する。
- ・**教育者マインド** 看護系大学における教育者マインドとは、学生の個人としての能力を引き出し、看護専門職としての成長に資する意図をもって行う教育活動における、その人の考え方、姿勢、態度、信念。
- ・**教材化** その授業のために作られたのではない素材を、教材として組織し直し組み立ててゆくことを言う。教育目標の達成に向けて、学生のレディネスに合わせ、かつ、知的好奇心を刺激するように、学習しやすい形に変えること。素材は教材化されてはじめて教育的意味を持つ。
(参考：辰野千寿編：学習指導用語事典,教育出版,68-70,1988. 安彦忠彦：新版現代学校教育大事典,ぎょうせい,356,2002)
- ・**区分** 看護系大学教員に必要な能力を側面として示したものの。本マザーマップにおける看護系大学教員に必要な能力は、基盤、教育、研究、社会貢献、運営の5つの区分から構成される。
- ・**クリティカルシンキング** (批判的思考) 自分の思考について考えること。これはメタ認知であり、思考をめぐらしているとき、その思考について考えることである。自己の推論能力と他者の推論を理解する能力とそれに自信をもつことが重要である。計画すること、モニターすること、認知的スキルを修正することなどであり、クリティカルシンキングができる人になれば、一貫してよい選択ができるようになる。
- ・**研究者コミュニティ** (研究者共同体) コミュニティは共同体、集合体と訳され、共通の特徴を持つ集団といえる。研究者共同体には、同僚・研究組織・機関(大学・研究所)や、学会等の研究仲間(学際的、国際的広がりを含む)、研究費を出す組織・機関のコミュニティなどがある。
- ・**研究者マインド** 真理を追い求めるという姿勢を持ち、偏見や先入観や世間的な常識に惑わされることのない態度。正直さと事実の前に謙虚であること、努力する心の向き。異なる意見や他者を尊重する姿勢を含む。
- ・**研究フィールド** 学術研究を行う際に、テーマに即した研究活動を行う場(現地)のこと。特に看護学研究では、研究者の目的とする研究協力者(情報提供者)の生きた経験を把握するため、その場で生起する現象、これを成立させている人々や組織、しくみ等も含まれる。
(参考：モース&フィールド著 野地有子訳：モースとフィールドの看護研究,日本看護協会出版会,2012)
- ・**講義** 授業形態のうちの1つ。演習と共に学内での授業に位置づく。講義-受容学習が原基本的な授業形態とされ、教員から学生に概念を担っている言葉を直接提示でき、概念獲得、知識習得が主要目的とされる。看護学においては、知識の部分収集のような講義では不十分とされ、発問-思考学習、討議学習、発見学習、課題学習、プログラム学習、問題解決学習など、様々な形態がとられている。特に学部教育では、臨地実習に先行するもの、その体験の意味の深化を促進させるものとして、臨地実習と関連するものもある。
- ・**授業** 授業とは、「相対的に独立した学習主体としての学生の活動と教授主体としての教員の活動とが相互に知的対決を展開する過程」¹⁾であり、看護教育学においては、この過程の成立を、「教授=学習

過程」として表現する。それは、授業が、学習者にとって学習目標達成に向け教材を媒介にして知識や技能を獲得し、精神的・身体的諸機能を自己形成していく過程であると同時に、教員にとってそれを支援する教授活動を展開しながら、教員としての能力を開発していく過程であることに起因する。授業には様々な形態があり、主に、講義、演習、実習がある。看護学では、臨地における実習が教育上の特徴をなしている。

1) 吉本均編：現代教授学（講座現代教育学 5）,福村出版,pp61,1978.

（参考：杉森みどり,舟島なをみ：看護教育学第 5 版,医学書院,2012.）

- ・**組織文化** 組織文化は経営学で用いられている用語だが、その定義は研究者で異なる。代表的ないくつかの定義から言えることは、組織文化とは「組織成員が生み出し、共有している、価値観・信念・哲学・考え方・規範など」である。看護学における組織文化の実証研究からは、看護組織において、各病棟には「病棟のルール」が存在している。病棟の変革を計画する管理者は、その「病棟文化」を理解せずに簡易に看護方式を変更するよりも、変えようとするものがそれまで大切にしてきた要素に気づき、段階的に必要な変化を起こしていく必要がある、とされている。

（参考：井部俊子,中西睦子監修：看護管理学習テキスト第 2 版 第 2 巻 看護組織論,日本看護協会出版会,2012.）

- ・**組織文化の創造** 組織のリーダーが組織文化の創造者である。管理者は、組織変革を試みるときに、変革に向けた戦略が自組織の文化に適応しているかどうかを判断しなければならない。適応が難しいようであれば、戦略を変更するか、もしくは組織文化を変えなければならない。組織文化を変えてまで成し遂げなければならないような変革でなければ、戦略を変えることで対応できるが、組織変革が急務で重要課題である場合には、組織文化の変革も必要である。組織文化を変革させるためには、どのように文化つくられるのかを知っておく必要がある。そのためには組織の歴史を振り返り、今の組織ができてきた経緯を知ることが大切である。

（参考：井部俊子,中西睦子監修：看護管理学習テキスト第 2 版 第 2 巻 看護組織論,日本看護協会出版会, 2012.）

- ・**ディプロマポリシー** 学位授与方針のこと。

- ・**要素** 看護系大学教員に必要な能力として区分を示す際に、携えるべき資質を項目として具体的に示したもの。看護系大学教員に必要な能力を構成するもの。

- ・**臨地実習** 看護が行われるあらゆる場で、直接患者、家族などに接する実習。看護学教育における授業の一形態で、主に学外授業として実施される。実習のカリキュラム上の位置づけは講義、演習による学科目と同等とみなされることで、看護学教育の特徴を示す。保健師助産師看護師学校養成所指定規則により用いられる用語。1996 年(平成 8 年)のカリキュラム改正時に、看護師の役割拡大に対応し、在宅看護論の表示などから、実習の場も病院に限らず看護の対象の生活する場であることを強調したことで、実習（1967～89）または臨床実習（1951～67、1989～96）から呼称が変更された。

授業としての臨地実習では、教員が看護現象を教材化する能力を持つことが必要不可欠な要件である。ここでの看護現象の教材化とは、学生が臨地実習において遭遇する多様な現象の中から実習目的・目標達成に向け効果的な現象を選択し、再構成するという教員の教授活動を意味する。

（参考：杉森みどり,舟島なをみ：看護教育学第 5 版,医学書院,2012.）

- ・**レベル** 看護系大学教員の能力について発展の段階を示したもの。FD マザーマップでは、FD プログ

ラムを実施する対象を、「レベルⅠ：知る」「レベルⅡ：自立してできる」「レベルⅢ：支援・指導、拡大できる」として分類し、能力開発の段階を示した。開発当初は、レベルⅠを新任教員、もしくは助教、レベルⅡを講師・准教授、レベルⅢを教授、管理者、として設定した。しかし、看護系大学においては、看護実践の現場から直接教授に招聘されるなど、実践家としての経験が大学教員としての経験の蓄積を示すとは限らず、必ずしも職位とレベルが一致しないことから、各大学にとって活用しやすいように、職位から離れてレベルを想定した。各レベルは、ⅠからⅢに向かって発展してゆくように構成されている。

2. 参考文献

- ・アメリカ心理学会 (APA) 著 前田樹海他訳 (2011) : APA 論文作成マニュアル, 医学書院.
- ・有本章(2005) : 大学教授職と FD, アメリカと日本, 東信堂.
- ・安藤輝次 (2009) : 学校ケースメソッドで参加・体験型の教員研修, 株式会社 厚徳社
- ・一般教育学会編(1997) : 大学教育研究の課題, 玉川大学出版部.
- ・井上幸子他編(2001) : 看護学大系 10 看護における研究, 日本看護協会出版会, 183-197.
- ・井部俊子編集(2009)実践家のリーダーシップ 現場を変える、看護が変わる、ライフサポート社
- ・井部俊子・中西睦子監修 (2012) 看護管理学習テキスト第2版 第2巻 看護組織論、日本看護協会出版会
- ・井部俊子・中西睦子監修 (2012) 看護管理学習テキスト第2版 第4巻 看護における人的資源活用論、日本看護協会出版会
- ・上田礼子編著 (2006) : 看護大学・大学院教育の到達目標, 多賀出版
- ・S. D. Hardin (2011) : Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development from a Dean's Perspective, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター : 看護学教育における FD マザーマップの開発、キックオフ講演会—看護系大学の輝く未来を担う FD のあり方を問う—, 2011.6.28, 講演内容
- ・岡田加奈子・竹鼻ゆかり編著 (2011) : 教師のためのケースメソッド教育, 少年写真新聞社
- ・高等教育情報センター (2003) : 教員評価制度の導入と大学の活性化, 高等教育シリーズ第 24 集. 地域科学研究会.
- ・高等教育情報センター (2008) : 教員評価制度の運用と大学風土改革, 高等教育シリーズ第 29 集. 地域科学研究会.
- ・国立教育政策研究所 FDer 研究会編(2009) : 大学・短大で FD に携わる人のための FD マップと利用ガイドライン.
- ・佐藤みつ子・宇佐美千恵子・青木康子 (2014) : 看護教育における授業設計, 医学書院
- ・C. D. Connelly(2011) : Trends in American Nursing Higher Education and Faculty Development : A Researcher's Fresh Perspective, 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター : 看護学教育における FD マザーマップの開発、キックオフ講演会—看護系大学の輝く未来を担う FD のあり方を問う—, 2011.6.28.講演内容
- ・渋谷美香 (2011) : 初めての教育委員 研修企画のキホン, 日本看護協会出版会
- ・ジョン・P・コッター、黒田由貴子監訳(1999)リーダーシップ論 いま何をすべきか, ダイアモンド社.
- ・杉森みど里、舟島なをみ (2012) : 看護教育学第5版、医学書院.
- ・Sorcinelli MD et al (2006) : Creating the Future of Faculty Development ,Anker publishing.
- ・Diane M. Billings, Judith A. Halstead 著、奥宮暁子他訳 (2014) : 看護を教授すること 大学居員のためのガイドブック原著第4版, 医歯薬出版株式会社
- ・千葉大学 (2011) : 平成 23 年度 看護学教育ワークショップ「教員の教育力、実践力、研究力、協働力を組織的に高める」 報告書 H23.10, グループ別発表 第3グループ 教員の研究力を組織的に高める, 76.
- ・中央教育審議会 (2005) : 「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—答申」

- 第1章 国足的に魅力ある大学院教育に向けて 第2節 基本的な考え方を支える諸条件について, H17.9.
- ・中央教育審議会(2005):「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—答申」
 - 第2章 新時代の大学院教育の展開方策.
 - ・中井俊樹編著(2014):看護現場で使える教育学の理論と技法, メディカ出版
 - ・Nichols, E.F.: Professional Development Needs of Collegiate Nursing Faculty (1987): Perceptions of Faculty and Administrators, Unpublished doctoral dissertation, University of Acron, Acron.
 - ・日本看護学教育学会 理事長 佐藤禮子(2010):看護教育の教育環境に関する実態調査と質向上に資するための提言 2010.3, V提言, 54-55.
 - ・日本看護系大学協議会FD委員会(2011):「看護学教員に求められる資質・能力獲得情報と支援に関する実態およびFD活動の方向性(平成21・22年度活動報告書)」
 - ・野嶋佐由美他(2011):看護学系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書.
 - ・舟島なをみ監修(2014):看護学教育における授業展開—質の高い講義・演習・実習の実現に向けて, 医学書院
 - ・Vitae(2010): Researcher Development Framework, Careers Research and Advisory Center Limited.
 - ・ケン・ベイン著 高橋靖直訳(2009):ベストプロフェッサー, 玉川大学出版部
 - ・モース&フィールド著 野地有子訳(2012):モースとフィールドの看護研究, 日本看護協会出版会.
 - ・文部科学省(2012):「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」 H24.6.
2. 大学改革実行プラン主要事項説明資料⑬客観的評価指標の開発.

本報告書は、大学における看護学教育の体系的な FD 活動を広く支援するために作成されたものであり、自己の看護系大学教員を対象とする FD 活動を行おうとする大学は、看護学教育研究共同利用拠点である千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターに連絡し、本報告書の使用条件に関する書面を看護実践センターと取り交わすことで、無償で、本報告書の全部または一部を複製、頒布又は一部改変して使用することができます。

上記の場合以外、本報告書を無断で複写等することは著作権の侵害として禁じられます。

看護学教育における FD マザーマップの開発と大学間協働活用の促進
活動・成果報告書（2011 年～2015 年度）

平成 28 年 3 月発行

発行 千葉大学大学院看護学研究科 附属看護実践研究指導センター
看護学教育における FD マザーマップの開発と
大学間共同活用の促進プロジェクト

連絡先 〒260-8672 千葉市中央区亥鼻 1 丁目 8 番 1 号
Tel 043-226-2459
nursing-practice@office.chiba-u.jp